

労働者もヘルメットをかぶった

佐世保 / 7日間の斗いの記録



関西地区反戦連絡会議

'68.2.19

発刊にあたって

私達が気付かず、ゆるやかな日常生活が続いていると考えているときでも、歴史は常に次の飛躍への力を準備している。原空母寄港阻止斗争がその証明である。一九六八年一月をゆるがした闘いは、新しい階級闘争の始まりを高らかに告げた。敵の攻撃から身を守り、自らの不屈の意志を保つだけでは足りない。大衆的な包囲陣地を作り上げつつ、いまや戦闘に打つて出る時が近ずいた。

大きな感激にひたりながらも、私達は今なお闘いの渦中にいる。広がりはじめたこの渦を私達はさらに押し広げ、おしよせる潮のどとき闘いを七十年安保Ⅱ日米侵略同盟阻止へ向けて組織するであろう。この報告集は私達の闘いのささやかな記録、そしてうちつつく闘いへの宣言である。

発刊にあたって	一
諸組織からのあいさつ	三
激斗の一週間	九
各地区反戦からの報告	二〇
東京からの報告	三一
関西の斗い	三四
斗いのるつぼの中から	三七
原空母の行動に抗議する	七一
弁護団雑感	七三
激斗の一週を終つて	七七
―斗いの総括と展望―	
救対部報告	八七
編集後記	八八

佐世保のたたかい

|| 次の反戦のたたかいに備えて ||

全大阪反戦青年委員会

岡田義雄

遂に、強引にもエンタープライズは佐世保に寄港した。佐藤売国政府は、力づくで、戦争屋のお先棒をかついで、われわれの国土に汚点を残すのに全力をこらしたのである。

しかし、叡智と勇氣に充ちた、われわれ反戦青年は、このような戦争勢力に対決して、一歩も譲らざ勇敢に斗い抜いた。斗つた、われわれは、今もある報道記事が一人合点で書いたような「虚脱」状態には決してないことを知るべきである。佐世保で斗つたわれわれは、その翌日から、戦争に抵抗する斗いを力よく組み、そして斗いを続けている。

われわれ青年の反戦のエネルギーは、次々と国中の青年の勇氣を奮いたたせ、「反戦」ということを若い肌でじかに実感し、斗う意思と力を確認し合っているのである。

佐藤戦争政府が、何をいおうと、われわれは戦争に断乎として抵抗し、そして、斗う。われわれ反戦青年委員会は、その大きなトリデであることを、自覚し、斗い抜くことを誓おう。

全国、そして各地区の反戦青年委員会は羽田に次ぐ佐世保の斗い

のあとをふまえ、次の斗いのエネルギーを結集しよう。これらの斗いのあとを、われわれは充分学習し、その輝しい成果と、そして欠陥も、思いをおし、そして考え抜こう。

深く、広く、斗いを強化せよ!!

清田祐一郎

一月十八日——原空母寄港反対斗争の渦中に、突然登場した未組織の市民連は（ある意味では私たちを含めた）既成の活動家の常識に痛撃を与えた。

「斗いにより一層広汎な人口を組織しなければならない。そのためには、遅れた層が参加しうる運動形態に全体の運動を規制しなければならない」——運動のダイナミクスと有効性とはおよそ無縁の、安保斗争以来くり返し主張されてきたこの陋固たる論理が、まさにその論理の根柢とした「遅れた層」によつて一瞬にして打砕かれたことは、確かに素晴らしい痛快事であつた。全国民を睥目させた佐世保市民の運動への参加は、こうした下司の智慧とは全く違つた発展過程をたどつたのだ。

佐世保の市民たちは大衆を「遅れた層」と呼び、大衆を蔑視しつつこびを売るかのようにびかけられる連帯とは全く別の衝動から——運動の有効性を最大の目標としつつ高い自己犠牲の精神に支えられ

た強力で、鋭い運動との断絶がもたらした衝動によつてはじめて
闘いへの参加のキッカケをつかみとつたのである。

もとより、この断絶の基底には、共通の事実と事実認識——昨年来
の日本政府の対外侵略の野望の顕在化、汚れ切つたベトナム侵略へ
の協力、核武装への野心、それらの一切を八万数千トンの巨体で象
徴したエンタープライズの強引な寄港、そして学生や青年労働者の
場合には長い街頭の闘いを通じて、いわゆる市民の場合には日常の
生活やある場合には自己の属する企業での闘いを通じて、体験して
きたこの間の官憲の不当な干渉と異常な弾圧の強化。それらを耐え
難いものとして感じてきた事実——があつたことはいうまでもな
い。

佐世保の闘いは更に公明党の初の大衆行動、同盟系のデモと警
官の衝突等掘り下げるべき多くの問題を私たちの前に呈示している。
私たち関西の地区反戦は昨年十二月二四日、関西の地区反戦の情報
センターであり、行動の調整機関としての連絡会議を結成し、最初
の行動として、討議資料「原空母寄港を許すな」を作製すると共に
元旦のピラマキ、七日の神戸領事館斗争とそれ以後連日の領事館坐
り込み、そして十五日の神戸領事館斗争を、関西のあらゆる反戦組
織に呼びかけ、先頭に立つて斗つてきた。ことに十五日の闘いは、
千四百名の武装警官が出動するという異常な状況の中で果敢に斗わ
れたことは周知の事実であろう。

私たちはこの一連の闘いを通じて、それ以後の佐世保における激動
を自らの闘いの直接の延長線上にとらえ、その闘いのもたらした感

動と教訓を直ちに各地区にもち帰ることに成功した。

私たちは既存の諸組織との協力関係を一層強化しつつ、各地区にお
ける組織強化を通じて今後の長い闘いの先頭に立ちたいと考えてお
ります。最後に、この賢を借りて、この間の闘いに御協力下さつた
方々やこの報告集の発行に御協力下さつた諸組織、諸個人に心から
御礼を申し上げます。
(地区反戦連絡会議事務局長)

関西の同志へ!!

佐世保地区反戦青年委員会

委員長 山下 尚義

われわれは、関西の反戦青年委員会の同志と共に、現地、佐世保
斗争の先駆的任務を果たしたことをほこりに思う。

過去十二回の原潜斗争の総決算と七〇年核安保を志何した「エン
タープライズ入港阻止」の闘いは、佐世保市民を立ち上げらせる契
機となつた。ドル経済で、佐世保市民の感覚は、マヒ状態といわれ
ていたが、一連の「エンタープライズ入港阻止」斗争は、全市民の表情をか
え、一変させた。

われわれは、この新しい市民層の胎動を反体制的運動に「有利な
条件」とみる。同時にこの新情勢は、われわれに創造的な運動を迫
つてくれると思う。

関西の反戦青年委員会の同志諸君、われわれは、多くの同志た
ちが現地、佐世保に残してくれた「闘いと友情の火」をいつまでも

消さないだろう。そして、青年運動の一層の連帯を強め反革命的
いつさいの反動政治と敢然と闘うことをかたくちかう。

青年と学生、全ての労働者階級の連帯バンザイ!

七〇年をめざして

大阪総評事務局長 帖 佐 義 行

三派全学連の行動をきちがいじみた行動、と非難する人でも、し
かしエンタープライズが来なければあんなことにはならなかつた、
ことを否定はしないだろう。三派全学連の行動は、実にきびしい内
外情勢の反映なのであつて、そのことは三派全学連の行動に対して
示した佐世保市民がみごとに証明している。

この佐世保市民の反省を傷つた学生に対する単なる同情論でか
たづける人は、問題の本質を見ることの出来ない人で、佐世保市民
が三派全学連にあつたような姿勢を示したことは、抑圧された国民の
権力に対する止みがたい憎悪、まえの大戦でおとりの長崎に落さ
れた原爆の経験、そこから原水爆に対するはかり知れない不安、反
戦平和をのぞむ広範な国民感情が、佐世保市民の心の奥底にあり、
それが三派全学連の行動で火を吹いた、と見るべきであろう。

だとすればわれわれはここからいろいろの教訓を引きだすことが

出来ると思う、社会党総評のデモ隊は、学生と警官との間に割つて
入り、その激突を回避しようとし、しばしば警棒に追われる学生を
デモ隊の中に収容してかばつたと云う。民青は、嚴重なビケで、学
生たちを排除し、角材をふり廻し、警官隊に学生の排除を要求した
とも伝えられる。

いづれが広範な国民を結集して、佐藤政府の戦争政策を打ちくだ
くことになるだろうか、これにも佐世保市民が明快な回答を与えて
いる、と云えないだろうか。

七〇年の安保再改訂をめざしたわれわれの闘いは、独善や既成の
概念をふりすてて、すなおに国民に学ぶ、という姿勢がまづ必要な
のではあるまいか、佐世保市民は、どんな激しい斗争でも支援し、
総評、社会党、共産党のおもわくとは、はるかに違つた反応を示し
たではないか。

安保破壊、諸要求貫徹中央実行委員会、原潜阻止全国実行委員会
の統一行動、あるいはかつて学者が提唱した一日共闘、もうこれら
はカビが生えて使えないものにならないような気がするし、国民はこれ
をはるかにとび越えているのではないだろうか。

七〇年安保再改訂をめざす闘いは、あらゆる階層の、あらゆる個
人の、ありとあらゆる行動形態が、まづ尊敬され、その行動を發展
させるように進められるべきである。それはあれこれの指導者た
ちの計画よりも、もつと見事な、反戦平和の一大国民の統一行動を
形成するだろう。反戦平和の闘いは、日本の全国民の心をつらぬく

ただ一つの真実である。

新たなうなり

Ⅱ反戦・反帝の斗いⅡ

西村 祐 紘

いまや大きな「うなり」が押し寄せている。反戦斗争という「うなり」が。

もつとも、戦後、一貫して「反戦、平和の斗い」は存在した。いや、この斗いが戦後の斗いの主流をなしていた観さえあつた。その斗いの中で、社共を中心とする「革新」政党は息づき、人民大衆も、この斗いの中で、育つてきた。

にもかかわらず、まさに現時点において、「反戦斗争のうなり」が押し寄せていることを、我々は指摘しなければならぬのである。それは、なぜか。

総じて、いえば、これまでの斗争は「戦争に嫌悪を感じる」ことを表明し、あるいは、「平和を希求する」ことを表明する運動であつたし、基本的には、第二次世界大戦の原爆体験に根ざした「平和擁護斗争」であつた。だからこそ、戦後革新運動は、「平和と民主

主義」に包括され、同時に「平和と民主主義」は、「革新」諸政党とともに大衆に対しても、共通項としての意味をもつていたのである。

だが、しかし、一般的に平和を希求する運動は、安保斗争以降その包括力を失ない、新たな波を創り出したのである。

いまや、大きく浮び上つた新たなうなりはとどめようもない大きな力を示し始めている。そのことを、第一次、第二次羽田斗争、佐世保斗争は、まったく明確に示している。付言すれば、佐世保における日共、民青のとつた路線、態度は、きわめてグロテスクな形で、斗争の場における主役の交代を現わしているといえよう。日共、民青の「三派」―トロッキスト暴力分子にたいするヘルメット、コン棒による武装が、佐世保市民によつて解除され、顔色を失なわしめ冷笑を買つた事態がそれである。

事態は、全く明白な方向をさし示している。国際的な場における反戦斗争の新たな高まり（これまでとは質的にも異なつた）と日本帝国主義が明確に戦争へのバイ・プレイヤーとして登場したという二つの点において、斗争は「平和を希求する」意志表示のキャンパニア斗争から、戦争そのものに肉迫し、戦争の根源である帝国主義体制そのものと対決する運動に転換を強いられているのである。

しかも、その斗いの先進的役割を、反戦青年委員会がなつてきたのは、今や全く事実として評価されなければならない。我々社会主義青年同盟は、この反戦青年委員会の果した、そして今後果す

であろう役割を正しく評価し、自らをその中に位置づけ、反戦青年委員会の強化に努力してきたのである。

今後、二つの核と形態を伴つて運動は展開される。「平和願望斗争」か「反戦、反帝斗争」かの。しかも、すでに七〇年安保斗争が、核論争において、沖繩問題において、始まつている時に、反戦斗争の新たなうねりを代表する我々の斗いは、これまで以上の課題を強調されるであろう。

(社会主義青年同盟大阪地区本部)

共に斗おう!!

京都府学連書記長 河本 昇

「やめんか」警棒の乱打で一度気を失つた私は佐世保をまりのこの言葉で気がついた。そして、目に入つたのは、警官の編み上げ靴ではなく、様々な色とりどりの靴であつた。いつのまにか私のまわりには数十名の市民が輪を作つていた。「その手を離さんか」刑事に殆んど手錠をかけられるところだつた私の腕は、この意外な程の強い響きを持つた声によつて解き放された。今まで、どんな斗

争にも見られなかつた事が、九州の佐世保で起つたのだ。似たような事があちらでも、こちらでも起つたようだ。私達、全学連―反戦青年委員会の切り開いた斗いが、佐世保では、市民の流動となつて出て来たようである。我々のまわりには想像を絶する数の市民が様々な手を使つて、官憲の気遣いじみた、しかも科学を駆使した暴力から我々を守ろうとしたのだ。そしてそれは、次第に、官憲に対する、多種多様な攻撃へと変化していつた。投石が始まる、投げているのは我々ではなく、むしろ若い労働者と、そして佐世保市民であつた。どこから出て来たのか、お婆ちゃんまでが石を投げている。

そして、いたる所で論争が始まつた。既成革新政党は、いとも簡単に、その組織下の労働者に、そして、皮肉にも彼らにとつてカンパニアの相手であつた佐世保市民に乗り込められた様である。中でも日共に至つては孤立したとしか表現の様がない。実態的に民主主義が無くなつている現在であるが故に、それを正しく捕え、この現代に対応すべく「国際主義」と「組織された暴力」をふまえた全学連Ⅱ反戦青年委員会の斗いが、今、全ゆる階層を巻き込んで動揺をさせ始めた。エンタープライズ寄港阻止斗争は、斗いのがどの部隊で

あるかを明らかにし、そしてその部隊に結集する部分を次々と生み出していつた。七〇年安保は日本帝国主義の独自の東南アジア侵略であり、これに対決し、安保粉砕の斗いを最も中心的に行い得る部隊は他でもない。全学連Ⅱ反戦青年委員会であり、その斗いの形態は、質量とも、羽田、佐世保に於いて切り開かれた斗いを拡大し

たものである。その「国際主義」と「組織された暴力」そして、「生産点に於けるセネラルストライキ」の追求こそが我々、全学連
Ⅱ 反戦青年委員会に与えられた課題であり、そして日本帝国主義Ⅱ
佐藤内閣打倒の唯一の手がかりではないだろうか。

全国闘争Ⅱ佐世保現地闘争Ⅱ波状的激闘の 一週間。七〇年安保実力阻止への橋頭堡築く!!

△激闘の一週間▽

注 現在知り得たもののみで、不充分であるが以下一月一五ノ二三
日の全国状況を素描列挙。元旦の関西各地区反戦・佐世保反戦
をはじめとする全国各地でのピラマキ行動や、関西地区反戦の
七日神戸領事館でモ（一〇〇人）一四日までの連日坐り込み等
の前段準備段階でのとり組みは全国各地のぶんは省略。

一五日

- 〔東京〕△午前▽△全学連一三一名の事前検束。
- 〔神戸〕△午後▽△関西地区反戦連絡会議三〇〇人、全学連二〇〇人神戸領事館抗議闘争。労働者一〇人、学生二人検挙
- 〔佐世保〕△民社・同盟系佐世保集会。デモ 七〇〇〇人。

一六日

- 〔東京〕△原水禁の抗議集会・国会デモ。六〇〇人。
- 〔神戸〕△兵庫県学連デモ六〇〇人。
- 〔大阪〕△関西地区反戦一〇〇名佐世保へ出発。
- 〔佐世保〕△全学連博多駅着と同時に官憲の暴行を受け四人検束。

〔佐世保〕△△午前▽全学連平瀬橋で官憲と激突。官憲はガス弾を
発射、催涙液放水を行い、学生を警棒で乱打。逮捕二七名。市民報
導関係者を含む救済百名負傷。△△午後▽反戦・全学連「全国青年統
一行動佐世保集会」一五〇〇人戦闘的デモ。△公明党佐世保二万人
集会。

- 〔神戸〕△兵庫県（自治会共闘）学連三〇〇人デモ。
- 〔京都〕△反戦青年委七〇〇人デモ。一人検挙。
- 〔名古屋〕△全学連二〇〇人アメリカ領事館、自民党へデモ。
- 〔東京〕△全国反戦主催「青年決起集会」（日比谷）一万二千人の労働者、学生を結集。戦闘的デモ。一二人検挙
- 〔北海道〕△札幌で全学連三五〇人デモ 五人検挙。

一八日

- △政府、エンタープライズ一九日寄港の事前通告を発表。
- 〔佐世保〕△市営球場で社共一日共闘の「佐世保五万人集会」四万七千の労働者学生結集。全学連佐世保橋で官憲と激突。反戦も全学連に合流。負傷多数。一五名検挙

〔神戸〕△兵庫県学連（自治会共闘）一〇〇〇人デモ。

〔大阪〕△府民集会五〇〇〇人デモ。

〔京都〕△地評主催集会一五〇〇人デモ。学生一人検挙。

〔名古屋〕△反戦一〇〇、全学連二五〇のデモ。

〔横須賀〕△全国実行委主催集会六五〇〇人。反戦三〇〇人、戦闘的デモで参加。

〔東京〕△中央実行委主催集会一万二千人。△全学連五〇〇首相官邸へデモ。一〇八人検挙。

〔群馬〕△人前橋V二八〇人の全学連反戦のデモ

〔福島〕△地区労集会九〇〇人、全学連、反戦も合流して戦闘的デモ。

〔仙台〕△「宮城県中央集会」二五〇〇名結集。全学連、反戦も四〇〇人参加。

〔北海道〕△札幌で反戦四〇〇、全学連四〇〇で戦闘的デモ。一人検挙。

△この日、全国都道府県五一ヶ所で抗議集会やデモ。六万二千人参加。逮捕二六六人（佐世保一五人、東京一〇八人、札幌一人、京都一人、鳥栖一人）

一九日

△午前九時半エンタープライズ入港。

〔佐世保〕△全国反戦、地区労、常駐オルグ団、学生、八朝七時V平瀬ロータリーで坐り込み。デモ。数度の官憲との激突。八九時

V海上デモ。△八時V全学連佐世保橋で官憲と激突。八人検挙。

△午後V全国反戦、常駐オルグ団辻市長に抗議デモ坐り込み。外人バー街デモ。それを阻止する官憲と激突。

△平瀬等、米兵へ脱走呼びかけ。

〔東京〕△全学連外務省坐り込み。八九人検挙。

〔神戸〕△兵庫県学連（自治会共闘）八〇〇人デモ。

〔大阪〕△関西反戦連絡会議一〇〇〇人の駅頭集会開始と同時に四人検挙 解散。

〔名古屋〕△反戦・全学連二〇〇人デモ。七人検挙。

〔北海道〕△札幌反戦・全学連八五〇名デモ。五人検挙。

二〇日
〔東京〕△午後V全国実行委主催集会、一万人デモ。
△市民文化団体集会二〇〇人。

△A夜V反戦、全学連主催「首都青学総決起集会」アメリカ大使館へデモ。八〇〇〇人の労働者・学生。△民青青学集会。明治公園で一万三千人。

〔佐世保〕△A夜V「核基地化反対佐世保市民会議」市民ぐるみ集会一〇〇〇人。△平瀬が米兵脱走呼びかけ。

〔名古屋〕△寄港抗議を掲げて名大でストライキ。テレビ塔下集会に一五〇〇人 デモ。

〔茨木〕△全学連七〇〇人のヘルメットデモ。
〔仙台〕△全学連五〇〇人 デモ。

二一日

〔佐世保〕△松浦公園で社共 日共闘による「二万人集会」。日共が「全学連排除」の方針でビケ。市民の手でビケ排除される。全学連合流。△佐世保橋で地区評の宣伝カーを先頭に全学連・反戦・市民・労働者一体となり官憲と激突。学生・労働者のデモが去つた後も千余の市民が官憲に抗議。

〔横須賀〕△全国反戦、神奈川反戦、横須賀青婦協主催「東日本集会」五〇〇〇人。戦闘的デモ 坐り込み。

二二日

〔佐世保〕△民社・同盟系集会 八〇〇〇人。ジグザク、うずまきデモ 平瀬橋で官憲と衝突 投石。△反戦、全学連等、終日抗議行動。

〔東京〕△婦人民主クラブの抗議デモ。

二三日

△朝、エンタープライズ出港

〔佐世保〕△全国実行委、中央実行委、民社同盟系それぞれ出てゆけ集会。全学連、反戦は全国実行委に合流。

〔大阪〕△関西地区反戦連絡会議主催駅前集会五〇〇〇人、大阪領事館へデモ 坐り込み。

〔福島〕△福島地区反戦、全学連三〇〇〇人デモ。
△その他全国で追い出し集会多数。

△はじめにV

我々の佐世保現地での斗争を報告する前に、六八年正月明け早々の正月気分をふつとはし、七〇年安保実力阻止への高らかな前哨戦となつたエンタープライズ阻止斗争の全様を素描しておきたい。

上記の日誌を見ても明らかのように、エンブラ闘争は、砂川斗争第一次羽田、第二次羽田斗争の実力斗争に引き継いで、それらをはるかに上廻る高揚を築いたものである。

先づ第一に、砂川・羽田斗争がそうであり、過去の日本の斗争はすべてスケジュールを設定した一発闘争であつた欠陥を大きく打破り、連日の波状闘争として斗われたこと。

第二に、砂川・羽田斗争が全学連と反戦青年委員会のみによつてしか斗われなかつたのに比して、民社同盟系。公明党まで含む、すべての党派が反対斗争を展開したこと。

第三に、それらのことの上に立つて、砂川、羽田斗争では見られなかつた、北海道から九州までの文字通りの全国斗争として展開された。

第四に、「砂川」なくして「羽田」はなく、「羽田」なくして、「エンター阻止斗争」はなかつたと云われるように、これら一連の斗争の主軸として、全学連・反戦青年委員会の現地実力阻止斗争を徹底して斗い抜く、密集した突出部隊の斗いが位置していた。それは、北海道・仙台・関東・名古屋・関西・九州・等全国各地に於て全学連・反戦青年委員会の戦闘的斗争がそれぞれ主軸になつていた。

同時にそれ以上に重要なのは、それら全国斗争の主軸になつてい
た佐世保現地に於ける全学連・反戦青年委員会・地区労の戦斗的実
力斗争部隊の連日の激斗であつた。「エンタープライズ阻止斗争の
構成の全体的構造は、佐世保を中心とした全国斗争という横の広が
りと、全学連反戦青年委員会の突出した実力部隊の斗いから広範な
市民、労働者、あらゆる日本人民の心をゆり動かしたという縦の広
がりだが、全学連・反戦青年委員会の組織力と自覚意識的の追求・情
況の先取りの把握の下でみごとに展開されたといふことである。

最後に、二次にわたる羽田斗争で端ちよ的に表わられていた、全学
連・反戦青年委員会の突出部隊の斗争を二つむ市民・労働者
の潜在的・ムード的支持という立体的構造が、佐世保現地斗争の中
でみごとにぎょうしゆくされ、形を取つて表われ、ダイナミックな
運動の展開を示した事を我々の最大の焦点にすえなければならぬ。
その事は二二日の佐世保橋に劇的に表現されているし、我々は、佐
世保市民をわずか数日間反戦市民へと変えたもの。とりわけ、二
二日の同盟系労働者の戦斗的デモの示す、労働者階級の中に取りつ
つある変化。諸階層とりわけ、日共、社会党等諸党派のこの数日の
流動。等々、佐世保現地斗争の全ての中から、今後の貴重な教訓
を得ることが出来ると思ふ。

以下我々の現地斗争報告の中から、その事を読みとつてはしい。

緊張感をもつて佐世保へ

一六日夜九時三六分、佐世保行き「平戸」は、北大阪反戦代表二
〇名をはじめとして、エンブラ寄港阻止のこの斗いを一大交響曲と
してかたどらされてゆく様な立場の者たちが、それぞれの決意と思
惑を秘めて乗りこんでいた。

車内には随所に私設警官が配置されていた。
後部車庫には、護衛の諸君が陣どり、はなやかにたわむれていた。
神戸駅からは、「安保体制堅持」ののぼりをひるがえしながら背広
姿の右翼、その第一目でわかる暴力団が同乗した。急行「平戸」は
このように佐世保斗争の各パートをだきこんだまま、漆黒の夜を一
路西へと進んでいった。

門司で明けた一七日の朝、車内は、隣席の乗客のラジオに支配さ
れた。ニュースは、前夜九大に泊り込んだ全学連が、武装警官隊の
検門を突破し、この日以降「全学連列車」と呼ばれることとなる
「西海雲仙」に乗り込み、すでに佐世保にむかつたことを報じてい
た。博多以降佐世保に至る停車駅は、まるで「平戸」が天皇のお召
し列車を思わすようなものらしい警備につつまれていた。ブラッ
トフォームは五メートル間隔に公安機動隊がたちならび、神経質な
眼が車内をのぞきこんだ。それにおとらず車内も奇妙な混雑ぶりだ
あつた。博多からどつと乗り込んだきた公安機動隊が、我々のすぐ
そばまでおしかけていた。車内のだれもかれも互に知られてはな

らぬ秘密をかかえた者同士のように、ヒソヒソと雑談を交していた。
我々は、現地の状況に思いをはせ、あるいは駅頭での身体検査ぐら
いは覚悟しつつ、しかしエンブラ断乎阻止の決意を再度かみしめ、
佐世保到着をまちつづけた。

戒厳状況の佐世保市街

佐世保駅は、予想にもかかわらず平静であつた。それは、全学連
の第一次の基地内突入をめざす斗いが、すでに平瀬橋上で展開され
ていたことを示していたのである。しかし、彼らを圧倒的にりよう
駕する権力の攻撃は、ほどなく部隊を四散し、一時の休止ののち、
斗いは佐世保橋へ移つていた。我々は一刻も早く彼ら学生につづい
て斗いに参加したい気持ちにかられつつも斗争の状況が把握できぬた
め、ともかく隊伍をととのえて、斗争本部のおかれてある総合会館
へとむかつた。前夜の車中で地図をみながら、基地をみながら本部
へゆこうと話し合つたことが、まったく馬鹿げたことであると気付
いたのは、四ヶ町の商店街をぬけて佐世保橋をみはるかす交差点に
たつてからであつた。佐世保川にかかる各橋（従つて斗争本部に
通じる各橋）はことごとく機動隊とバリケードでふさがれていた。

青年大集会へデモで出発

午後四時、現地佐世保、長崎反戦青年委、東京反戦、岡山反戦等
とともに、全国反戦青年委の結団を行つた我々は、青年大集会の行
われる松浦公園にむけ、総合会館をデモで出発した。夕やみのし
びよる佐世保橋基地側は、黒山をなす機動隊の群れが、権力そのも
のを象徴して黒いカベとなつて我々をみすえていた。その中をジグ
ザグでかけぬけた我々は、「邦人は入れません」などのポスターを
かかげたげげばしい店のならぶネオン街外入バー街をぬけて、
松浦公園に到着した。（図一参照）

佐世保川周辺は戒厳状況を呈していた。やつこのことで川をこえる
バスをつかまえて乗りこむことのできた我々は、のちにまだヘルメッ
トにかぶつていなかつた事に感謝することになつた。それは我々よ

午後五時三〇分、佐世保地区労青年部、佐世保反戦青年委員会主
催の「エンタープライズ寄港阻止青年大集会」が、この日の斗いを

戦斗的に闘いぬいた全学連をむかえて行われた。学生たちの眼は一様に赤くはれあがり、顔はただれていた。ジャンパーがボロボロにやけどげていた。(のちに、平瀬橋の放水に稀硫酸が混入されていた事を知らされた。学生の多くは、皮フに一面の炎病をおこし入院していた。我々は、シャッターをカンバした)集会は、昨六年の反戦諸斗争の主力部隊として闘いぬいてきた全学連と反戦青年委員会が、再びこの佐世保エンブラ阻止の闘いを、てつていした実力斗争でいぬく決意と連帯を確認する最初ののろしとなつた。この集会によせられた数々のメッセージもまたそのことを強調し、佐世保現地斗争を発火点とし全国で闘う決意がこめられていた。とりわけ砂川基地拡張反対同盟のメッセージは、一二年にわたる巨大な闘いの歴史をせおつて、権力との闘いを回避してはならぬことと、斗わない日本共産党への糾弾とを感動的に提起していた。

シャッターおろす商店街

午後六時佐世保反戦を先頭にするデモ隊が激烈なジグザグと、力強いシュプレをもつて基地内に突入した。佐世保橋をびつしりうずめる機動隊は、ただ黒山の静寂をもつて我々をむかえた。基地内をとおる道路は、二〇数メートル間隔におかれた街灯のほか一切のあたりもなく、まつくらである。時おり報道陣のたくフラッシュのみが道一杯に展開する我々のジグザグと、その両端をうずめる機動隊の所在をあきらかにする。ジグザグの屈曲は機動隊のジュラルミン

たてにぶつかりドシン・ドシンと音をたてる。「エンブラ」
「粉碎」のシュプレが基地内をおつた。平瀬ロータリーまで静
かな規制をつづけた機動隊は突然デモの両側に進出し、並列規制に
移つた。黒やみの中で、足をかけこぎまわる彼らの攻撃の中を我
々は「機動隊カエレ」のシュプレと断乎としたジグザグで対峙しつ
づけ平瀬橋をぬけて佐世保駅へとジググリつづけた。四ヶ町商店街は、
事前の反戦宣伝により、あまねくシャッターが閉じられ各店の二階
からこわごわのぞく市民の顔がかいまみえるのみだつた。しかしこ
の日にはじまる我々の闘いはついにこの市民たちの圧倒的共感を
獲得していつたのである。しかし、基地内をとおるぬけることので
きたデモは、同盟のデモをのぞき、あとにも先にもこれつきりであ
つた。

右翼あらわる

佐世保駅前に達着した各部隊はそれぞれの総括集会を行つていた。
と突然、後方での混乱が伝わつてきた。「右翼だ」との叫び声と
ともに角材をふりまわす数名のチンピラが道路のまん中に浮びあが
つた。各部隊は一切の集会を中止し再度隊列を整えて彼らに突進し
た。駅前広場の端に陣どる機動隊は見ているだけだつた。我々の部
隊のある者は角材をもち旗ざおをにぎり、そして多くの者は固いス
クラムをもつて彼ら右翼を包囲した。まもなく彼らは逃走した。

反戦・全学連ともに斗かう!!

全国反戦の日和見

一八日午前九時、総合会館に集合した我々は、「全国反戦」より
「全学連に対する警官の攻撃をけん制し、学生を防衛する」ために
佐世保駅にむかうことを指示された。全国反戦と現地オルグ団五〇
〇のヘルメット部隊は道一杯のジグザグデモを展開しながら駅前に
向つた。駅前広場のまん中に、愛国党の宣伝車がいた。車の上には、
数本の「原空母歓迎」のたれ幕と共に、日の丸の旗と星条旗がひる
がえり、白が頭の赤尾敏が例の数寄屋橋調でアジつていた。彼は我
々にむかつて「バカ・バカ」を連発し、我々からの「右翼なら右翼
らしく日の丸の旗一本でやれ、ノ」とか「チンドン屋」のヤジに、
拡声器一杯の軍艦マーチと、山ほどのビラをなげてよこした。この
陽性右翼はどこからみてもしまらないチンドン屋そのものであつた。
数時間の待機にもかかわらず学生はあらわれなかつたが、「西海
雲仙」の到着とともに後発の反戦部隊があらわれて、我が反戦の隊
列は約四〇〇名にふくれあがつた。駅前で隊列をくずさずまつてい
た我々に隣の隊列にいた全日自労のオジさんが話しかけてきた。彼
は駅前にそびえたつ市内随一の高級ホテルマックラホテルを指さ
しながら云つた。「昨晚、一番上等の部屋に野坂さんが泊つたで
す。徳田さんはそげんことしよらんかつた」。全学連の防衛とい

うのがどうもおかしいと思いはじめたころ駅構内から白髪をなびか
せ数名のボディガードにまもられて、学生ならぬ堀井総評議長があ
らわれた。我々は、彼の歓迎陣としてかりだされたにすぎなかつた
のである。我々は頭にきていた。堀井議長の駅頭での演説は、赤尾
敏の軍艦マーチのみでなく、「総評の腰ぬけ」。「お前も先頭に立
て」など反戦部隊からもヤジられることとなつた。反戦に結集す
る我々は、暗黙のうちに決意しはじめていた。全国反戦を名のる社
会党がやがては、決定的な日 and 見をみせる危険があるかもしれぬ事
我々はそれを突破して進撃しなければならぬかもしれぬ事を。そ
してそれは、ほどなく現実にあらわれ、決意は実行に移つた。堀井
議長が駅前を去るとともにデモ隊に動きだした。最後尾の反戦部隊
はひとわり大ききなりまきを行ない駅を後にせんとした。隊列の
後方をみやつた我々の目に、いつも我々の後をついてくる気弱わな
学生部隊が、自治会共闘が、駅裏からあらわれた機動隊に包囲され
ようとしている光景がとびこんできた。先頭から再び大きくUター
ンした我々は機動隊の間に突入し、彼らを後部にまきこんで、五万
人集会会場へむけてジググリはじめたのであつた。A余談V横改派と
いわれる学生を結集した自治会共闘は、「反戦青年委員会と共に斗
う」ことを強調している。しかし、昨五・二八砂川の闘い、羽田の
闘いで、彼らが、常に反戦の後衛に位置を占め、時には我々から

「お前らそれでも学生か」などのヤジをもうけていた。朝日ジャ

「ナルいわく」恋人を呼びあうような三派全学連と反戦青年委員会の連帯と比較すれば、彼らは「片思い」の連帯かもしれない。何のための角材か、民青全学連武装す

市民グラウンドへむかう我々のデモは、市内随所で、中央実行委（共産党系）の労働者からも拍手をうけた。

午前一時三〇分ころ市民グラウンド北門に到着した我々は鉄門を入りかけた指揮者の「突つこめー」という大声に何が何だかわからぬまま門の内側へさつとうしていった。手に手に角材を握り、ま新らしいヘルメットものものしい一〇〇名のピケット、スクラムをかためて突入した我々が、事態の本質、つまりそれが我々の入場を阻止する民青全学連諸君だと気付いたのは、彼らと衝突したのちのことであつた。（先発させていた北反戦三名は、彼らにかこまれ、「反戦青年委は入れない」と云つて追いつけられぬことをあとで知つた。）この日の五万人集会は、「三派を武力で排除しない」ことを確認していった。しかも、反戦青年委員会は全国実行委の構成団体なのである。我々は、彼らのこのような卑劣きわまる背信行為に満身の怒りをこめ実力で門前から排除するとともに、入場后ただちに中央実行委に抗議した。さすがにあからさまな背信に中央実行委は弁解の余地なく、「北門内にたむろする民青全学連」を解散させる事を約した。我々は、部隊から一〇名の監視団を選出し、北門に配置し、ひとまず会場内で待機した。しかし、民青全学連は正面入口に

て守ろうとした彼らの統一行動とは一体何なのか。統一行動とはどう為にかそ行われるのではなかつたか。斗つている者を排除し、斗わない者同士が、斗かわない事で統一するような集会なら、ない方がましである。

コース変更は抗つて佐世保橋へ

集会終了後、両実行委代表を先頭にした五万人のデモ隊が出発した。全学連のデモ隊は先発して佐世保橋へとむかつた。市民グラウンドを出て大通りに出る寸前、ピンク色の煙がたちのぼつた。再び愛国党チンドン屋の登場である。軍艦マーチとともに、赤尾敏の「バカバカバカバカ三太郎」がはじまつた。我々はこのチンドン屋を横にみて佐世保橋へとむかつた。三時ころ四カ町商店街をジグつている我々に佐世保橋上での全学連の激突が伝えられ同時に五万人のデモのコースを変更するしらせが入つた。我々は、全国反戦の動揺を突破し、日和見コース変更に体で抗議し、反戦旗を先頭に、前隊の隊列を追いぬいて佐世保橋へとむかつた。佐世保橋手前の四ツ辻はすでに全学連を背後から攻撃せんとする機動隊でうずまつていた。我々はその前に突入し（④から矢印）ジグザグでけん制する。いや、橋へは一顧だにせず、およそ斗いとは関係のないところで「アメ帝がうえにも力の入るスクラムで、機動隊のジュラルミンたてに二度三度ぶつかりながらふと後方をみると、我々につづいて福岡県評のデモ隊がつづいてくるのがみえた。道路わきでみまもる市民が、かん声をあげ、「早う行つたれ」の声がとぶ（図二参照）

集結するとともに約二〇〇の部隊を北門へと再度進出させてきた。我々は中央実行委に再度の抗議を行うとともに、彼らがしよせん背信をつづけるだろうことを予想し、部隊を北門前に移動して民青から防衛しつつ集会に参加することにした。

我々はその夜、前夜の東京における六千名の反戦青年集會を闘いぬき参加した東京地区反戦連絡會議の樋口事務局長の報告をうけ、エンブラ阻止の闘いが、我々が去る一五日先がけとして斗つた神戸領事館包囲斗争を皮切りに、全国斗争としてもえあがつている事を確認した。我々は、エンブラ寄港うけいれが東南アジア侵略を軍事的にも行つてゆこうとする日帝にとつてのつびきならぬものとして位置づけられており、武装警官を総動員して反対斗争をたたきつづそうとしていること。それゆえに我々は、この警官隊と、権力と、実力で斗いぬくことなきに、エンブラ寄港阻止の課題を果たせぬこと。従つて、社共確認のいかににかかわらず、我々は最も鋭くこの闘いを斗いぬこうとしているが故に、勇敢に斗う全学連と最後まで連帯して斗いぬくことを確認した。

やがて、我々の誘導によつて三派、革マル全学連が、日中友好協会（正統）、全日自労、全電通等の拍手をあげて会場に入つた。日本共産党は、例によつて「統一行動を妨害したトロッキスト」とのきまり文句を投げつけるであろう。しかし、この日角材とヘルメットで統一行動を妨害したのは、ほかならぬ民青であつた。彼らは「ほんのゆきちがいだ」とでも云うのだろうか。だが角材までもつ

我々は大きくうねりながら佐世保橋へと到着した。すでに鼻をついていた催涙ガスが一層ひどくなり強烈に眼と鼻をおそす。涙がとどなく流れ、鼻水が流れつ放しになる。タオルのマスクはたちまちぐしょぐしょにぬれ、我々は五才の子供のように泣きじやくり鼻をすすりながら屈辱感に耐えていた。全学連は、色どりあざやかなヘルメットの帯をつくりながら、橋の中央部で、基地内突入をめざし、数回の激突をくりかえしていた。霧のようにたちこめる催涙ガスの中をなおも催涙ガス弾が一発、二発とうちこまれ、放水の水じぶきがふりかかってくる。赤十字マークのヘルメットをかぶつた女子学生が、海うさん水にひたした脱脂綿を配ってくれる。ほどなく我々の後に福岡県評、日中友好協会（正統）、自治会共斗が、社会党宣伝カーを伴なつてつづいてきた。このころ民青全学連の諸君は角材をかきついで、彼らにとつてはじめてであろうジグザグを「機動隊のいたい」大通りで、「第三の羽田にするな」と叫びながら行地、日本の帝国主義権力そのものである万余の機動隊、そして何よりもそれら反動と、それへの闘いの一切を集約していたこの佐世保橋へは一顧だにせず、およそ斗いとは関係のないところで「アメ帝でてゆけ」を空しく叫んでいたにすぎない。一方、前夜までは反動宣伝の下、我々への恐怖に身を固くしていた佐世保市民は、この日延べ二万人が佐世保橋周辺につめかけ、催涙ガスに泣きながら我々を声援していた。彼らの大部分は警官隊の暴力的に抗議し、「ポリ

公帰れ！」「全学連バンバレ！」と叫んでいた。

全学連との連帯うちかためる

午後四時四五分、④の機動隊が一挙に学生に突進しかかかった。七日の平瀬橋上の弾圧にくらべて「おだやか」なと云われているがそのエグくない暴力的弾圧のどこがおだやかなのか。隊列を分散させられバラバラと逃げる学生の頭に、改良型こん棒の雨が降る。たおれた学生によつて、たかつて、ところをわづこん棒が、皮ぐつ足の足がとぶ。我々は橋上の学生のすべてが通りへ進むのを見定めて機動隊の前に突入し学生を防衛した。(Bから矢印)隊列が橋上をま横にふさぐまで恐ろしく長い時間がかかったように思えた。機動隊のジュラルミンたてと、ふりあげられた警棒が大きくみえ。一瞬機動隊がとまつたと思つた。しかしその時、デモの左側面は情容しやない警棒のらん打によつてくずされていた。○へどけちらされた我々は再び隊列を組みなおしたが、この衝突で東京反戦長崎反戦一〇数名の仲間が、頭を割られ、あるいは肩や腕の骨をおられて入院した。市民の多くの人たちが、投石や、逃げる者をおくまうなどして我々を助けてくれた。全学連と共に佐世保へとデモで到着したのは五時すぎであつた。我々は全学連との連帯が闘いの中でなされた五時すぎで確認するとともに、まだまだ我々の力が弱いことを知つた。全学連は勇敢である。けれども、それは、労働者本隊の決起があまりにもたおれておる状況そのものが、彼らの戦斗的前衛

台の装甲車が彼らの背後に腰をすえている。基地内にとりつけられたたスピーカーが「デモ隊は解散せよ！」との警告をくりかえす。「道路をあげる」よう要求して機動隊の壁の前に坐りこんだ。「機動隊は帰れ！」をくりかえす。突然後方の革マルの部隊に機動隊がおそいかかつた。髪をひつぱり、なぐりけりつつ暴力的なひつこぬきが始まる。我々はスクラムをかため前後列に足をからませながら緊迫の状況を耐えていた。社会党宣伝カーがなりはじめた。「機動隊諸君、君たちの眼の前に今君たちと同じ青年が坐つている。君たちは、彼らが何故に暴力的弾圧に耐え坐つているかを考えたことがあるだろうか。日本を再び戦場にしてはならぬという日本人の人たちの願いが、君たちの前に座る若者たちの肩にかかつているのだ。君たちの体に、彼らと同じ日本人の赤い血が流れているなら、今からでもおそくはない。暴力をやめろ。道をふさぐのをやめろ。武器をすてて、彼らとともに坐りこめ！」機動隊のごほうぬきは中止された。しかし彼らは阻止線をくずそうとはしなかつた。しんしんと冷えこむ平瀬ロータリーに、黒山の機動隊と坐りこむ我々との対峙がつづけられた。午前九時三〇分、エンブラの佐世保港投びょうがつたえられた。我々はロータリーの冷たい道路にすわりこみ、三派全学連は、はるか佐世保橋で三度の基地内突入をめざし権力の厚い厚いカベに激突していた。

我々の部隊は坐りこみをとぎ、スクラムをかためた。反戦旗を先頭に二度、三度、機動隊のカベに突入した。しかし圧倒的な権力の

部隊たることを強制しているのだ。我々反戦青年委員会は彼らとともに突出して斗いぬぐ中で戦列を拡大し、やがては労働者の巨大な戦線をもつてその権力を突破しなければならぬ。しかも、労働者本隊を組織し決起させうる可能性をもつた唯一の部隊として反戦青年委員会は存在しているのだ。この夜佐世保発「西海雲仙」で、九大へむかう全学連と共に、北大阪反戦の三分の一が帰阪した。列車の暖房は衣服にしめつけた催涙剤をじよう発させ、彼らは再び涙したという。それは共に斗いぬいた者のみを知る連帯の涙であつた。(図三参照)

寄港阻止ならず!

平瀬ロータリーのすわりこみ 一九日

連日の寄港阻止の闘いにもかかわらず、ベトナム人民の血のしみこんだエンタープライズの入港は決定的となつた。一九日朝七時、斗争本部へと結集した我々は、残された時間の最後までエンブラの入港阻止を断乎追及しつづける事をちかい、斗争本部からまつづくに米軍上陸場にデモをかけることを決定した。前夜総合会館に泊つた革マルの諸君が我々につづいた。冷たい空気をひきさいて「エンブラ」「粉碎」のシュビレがこだました。やがて上陸場と平瀬橋へむかう道をわかつ平瀬ロータリーへと到着した。あたかも森林をおもむすようにびつしりと阻止線をはる機動隊の大群がいた。数一〇カベをついにうちやぶることのかなわぬまま、無念の涙をのんでひきかえさざるをえなかつた。

この日、午後から外人バー街にデモをかけた我々は、再び機動隊の阻止線を破ることができず、この時の衝突で一名が逮捕され、数名が負傷した。北大阪反戦は一名をのこして、午後六時五分「西海、雲仙」で帰阪した。駅頭にむかう我々にサイフをにぎりしめた婦人がかけよりガンバをおしつけていつた。午後からの三派全学連のキャンパは各派とも七〇万をこえたという。

白ヘルメットが泣いていた

二一日(朝日ジャーナルより)

二一日の松浦公園。市民たちの実力行使で角材を構えた民青行動隊のピケが解かれた時「市民に押されて」公園入口を通過した三派全学連の集団に場内整理をしながらスペースをあけてやつたのは反戦青年委のグループであつた。この日のデモは佐世保橋をさけて流れ解散へは向わなかつた。橋をかこんで約一万の市民たちが見守つていた。「通せ」「通さぬ」機動隊指揮官と交渉がはじまる。デモの先頭は、共産党系の指揮車と民青行動隊。交渉を見守りながら隊列はおとなしくうずくまつた。そのわきを中核派の四〇〇人がかけぬけ、一直線に機動隊にぶつかつた。間もなく青ヘルメットの反帝学評グループ約五〇人が、市民の拍手を背にして橋上の三派によりそつた。一進一退のゲバルト。橋のたもと市民たちが、「ポリが

うしろに回つたぞ」と叫びをあげる。約四〇〇人の機動隊が川沿いに展開して橋を遠まきに固めたのだ。そのとき機動隊の背後に社青同、反戦青年委のデモ隊が姿をみせた。デモの前半分を占める共産党系デモ隊がピタリと動きを止めた時、後半分の社会党総評の隊列はそのまま前進をつづけ回り道をして偶然にも機動隊をうしろから追いつめる位置に現れたのだ。市民の人がきから猛烈な拍手。眉をくくりと後ろへ向けた機動隊の隊列に、反戦青年委の旗がぶつつかつた。「トオセ、トオセ」「ワッショ・ワッショ」、歩道から市民

の人波があふれ出し、デモ隊と市民の混成軍が紺色出動服を包みこみ分断した。反戦、社青同の旗は、そのまま橋上へ進み、さらに社会党宣伝カーが基地側の橋のたもとを固める機動隊に相対し、そのまわりを中核、反帝の学生たち反戦青年委、社青同、社会党現地常駐オルグ陣の色とりどりのヘルメットが埋めた。いちばん外周にはこの光景に手放しの喜びようをみせる市民たち。橋の上で三派全学連の白ヘルメットが泣いていた。反戦青年委の若ものと手をとる学生たち。機動隊からの手出しはストップした。学生たちは身動きもできぬ人波のなかで、しばらくの休息と安らぎをむさぼつていた。

七〇年安保破棄
日帝の軍事外交を許すな
アメリカの侵略粉砕
オキナワ軍政打倒

青年は反戦青年委に結集せよ
現地代表派遣に対するカンパを感謝します。

各地区反戦からの報告

北大阪反戦 S 生

北大阪反戦の佐世保原空母斗争へのとりくみは、一一・一二羽田斗争直後からはじめられた。一〇・八羽田斗争は、基本的には春の砂川の斗いにおける実力斗争路線をひきつぎ斗かわれたといえ、山崎君虐殺をはじめとする先鋭化した斗争は一挙に総括しえぬ斗いとして、我々はいけとめざるをえなかつた。しかし以降開始された権力の圧倒的な反動宣伝攻撃の下で、我々は、今や武装集団としてたちあられた斗争部隊の評価、そして労働者がいかに闘うべきかの究明も不十分のまま、一切をあげて、羽田斗争の防衛と一一・一二斗争の準備におわれていたのであつた。しかし、当然のこととして一一・一二羽田斗争の準備とは、一〇・八のつてつていした総括作業をおして行われねばならないし、そのことの不充分さは、一一・一二羽田斗争渦中で、しかも決定的時点における動揺としてあら

われざるをえなかつた。産業道路をうずめつた四〇〇〇名の反戦部隊が、いわば不決断の象徴として意味なく坐り込まざるをえなかつたといふこと。この事実は「斗争をなしていないから：」という俗人的なぐさめでは解決しえない深刻な問題を我々に提起していた。それは云うまでもなく斗いへの主体的参加の欠陥ということであり、今日の情勢において実力斗争の意味を再度とらえなおすことが要求されていたのである。従つて、この間追及しつづけてきた北反戦の労組団体加盟を中心とする組織拡大のとりくみによつて獲得された組織構成の多様化ともあいまつて、軍事外交路線を明らかにした日本帝国主義の下での闘う方向の理論的解明に全力をあげてとりくまれねばならなかつた。一一・二六全大阪反戦集会において北のメンバーが一致して主張した「戦場に反戦斗争をいかに組織するのか」という問題の提起は、全学連の戦斗のみを實踐的前衛部隊とする斗争状況の立場を、唯一にならざる部隊としての我々がいか

尼崎反戦 八木健彦

北大阪反戦は、一一・一二月のとりくみの中で二〇数名の代表団派遣と、一定の組織拡大(全電通市外支部、北大阪支部各青対部加盟)を實現した。佐世保斗争に対する意志統一もまだ多くの不充分さを残しているとはいえ、かつてない深化した内容において行つてきた。そして、佐世保エンブラ阻止斗争は、現地における斗争のみならず、全国規模において、一切の意味で六七月の諸斗争をはるかに超えた内容で闘うことができた。しかし反戦部隊のとりわけ大阪の部隊の力量が、今だ充分なものになりえていないことも明らかにされた。我々はさらにつていした実力斗争のとりくみと、それを媒介とする青年労働者の結集を追及しなければならぬ。

にそれを表現させてゆくのかを模索する姿勢を示すものであつた。かつて我々は、ベ平連等市民運動にたいして「彼らの斗いを評価する。しかし、彼らの行動に答えるという事は彼らと同様の行動をとることではない」との意志統一を行つた。それは学生の斗いに対して、戦斗的の故をもつて斗争局面での無媒介の連帯で答えることに自足しえぬことを意味している。

原空母斗争 ―それは尼崎反戦として、反戦斗争の具体的政治課題に、始めて真正面から取り組んだ斗いであつた。それまで、砂川斗争や、訪ベト・訪米に対する二度にわたる羽田斗争にしても、何かの現地派遣は行なつたが、それは決して尼崎反戦として意識的に追求されたものではなかつた。それらはいつと、一厘目の斗いが我々の活動の情況や意識の外でつくり出され、(だからそれはいつも我々にとつては予想外の斗いであつた)その衝撃に動かされ、エピソード的に派遣するといふものであつた。従つてそれらの課題及び斗いの意義や問題は、部分的には考えられていても、未だ尼反戦

の中で我々の位置の論理的追及をとらして獲得されるのである。

の中で我々の位置の論理的追及をとらして獲得されるのである。

全体のものとして浸透せず、尼反戦自身の主体的課題として把えず、尼反戦内部に反戦斗争に対する考え方のギャップを生み出し、拡大していったのであった。これは、尼崎での反戦運動の不在というより無風状態の中で、未だ我々自身の運動形態をつくり出しえないという弱さ、大衆的拠点となるべき職場反戦をもつていないという弱さと、情況の急ピッチな進行とのジレンマの中で、このジレンマを克服して行く糸口を見出し得ぬまま揺れ動いていたと言えるだろう。

だが、二度にわたる羽田斗争は、どの様な形でしろ、徐々に波紋を及ぼしていった。このジレンマを越えるべき反省を、我々に真剣に促していたのである。

原空母斗争はこの様な中で、一月一日から、正確に言えば昨年の一二月三一日から開始された。正月から会員の内、二〇名近くが結集し、資料作り、機関紙発行、ピラマキ、オルグと活動を開始した。(これは結成時以来の事であった。)我々の目標は一・一五神戸領事館包囲斗争におかれていた。それはただ、寄港以前に於ける拠点一全国斗争、大衆的闘いが必要であると考えたからだけではなく、更に、原空母寄港に對闘いを尼崎反戦自身の主体的課題として受けとめ、浸透させ、この拠点斗争を通して、我々自身の大衆斗争をつくり出して行く方向を見つける上でも必要であつたからである。

そして、我々は、七日以降神戸領事館への坐り込みを連日派遣し、一五日には四〇名近くの結集をから取り、引き続き佐世保現地には

カンパで三名の代表を派遣した。この一・一五斗争とそれに至る連日の活動によつて、我々は、これ迄の様な我々と現地斗争とのギャップを克服し、現地派遣団を頂点に、佐世保斗争を我々自身が支えた。我々自身の闘いとして受けとめる事ができた。それはこの間フルに活動した二〇名の会員の一致した共感だつたのである。この事は二一日の街頭カンパ活動への二〇名の参加、そして二七日の現地報告集会への三五名の参加として現われた。

しかし、他方では、この様な我々の到達した地点から、逆ほどの様に尼崎の中に運動をつくつて行くのかという問題に直面している。というのは、一六日以降、現地の闘いに呼応して我々がなした事は、一八日の尼崎地評の映画会への若干の参加、二一日の街頭署名カンパ活動、そして二三日の大阪領事抗議デモへの十余名の参加でしかなかつたという事である。(報告集会も残念ながら我々が意識的、組織的に取り組んで結果ではなかつたのである。)既に一五日の闘いに対する救援活動と現地派遣の時点で、次の具体的活動への指導体制は限界に達し崩壊していったのである。

この事の問題を考へる時、我々は次の様な問題点にぶつかつていなくてはならないだろう。第一は、尼崎では労働者階級の本隊労働組合の反戦斗争での大衆行動がないという現実である。例えば、東京・大阪・京都を初めとする各地では、一八日を中心に大衆的な抗議行動が取り組まれた。それがどの様に、スケジューリング、動員方式であつたとしても、それは現地斗争に呼応した大衆的抗議斗争

であり、労働者階級全体の反戦斗争への参加を促し、逆に反戦青年委員会の活動を大衆化し、労働者階級全体との結合の条件をつくり反戦青年委員会の先駆的闘い、活動を継承し、発展させる条件を与える。だが現在尼崎では、JCを中心とする右の圧力によつて、地評では政治斗争はタブーといわれ、屋外集会、デモ等をやらない事は暗黙の承認事項といわれている。(それに共産党の大衆的政治斗争からの后退が、これを固定化している様に思われる。)

第二はこの様な尼崎の状況の中で、反戦斗争の運動体をつくり上げて行くべき我々にとつて、未だ自からの運動形態を創造し、定着させていない事である。署名カンパ・ピラマキ、映画会等を一歩こえ、「大衆斗争」に接近していく、継続的な運動形態、街頭行動を定着させる事が必要である。(大阪のデモへの参加は尼崎にとつては依然として外的である。)

第三は、反戦斗争の大衆的拠点、或いはその可能性を潜在的に内包する。職場反戦を未だもろ得ていない事である。この事は我々の活動を往々にして恣意的にする危険をもち、個人の自発性を、全体の政治情況の進展のテンポと照応した組織的大衆運動の成長に結び付ける環、活動斗争の大衆的意味を把える基準を曖昧にする結果をもたらしめている。

しかし、又このように尼崎反戦の客観的、主体的弱点を克服しようとする努力も、徐々にしろなされ始めてきている。その一つはタミナルでの連日の坐り込み、その継続である。更にセッケンデモ

を定期的に、継続的にもとりとする試みである。それらは反戦運動の行動が全く不在の尼崎にとつて、反戦斗争を行動によつて意識化し、かつ更に大衆斗争に接近する運動形態をつくり出し、定着させる上で、当面もつとも努力すべき事のように思われる。それは又、運動の量的発展の基礎にもなるのではないだろうか。

第二は一・一五斗争と現地斗争への参加が尼崎反戦にとつてもつた意味を再確認し、関西地区反戦連絡会議の先駆的闘いに結集し、或いは大阪の闘いに合流し、更に現地斗争に参加することによつて、情勢に對した。代表された尖端的闘い、全体の運動にとつて環になる闘いと結合を指す事である。そしてこの中から、現在の反戦斗争のもつべき方向、任務を汲み取り、それを尼崎にかえし、尼崎の運動の質的発展の推進力にしていく事である。第三は大衆的な映画会や講演会の開催、機関紙ニュースの発行と配布の定期化、討論会の定期化である。反戦を浸透させ、連絡を定期的に密にし、反戦運動の情況を的確に伝えること。第四に、この三つの活動の持続の中から、或いはそれに支えられて職場反戦をつくつていくこと。未だ職場反戦行動組織でないとはいへ、既にそのような芽は尼崎でもいくつか生まれ始めている。今后、極東の緊張と共に、日本の参

戦化、侵略体制が深まる中で、軍事一治安問題と運輸、通信、教育行政との結合が一層深まる事が予想される。しかしそれは又他方での芽を啗り生み出し、拡大させる。我々はこの芽と結合し、互いに支援し、発展させる関係をつくり、統一された運動体への発

腰を目指していかねばならない。そして又そのためには、職場に献身的で革命的な反戦の活動家グループをつくり出し、我々も又その成長していかねばならないのである。

吹田反戦 渡 辺 利 信

吹田反戦は一昨年の一〇・二一を契機に結成されましたが、この間のエン・ブラ斗争を斗かり過程ではつきり現われた吹田反戦の弱点及び地区反戦とは何かを明らかにし、他の地区反戦のための一助として、また現在地区反戦活動を精力的に展開している諸君の参考としてただければ幸いです。

今回の原子力空母佐世保寄港は一月中旬という運動の空白状態の中で設定された。この様な中で反戦青年委員会の中軸として登場したのが地区反戦だったことは言うまでもないが、この様な対応の速さは地区反戦が個人参加を中心とした活動家組織であることを示している。これは一見運動の即応性という点から考えれば長所となるのだが、他方後で述べる様な弱点も同時に持つているのである。第一点目にはまだ規約を持つていない地区反戦などもあり、その結果の意味が戦斗的に反戦運動を行なうという点から、もう一つ明確なあたりで規定されていないこと。この問題は今回の原空母寄港阻止現地斗争で明らかになつた統一戦線の問題に關して反戦青年委員会がどの様な位置をもつのが未だ不明確なことである。

まず、第一点目の問題は初期の段階では少数の活動家集団としてゆくことは地区反戦の性格から言つて当然のことであるが、ここで地区反戦の意味を再考するならば、現在の階級斗争の中で日本労働運動の最大の弱点である動員方式による労働運動の弱体化を再建して直おしてゆく作業を如何に進めて行くのか、である。地区反戦の任務はこれらの観点から初期の過程では個人参加が中心となるのだが、地区反戦の活動が活動家集団から組合青年部に広がつて行く時、地区反戦が量的な拡大を獲得しつつ、これまで持つて来た質的を復位性をさらに発展させるために如何なる組織方針が必要なのか。確かに現在の地区反戦の活動家の中には組織加盟を進めよ、という声があるし、これは一見正しい様に見える。しかし、原則ぬきの組織加盟は地区反戦の意味そのものを失なわせる。吹田反戦でも青年部段階での加盟に關して組合との関係がスッキリしなかつた場合が部分的に存在した。しかし、これらの問題は反戦青年委員会の会員が職場組織を形成することを中心として青年部加盟を進めてゆくことにより解決されるだろうし、吹田反戦でも一部の組合ではすでにその準備に入つてゐる。この様な職場組織を媒介とした時のみ活動家集団が持つていた組織性を量的に拡大せうるのではないだろうか。

第二点目の問題はさらに深刻である。なぜならば、反戦青年委員会の規約を作ることによつて一定程度、地区反戦の意味が明確になることは当然のことであるが、具体的な運動の過程ででてくる問題

に十分に答えられない限り、地区反戦に結集している会員を組合に

選えすことなく戦斗的街頭行動主義者の集団としてしか地区反戦および反戦青年委員会を位置付けなくなつてしまふのではないだろうか。この様な中からは原空母寄港阻止現地斗争で表われた統一戦線問題に十分答えることができないからである。例えば吹田反戦から現地派遣した人々の発言の中で次のようなことがあつた。「現地斗争の中で力強く感じたことは市民が真剣に寄港の問題を考えてくれたことと、全学連の人達が肉体の限界まで斗かつたことだ。しかし、

共産党は運動をやらなければかりか、斗かおうとする者に対しては力でおさえつけようとし、権力に対しては何もしない。社会党は一八日の斗争で佐世保橋のコース拒否という権力の弾圧に対して抗議もせず一〇〇m手前で曲つてしまつた。反戦青年委員会も地区反戦を中心とした部隊と他の人口との間に方針の上で違いが出て来ていた。これは統一行動に参加したものとして非常に悲しかつた。しかし、統一戦線はどの様に考えてゆけばよいのだろうか。この問題は現在の運動の中で反戦青年委員会がどの様な位置を持ちえるのかという点である。この問題について、吹田反戦として言えること

は、砂川、羽田、佐世保で成長して来た地区反戦の実力斗争部隊としての力を全関西に、全国に作り上げてゆくこと以外にはないだろう。これらの積み重ねの上に反戦青年委員会を統一戦線の母体として戦斗的の反戦運動を職場で、地域で発展させてゆくこと以外にはない。これらの為にも地区反戦の組織体制強化とそれに基づき全大阪

反戦の事務局体制強化は必ず成しとげなければならぬ。

我国吹田地区反戦青年委員会は組織体制強化をはじめとして、飛躍的發展を勝ち取るだろう。

大市大病院反戦 藤 井

砂川斗争で芽生え、羽田斗争で開花し、佐世保斗争で実を結んだ市大病院反戦は、七〇年安保とそれをつつみこむ全面的な社会反動攻勢に対決する闘いを準備しつつ、歩、一步と遅々たるものではあるが歩みつつづけている。

日韓斗争の中で生れた反戦青年委員会は、日々生産点でのシ烈な闘いを強いられる労働者、とりわけ青年労働者の反戦、反帝への志向性を職場において、あるいは地域において結集し、政府支配階級にぶつけてゆく最も戦斗的な部隊として今や登場しつつある。砂川一広島一羽田一佐世保と、この足かけ二年、反戦青年委員会の旗がひるがえるところ、闘いは続けられてきた。そしてエンタープライズ寄港阻止のための闘いは、反戦青年委員会の位置と任務を明確に提起したと言えよう。

我々、市大病院反戦は、確かに強力な、組織的基盤をいまだもつていないかも知れない。この間の闘いを通じて、我々は労働者の反戦斗争、政治斗争への参加と推進が、いかに困難な壁を有しているかを見てきたし、実際に感じてきた。だが、そのこと自体が、斗

いの必要性と、可能性をも同様に示しているのだということをも確認して来た。職場で、教室で、又は患者と接する中で、一つ一つ出てくる問題を解決していくことを試みたのは、我々の新しい(当然やらなくてはいけないことだが)経験であった。こうして闘いを強化、拡大してゆかねばならない。寒風吹きすさぶ夕暮の阪神前、参加できる者が参加しての街頭カンパ活動の中で、我々は多くの労働者、市民の潜在的エネルギーの一部にしろ感じることができたし、佐世保でのあの連日の激しい闘いの中で、ぶつかってはねかえされ、うちのめされる無力感を感じながらも、我々の肉体と精神が要求する闘いのすべてを全力をもつて闘い抜いてきた。今後さらに、地域的結合を求めめる中で、地域に反戦青年委員会を定着させ、大きく連帯した闘いを組織することが我々の課題である。

堺地区反戦青年委員会の闘い

堺地区反戦 和 泉 与志夫

一、エンタープライズ日本寄港が確定となり、大阪各地区反戦が斗争準備にとりかかっていた十二月中旬、堺地区反戦は遅ればせながら事務局会議で阻止斗争取組みを決定した。我々はエンタープライズ寄港は(1)核戦力のシンボルであり、ベトナム侵略における最大

の虐殺兵器である。(2)寄港承認は、佐藤政府の直接的侵略加担であり、参戦国への第一歩を踏み出すものだ。(3)日本核武装化へのステップである。(4)阻止斗争を展開することは、ベトナム人民支援の国際的任務であり、佐藤政府に対して七十年安保へ向けての突破口として実力をもつて闘うとともに、エンタープライズ寄港を執行するアメリカ帝国主義に対しても、ベトナム侵略阻止の闘いを展開しなければならぬ。(5)斗争は現地のみでなく、東京(首相官邸、米大使館)神戸、大阪(米領事館)を含む全国政治斗争として斗争を組織していかねばならない。等の確認の下に、一九六八年一月一日、原空母寄港阻止街頭宣伝を端緒として斗争に積極的に取り組む体制を確立した。

一、正月返上でビラまき、一月一日堺東駅東ビラまき。以後、一・七神戸領事館斗争、一・九一〇一・一堺、堺東駅前集会、ゼッケンデモ、びに現地派遣カンパ活動、一・一一堺東駅前集会、ゼッケンデモ、一・一五神戸領事館斗争。一・一五斗争ではデモの先頭を進み、あの不当逮捕によつて(十一名中、堺反戦六名)佐世保派遣を予定されていた六名中の三名が逮捕された。これは我々にとつて大きな痛手であり、救済活動など組織的にもピンチにおちいつた。だが断固として三名の代表派遣を貫徹し、このピンチを全員の結束によつてのりきつたことによつて、大きな自信を勝ち得た。以後の活動は順調に進み、二月一日「エンタープライズ寄港阻止斗争報告集会(映画)「権力」「イントレピッド四人の脱走水兵」へ平連、日中友好

協会共催ならびに協賛)は三百名の集会となつて成功。集会後果敢なデモを展開した。

関西の地区反戦の中では最大の六名の逮捕者を出しながらも活動を貫徹する中で、今や堺反戦は、大阪最大の北大阪反戦に次ぐ強力な地区反戦という評価をうけるに至っている。

しかし、我々は、デモ屋ではない。比較的労働運動の弱い堺地区における先進的な労働者の集団として来たるべき七〇年安保斗争を闘う統一戦線の母体として、映画集会や、講演会、学習会など多様な活動を通じて、堺の地に広汎で強力な青年運動を根づかせることが我々の目標である。

高槻反戦 足 立 洋 介

一〇・八羽田斗争は、私達高槻反戦にとつては、生みの親だといえる。私達高槻反戦はあの歴史的な突破口を切開く為にかかんに闘つてくれた労働者学生、そして反戦佐藤政府日本ブルジョアに対し真向から挑戦し、彼らに一つの歯止めを打ち込み世界の労働者に対し私達労働者の声をとどろかせた労働者、学生の運動そのものに応え、露骨な反動政策、労働者に対するブルジョアジーのより一層のより公然たるしめつけ、攻撃をはねかえすため、準備委員会が一〇月九日発足した。

私達高槻反戦の夫々のメンバーは、一〇・八のあの闘いを自分の

ものとしてではなく、唯マスコミによつて、私達が今思考していることを彼らが論理づけ、又運動として実際に行なっているのだと、第三者的に受けとめていた。

しかし、あの一〇・八羽田斗争を通じ私達夫々の内部に内から外へ、自分自からが闘うということが発生し、断固とした部隊を組織し斗かわなければならぬという事で高槻反戦結成委員会が準備設置された。今までは違つて自分自からが実際の運動の中に入り、より確固たる信念と今までの理論を実質化させ、断固たる反戦運動、反体制運動を展開するのだという決意の確認をした。

そして一一月一二日佐藤訪米反対斗争に私達はただちに取組んだ。佐藤が訪米するのは単に沖縄返還について話し合いに行くのではなく、日本が実質的にも又、公式的にもアメリカのベトナム侵略戦争に協力することを話しする為に行くのだという事を確認し反動佐藤政府の戦争政策に対し断固たる反対斗争を展開することを確認した。そして一ヶ月ほどビラ配りステッカーはりなどの運動を展開してきた私達は羽田にも行き断固闘い佐藤の反動政策を粉砕するのだということで羽田に二名の代表を準備段階であつたが送つた。そして彼らが羽田で確固たる労働者部隊として反戦部隊としてかかんに闘つている時私達高槻反戦のメンバーは一ヶ所に集まり討論会を夜遅くまで行なつた。

そうした準備期間を通じ一一月一七日私達は正式に高槻反青年委員会を結成した。

私達は気持もあらたに正式な高槻反戦として日本に大阪に於て前衛部隊として登場しようとした。

佐藤の公然たる反動政策、そして日米共同責任体制を打ちたて、東南アジアへのお互いの利害追求をしている。アメリカは必死に日本は、東南アジアへの侵略を思考し良きパートナーとして行動を共にしているし、又せざるを得ない。

この様な状況の中にあつて私達は今までの議会国会主義のみで何もかも解消してしまおうとする傾向は、もう今の状況においては、何の意味も全つたく持たないと考えた。私達はそういう事でこれらの斗争は武装し断固真正面からブツカリ彼らブルジョアジーを断固粉砕しなければならぬと考えた。

そして今年日米共同責任体制の具体的なものとしてのエンブラ寄港があつた。私達は寄港を断固粉砕するために多数の現地派遣をしたいという事で今年に入つての活動を市民に対するピラ、署名カンパ活動に力を注いだ。

連日の署名カンパにも、よく一〇名以上のメンバーが休まず活動した。そして斗争には四名の派遣が実現した。私達は、現地斗争と全日斗争の一体性を追求し、大阪の残留部隊との統一をはかろうとした。

一・一五神戸斗争を私達このような意味で斗つた。三名の逮捕者が高槻反戦から出たが、私達は初めて救対活動などを経験した。

一・二三斗争まで救対活動も含めて、連日の署名カンパ、集会、デ

モが続いた。

現地にいつたものも、大阪で斗つたものも、この斗いの中で大きく成長したと思う。高槻反戦に結集するメンバーもいろいろな単産、階層が増えてきた。佐世保斗争報告会も各所で持たれている。もちろん私達のこれからやらなくてはならない課題は多い。事務局体制の強化や、より地域に根を下していくための集会、映画会、学習会など、一つ一つ実現していきたい。

東大阪全電通反戦青年委員会

F 生

東大阪全電通反戦青年委員会はまだ職場反戦であるが、東大阪地区反戦青年委員会の結成を目標として、昨年一月二六日結成された。だから、我々はこのエンタープライズ寄港阻止斗争の中で鍛えられ、活動の仕方を学んできたのである。一月二六日、布施駅前においてピラまき、カンパ、一月一日ピラまき。一月七日神戸領事館抗議行動以降は連日の行動であつた。一月七日から一月二四日まで行動のなかつた日は二日だけである。文字通り、正月を返上して、我々はエンブラ阻止のため全力をあげて取組んできた。我々の自発的な精力的な活動は、東大阪地区の青年運動に革命的飛躍をもたらした事を自負心をもつて確認したい。のみならず佐世保現地斗争（五名の代表派遣）神戸斗争、大阪での斗いの中心の部隊の一つとして大きな活動をした事も確認したい。斗いの過程で、電通内では

多くの活動家が生まれ、結集してきたし、地域的にも、八尾・布施の両社青同、地域の個人的活動家、全通などの他単産から注目を受け、連絡体制が確立できたのである。

我々は佐世保現地斗争に参加して、奇妙な偶然に気が付いた。現地斗争で常に先頭に立つた「佐世保反戦青年委員会」が全く偶然とは云え、我々と同じ一月二六日にカンパ、ピラ行動を行い、一月一日のピラまきから原空母寄港の日まで、結集の人数の点でも、日程の点でも、同じような速度で生長していつたということである。我々は、あらためて「東大阪電通反戦青年委員会」の結成の意義を考えて見たい気持になつたのであつた。

その第一は、ベトナム戦争の激化と日本政府の参戦国化のエスカレーションという情勢のもとで、「動く核基地IIベトナム侵略の黒船」「エンタープライズ寄港」の目前に、敵と闘うために作られた組織であるという点である。

第二は、従来の労働組合の政治斗争に対する無方針と、指令一職員という型の形骸化と、運動の儀式化にあきたらず、各個人の自覚と責任において運動に参加し、一貫した論理と、ダイナミックな運動の発展を追求する青年の自主組織として作られたという点である。

第三は、従つてそこには、何をすべきか、何をすべきか、自由な意見を討論が保障され、その結論が直接行動につく事が出来るという点である。

以上の三点を、我々は「反戦青年委員会」のかけがえのない生命として確

働組合運動そのものの弱点を鋭く追求するアンチテーゼである。我々は、従来の組織、運動への失望という消極的な理由で集まる小集団ではなく、労働運動を内部から強化し、労働者、学生、市民を結集した真に敵と闘う統一戦線を結成し、七〇年安保斗争の中核部隊たらんとするものである。

この間全私生活をなげうつても斗争に参加して下さつた多くの活動家諸君に敬意を表したい。この間の我々の活動に欠かさんがなかつたわけではない。事務局としては、その不充分さを大いに反省している。第一に、情勢が緊急を要したとはいへ、事務局を中心とした組織体制が不十分であり、行動の前に充分意志統一するなどの事が出来なかつたこと、第二に、学習活動や情宣活動が出来なかつたこと。などを反省している。現在まで拡大した我々の運動の基盤を強化し、組織体制の確立をはかること、出来上りつつある連絡体制をより緊密にし、正式の地区反戦を結成することなどが課題であろう。

東大阪市、八尾市、柏原市など、東大阪地区の活動家の皆さん、青年労働者、学生、市民の皆さん、七〇年安保実力破壊をめざし、アメリカのベトナム侵略阻止、南ベトナム解放民族戦線支援、沖縄をはじめとするすべての軍事基地撤去、日本政府の海外侵略及び侵略加担政策の一切に反対のスローガンをかかげ、すべての青年活動家を結集した大衆的共闘組織II反戦青年委員会を作ろう。すべての場に個人加盟の反戦行動委員会を結成し、すべての組合青年部、個人、

しよう。我々は、皆さんの積極的参加を呼びかける。

最後に、佐世保現地斗争に参加した、一労働者の決意を紹介しておこう。

「：なる程、一・一七、一・一八、一・二一斗争には、佐世保市民が勇敢にも、全学連の行動に対し、暖かい手を差し伸べてくれましたが、その様な気持が何時まで続くであろうか疑問を感じます。しかし佐世保市民が一時的にせよあそこまで自発的に参加してくれたことに對し我々は感謝せねばならないと思います。が、これらの行動に對して、批判的な民青諸君、あなた達は、斗争展開をどのようにやりましたか、社共統一戦線を声明したにもかかわらず、あなた方のセクト主義行為は、自己反省すべきことである。我々に「行き過ぎだ」「暴力的行為だ」「トロッキストだ」等と言つてはいるが、他人を批判する前に、自分達の行動を見つめて批判できるのか、できないのかを考えて見る、といたいのです。我々に對しての批判は、民青のみならず、内部にも起こりつつある気配ですが、彼等にしてみれば身内であるので、批判は控えているが、目の上の「コブ」のように、我々の斗争形態は悪者にされているが、これらには、我々一人一人が困難に打ち勝ち、真の目的に向つて大きく前進していると考えておれば不安は消し飛ばすことができるだろう。我々の斗争には、色々な困難がまぢかまえていますが、決して挫折しないで、一步一步前進して目的に向つて行く事に期待を持たなくてはならぬ」といつたところが、佐世保斗争より帰阪した中で色々と感じた事

である。

東京からの報告

東京太田地区反戦青年委員会

羽田 二郎

東京では、現地佐世保と呼応し、連日の大衆的戰鬥的斗争が反戦全学連によつて斗いぬかれた。

一七日午后六時、日比谷野外音楽堂は東京各地区反戦、全学連に結集する首都、近県の青年労働者が約八千名、「エンタープライズ寄港阻止一・一七実行委員会」の主権の下に、圧倒的な集會がかちとられた。

集會は、東京地区反戦の五辻氏の経過報告、議長団選出から始まり、社会党伊藤青少年局長、全国反戦高見氏・砂川反対同盟・三里塚反対同盟等から決意表明が述べられた。尚、集會には清水谷公園からのデモ後合流した。市民文化団体連合約一千名も加わつた。学生部隊は全学連のほか、全都共斗(革マル系)四百名、自治会共斗(構改系)六百名を含めて約四千名、反戦は約二千名。

八時過ぎにデモに移る。出口からデモ隊は圧倒的ジグザグデモを展開。機動隊五百が霞ヶ関交差点で両側から、ジュラルミンの楯を並べて待機している。全学連を先頭に、サンドイッチから防衛するため、猛烈な肉弾戦。後方に延々と続く数千名の戰鬥的デモ隊を前に、官憲は全学連、反戦の部隊に弾圧を集中することで断念し、残

りの部隊は放置。前者のうち反戦は、首相官邸前、米大使館前で部分的に坐り込みを含む戰鬥的デモ、後者は装甲車がぎつしり並べられた国会前でも躊躇しながらも渦巻デモを含む戰鬥的デモを斗つた。労働者学生十二名が不当検挙された。

翌十八日、エンターの寄港通告に抗議して全学連約三百名が決起した。

午後三時、明大学館中庭に結集した学友は、全員ヘルメット・ブラカードで首相官邸へ向けて実力抗議斗争を行なうことを固く意志統一。現地佐世保では、全学連が機動隊との衝突にもひるまず米軍基地に向けて前進している旨が伝えられ、直ちにかげ足でデモは出発。国電有楽町から隊列を整えて前進。だが、機動隊五百が日比谷公園前で警棒を振りかざしてデモ隊めがけて「突撃」して来たため投石で応戦、ここで数名が不当逮捕された。一担有楽町へ戻り、再び機動隊めがけて猛烈な投石、突撃を試みた。機動隊は、日比谷公園前で、ジュラルミンの楯で防衛すると見せながら、右側歩道から別の部隊がいつせいに襲いかかり警棒でメッタ打ちを始めた。ここで大量一〇八名が不当検挙された。残る部隊全員は再度有楽町に結

集、十九日再度の闘いを確認して解散した。

市街地、しかも都心での初めてのこのような攻防戦で、官憲は初めから攻撃的に臨み、しかも全く関係のない所まで「後から石が飛んできます」とヤジリ、「只今学生諸君が暴力を……」と宣伝した。我々は当面、国家権力の化神機動隊との対決を通じ、国家の公共性というコロモの下から、権力支配者のヨロイをあびき出していかなければならぬであろう。

尚、日共はこの日、日比谷野音で約一万五千名を集め、「トロツキストが武装してこの集会に殴りこもうとしている」というデモゴキーを振りまいた。だが日比谷公園入口の五百の機動隊が、この集会参加者の顔をこわばらせ、緊迫した政治情勢と官憲の反動性を示していた。

エンター寄港当日の十九日、全学連は外務省庁内実力抗議集会を闘いとつた。

明大学館中庭に結集した学友は約三百名。全員闘いの決意を固め地下鉄霞ヶ関で下車、直ちに外務省へ。機動隊が「突撃」して来るが、デモの先頭部隊約百名はいち早く外務省構内に突入、四階の大居室前に坐り込み。エンター寄港抗議。大臣面会要求の集会を行なつたが、機動隊は学友をゴボウ抜き、八九名を逮捕した。

この闘いは現地佐世保の闘いを孤立させることなく、相互の発展を可能にさせるものとなつた。

二十日、日比谷野音で社会党、全国実行委員会主催の中央集会が

昼間、東京各地区反戦・全学連主催の集会が午後六時から行なわれた。

昼間の闘いは、約一万名（公労協中心）デモでは各単産宣伝カーが「ワッショイ」と掛け声をかけ、部分的にかけ足デモが展開された。尚、社青同協会派系学生約百名が、日比谷野音外で集会、米大使館への戦闘的デモを行なつた。

午後六時よりの闘いは、折しも日比谷公会堂で開かれていた自民党大会のサロン風のムードとチャーターされた首相官邸行きバス数台の貴族趣味と好対照に、熱気あふれた五千名の集会として開かれた。学生は全学連数千二百名、全部共斗（革マル系）約五百名、自治会共斗（構改系）約六百名、総勢二千五百名、反戦は約千名。十八・十九日の連日の斗争で、中心的活動家二百名を不当逮捕され、官憲の集中攻撃を受けてきた全学連は、この日もこれだけの学友を結集して不屈の姿を現わし、官憲を驚かせた。

諸潮流、戦線からの決意表明、特に機関決定を以つてこの集会に参加した勤労青年部の連帯の挨拶、同じく東水労が紹介された。デモコースは東京反戦の強硬な抗議によつて「認可」された首相官邸一米大使館のコースであつた。だが弾圧は十七日をはるかに上廻りサンドイッチ・両側から蹴る、殴る、腕をかかえて引きづるという状態であつた。だが、霞ヶ関交差点での肉弾戦から突破した学生部隊五百名は、米大使館前で待機する機動隊と後方からの機動隊の狂暴な弾圧と激突した。

原空母寄港反対斗争の最終日二十一日、横須賀では米軍基地前に五千の戦闘的労働者学生を結集して抗議集会が開かれた。

関西地区反戦青年委員会を中心に結集した労働者部隊は、神奈川反戦八百名、東京反戦六百名を中心に、福島、宮城などからの派遣部隊、それに組合動員の国労、全通の戦闘的労働者が参加した。

他方、首都一佐世保の闘いで大量の逮捕と負傷者を出し、弾圧を受けた全学連は、しかしこの日も不屈の斗志をもつた一千名の学友を結集してこの集会の戦闘的力を大きく高めた。

この日の闘いは、横須賀米軍基地と死守しようとする権力、機動隊と原空母斗争の過程を斗いぬいてきた労・学・戦闘的デモによつて展開され、その結果、横須賀の市街は数時間にわたつてマヒ、このデモ隊が支配することになつた。

官憲は、当初より徹底した警備重点を学生におき、東京からの学生バスの検問、駅前での訴問を強化し、デモに対しては強力なサンドイッチデモを強制し、反戦労働者部隊と六キロも離して北久里浜駅でおし出すという強圧ぶりを発揮した。

だがそれは敵権力の限界であつたともいえる。反戦労働部隊に対しては基地ゲート前の「内張り」（機動隊ビケ）作戦を以つて対応し、防衛にまわるはかばかかつた。

反戦部隊はかくて、基地正面での坐り込み、中央駅前でのデモと集会、座り込み等を四度にわたり貫徹し、横須賀市民へ佐世保の闘いを訴えた。原空母が日本帝国主義の手によつて横須賀に寄港させ

られるようなことがあれば、佐世保を上廻る闘いによつて、断固たる抗議斗争を日本帝国主義、佐藤政権につきつけることを。

そしてこの日の闘いは、まさにこの訴えが空虚なものではないことを証明している。原空母横須賀寄港は、横須賀市街を佐世保がそうであつた以上の反戦斗争の渦の中にまきこむことなしに実現され得ないであろう。敵権力はそのことをいやというほど知らなければならなかつたはずである。

関西の闘い——一五神戸斗争の意義

柳田進

(1) 一五神戸領事館斗争

エンタープライズ斗争に明けた六八年のまさに一月一日朝まだき関西各地で神戸領事館斗争を呼びかける地区反戦統一ピラがまかれた。つづいて四日、統一活版ピラが関西一円の駅頭に、街頭に大量に配布され、年末から文字通り正月を返上して取組まれた斗争は、一・七の第一波神戸斗争に結集した。各地区反戦の中心活動百名弱と結集して、ゲリラ的に闘われたこの斗争は、いまだマスコミがエンブラ斗争にスポットをあてない段階で、反戦組織の結集と闘いへの呼びかけの「烽火」となった。

烽火はあがつた。八日から一四日の間に一五斗争にむけて各地区反戦の結集は進んだ。かくて一五日、神戸市役所前に、大阪を中心とする各地区反戦の青年労働者三百名が結集した。この日の朝、東京飯田橋における全学連一三一名の事前検束は既に伝えられ、緊張した集会の後、佐世保行の全学連関西二〇〇名を迎えて、デモは神戸領事館へ向つた。デモ隊、とりわけ学連に対する機動隊の挑発はすさまじく、しばしば機動隊は学連デモに衝突をくり返した。反戦デモ隊は前を行く学連デモ隊を擁護し、機動隊を引きつけ分散させ

ながら進んだ。総数五百足らずのデモに動員された機動隊千三百。

当初の予定であるジョンソン、佐藤の写真をもやすことも、領事館前を埋めつくす機動隊の前に実行不可能となり、デモ隊はやむなく静かに、しかし断底として領事館前に坐り込みを敢行した。関西の反戦青年委に対する一二名逮捕という空前の弾圧はこの坐り込みの直後に、前例からのゴボウ抜きをそのまま検挙するという戦後史上かつてない凶暴さで行われた。反戦青年委の闘いにより、結果的には、二名の逮捕という最少の犠牲で、この闘いを貫徹した全学連関西は、反戦青年委の労働者の激励の拍手の中を一路佐世保に向つた。

(2) 一五斗争の意義

佐世保が羽田を越えたという意味は既に大方が指摘する如く、現地実力斗争の大众的支援という現地斗争の圧倒的高揚である。しかしジャーナリズムが見落したこの斗争の今一つの意義は現地斗争と結合した全国斗争として展開されたことである。我々は昨年の砂川羽田斗争がついに現地斗争に止まらざるをえなかつた総括から、エンタープライズ斗争を全国斗争として展開することに全力を注いできた。東京・大阪の二大反戦を軸に展開された一・一五神戸斗争、

一・一七東京における労・学一万の斗争、佐世保と東京の二隊にわかれた全学連の一八・一九東京アメリカ大使館、外務省乱入斗争はエンタープライズ斗争を全国化する基軸となつたのである。

かくて一・一五神戸斗争は全国斗争の両軸の一方として巨大な意義をもつと共に、それが一・一五に設定されたことによつて、全斗争の前哨戦の役割を果たし、関西のみならず、斗争の全国的高揚と流動化への大きな契機となつたのである。

(3) 関西地区反戦連絡会議の結成と地区反戦の拡大

一・一五斗争と闘いの全体の高揚のもたらした成果はさらに大きかつた。

一五斗争における弾圧、一七・一八・一九・二二と展開された連続斗争は、現地、佐世保の生々しい闘いの雰囲気を通して、砂川・羽田斗争における現地派遣団と残留部隊の感覚のズレは、この斗争を通じて克服された。現地斗争を遠感なく受止めた残留活動家の斗争意欲は、闘いの日々とその後の地区反戦の組織拡大の原動力となつたのである。

そしてこの闘いの中から、とりわけ、神戸斗争を全国関西的に取組む直接の必要性から、北大阪、尼崎反戦の呼びかけに応じて、昨年末、関西地区反戦連絡会議が結成され、エンタープライズ斗争の準備過程から、今日にいたる運動の一ヶ月、連続斗争というすぐれた機動性を要求される斗争に不可欠な機敏な組織的対応を示したので

ある。一月一日からの統一活版ピラの作製と配布、「原空母エンタープライズの寄港を許すな」の統一資料、一五斗争の弾圧の中に生れた統一教対、統一財政、全ては闘いの必要性から生まれ、組織的に定着化したものである。関西地区反戦連絡会議なくして、一五斗争はありえなかつた。エンタープライズ斗争がこの組織を生み出したのであり、それは又この斗争の大きな成果である。

現地斗争と結合した関西各地区反戦の闘いは、エンタープライズ斗争の生み出した広汎な労働階級の政治意識の高揚と流動化を地区反戦に結集する基盤を形成している。堺地区反戦の「映画と報告集会」における三百名結集をはじめ、各地区反戦は統々と青年労働者を結集しつつある。今や反戦青年委員会は、地区反戦を中軸に関西の地においても飛躍の時期を迎えている。

この米侵略機を

ベトナムに送るな!!

一五・二八砂川闘争報告決定集I

||五・二八から七・九へ||

五・二八砂川基地拡張阻止現地闘争大阪代表団

全大阪反戦青年委員会

一九六七・六・二〇発行

残部僅少ですがあります

一部百円

安保・沖縄・原空母資料シリーズ(1)

原子力空母寄港を許すまじ

エンタープライズとは何か、第七艦隊の配置と行動、沖縄問題、日本の自衛隊と米軍基地安保問題年表、など、日米侵略同盟の実態がわかる。

残部まだあります。

一部百円

不可視の前衛を幻視して自立するとは何か

佐世保斗争に参加して

橋爪哲也

私はこういう記事を読んだ。「心情においては、三派の諸君に共感」などと、幹部の中でもつとらしく口外している間に、反戦青年委員会は、体でその共感を示しだしたと……。

一・一八佐世保斗争に参加して、私が最も痛切に感じたことは、革新団体内部での分裂ということである。もちろん、私には斗争経験は浅いし、そういった知識も豊富ではない。だが、その私がそういった現象を強く感じたということは、現在の革新勢力を軟弱化していることを事実上意味するものであろう。私には、日共の諸君が主張するセクトなるものが不信に思えてしかたがない。今度の斗争の特徴なるものは、市民の同情（この言葉自体にも多少の疑問はあるのだが敢えて使用する）を得たばかりではあるまい。私はもつと深く、彼等の中に共鳴するものがあつたように思える。実力で示す三派の主張と、それを鎮圧する機動隊（国家権力）の暴力的な弾圧

現地斗争報告

を、市民の素朴な心でみつめ判断したものと考える。さらに、不屈に立向う三派の中に、今度の斗争の意味するもの、そして日本の現状をより深淵な部分において開眼させる作用があつたのである。ベトナム戦争はもとより、全ての戦争に対する嫌悪感、あるいは政治意識の芽生えともそれは言えよう。だが、それをあえて民主勢力の敵と非難することは、異常というほかはあるまい。二一日の松浦公園でのできごと。あの市民のつた行動は、完全に日共の諸君に対する矛盾を浮きぼりにさせたと言えよう。私は「エンタープライズ寄港阻止」「ベトナム戦争反対」を唱えるものが、何故に非難し合わねばならないのか、市民にとってはまさに納得のいかぬことだつたらうと思うのである。

さらに強く銘記せねばならぬことは、組織の確立とより以上の充実である。私は強固に巧妙に押し進められる帝国主義の方針を粉碎するためには、まず労働者が斗争の先端になわなければならぬと考える。現在、一連の斗争が学生によつて象徴されていることを見ても、事實は歴然としている。佐世保に集結した多くのデモ隊は労働者であつた。街頭を埋めつくして行なわれた一八日のデモ行進

も、全て労働者が主体であつた。にもかかわらず、斗争の内容が満たされたいとはいつたかどうか。そこに日本の労働運動の退化があるように思われる。今後さらに、七〇年に向けての斗争は激しく展開されていくだろう。そういつた今後の斗争に対しても主導権は労働者の手中になければならないと力説したい。学生の諸君も、やがては労働者となり労働運動の中に身を置くのである。そうなつたとき、彼等の運動が逆にすすんでいくことにも現在に多くの問題をのこすものがある。

しかし、現状をもつて考察してみると、職場斗争内部にも問題はあるし、社会全般にわたつても非常に困難なことがある。だが、今度の斗争で、国家権力の先端ともなる機動隊の無軌道な暴力ぶり、我々に対する弾圧がいかに苛酷で暴力的なものであつたかを如実に示すもので、それはうたがひもなく日本帝国主义、さらにはアメリカ帝国主義の危機感の明確な表われであると言える。

事実上今度の佐世保斗争は我々の敗北に終つたと言つても、そこに示す行動が、そういつた一連の権力に対する打撃を与えたことを高く評価すべきものであり、それゆえにまた、内部統制、あるいは内部分裂に関する大きな課題を、今後の斗争にのこしたことは見のがすことはできないであろう。

(全電通)

一・一五神戸総領事館

抗議デモにて

K 生

私は去る一月一日関西地区反戦連絡会議の主催する「原空母寄港阻止」のデモに参加した。神戸市役所に集合し、出発前に数人アジテーションをやつてゐる頃から、警察は写真や8ミリをとり挑発行為を行つてきた。三時半頃学生を先頭に出発して、約二〇分程経過した時、前の学生の一人がデモ隊の列を四列から五列にしたといふだけで検挙されました。四時半頃神戸総領事館の北側に到着すると、当日の警察の警備体制は我々を数倍もしのぐ機動隊を配し、他府県からの応援部隊も参加しており、デモ隊を両側からはさんでしまい、普通の行進もすることが困難になつてしまつたので停止し、皆坐り始めた。私は旗を持つていたので立つていましたが、警察が写真をとりに始めたので仲間を写真機から守るため持つていた旗をおつてやつたが、それもすぐとられてしまいました。仲間の一人が検挙されようとしていたので助けようと手を引つ張つたが、とても無理で手を放し坐りました。すると刑事の一人が「貴様俺の足をけつたか、公務執行妨害だ、検挙だ」とてつち上げの事を言つて、坐つて一分もたたぬ間に引き抜かれてしまつた。(検挙理由は道交

佐世保でのぼく

M 生

法違反の疑い)三、四人の刑事に手足を持たれ、機動隊の間を通る時、無抵抗にもかかわらず、なぐるけるのひどい暴力を加えられたり連行される際も私の申し入れも入れず後ろ手錠という、人権無視のあつかいを受けました。私は生田署へ送られ、十一時頃まで調べられ、十一時過ぎ留置場へ入れられました。毛布は五枚で昼は何もなく夜の八時頃でないとも毛布が入らないので非常に寒く夜も寝られなかつた。また差し入れ物品は前日の夜入れたらしいのだが翌日の十六日の昼過ぎ受け取りました。十七日検察庁へ送検され調べを受け皆と一諸になり、また生田署へ送られた。その夜は約四畳半の留置場に六人も入れられ、一人当たりの毛布は三枚であつた。やつと十八日午後三時頃釈放され、迎えにこられた組合の方に暖かい激励を受けました。十五日よりふりかえつてみますと、当日の警察側は東京でも全学連三百が佐世保へ向う途中、百三十一名を事前検束するとうりように神戸でも全員検束でのぞんでいた様だ。私はこの様な数々の卑劣な挑発行為、人権無視など不当な弾圧を肌で感じ、これが現在の警察の実体であり、我々は弾固として斗わねばならないと思ひました。

(全電通)

▲一七日ーぼくは恐怖にとらわれたV
一六日夜、私服警官が右往左往する大阪駅を出発する時は、緊張で体甲がこわばつた感じだつたのに、一〇数時間の列車の旅のあと佐世保駅に降り立つた時には、もうすつかり弛緩してしまつていた。駅前で大阪反戦の部隊の点呼が終つて出発しようとした時も、まだぼくは、おおよそ緊張とは縁のない、軽やいだ気分、斗争本部への道筋などを尋ねに歩いたりしていた。そんな状態のぼくの処へ、突然全学連の伝令が現れたのだ。それは全くぼくにとつては突然だつた。予想もしていない現れ方だつた。『全学連の部隊は朝から平瀬橋で機動隊と衝突を繰返したが、先程、粉砕された。今、再び隊列を整えている。もう一度基地突入を試みるので反戦部隊も参加してもらえないか。』と、低いて緊張した早い口調で喋るのを聞き疲れたの刻まれた伝令の顔とズンぬれのその足元を見たぼくは、弛みきつていた全身が鳥肌立つ様に一瞬の間に緊張を取り戻していくのを感じた。「機動隊」「衝突」「突入」ことばが、つい最近観たばかりの羽田斗争を扱つたフィルム「権力」の映像とダブリながら、ぼくに迫つてくると同時に得体の知れない、叫びだしたい様な「恐怖」がぼくの内部でふくれあがつてきた。「もう斗いは始つていたんだ。

戦線がぼくたちを求めている。反戦も行かなければならない」と、とつさに考えながら、先程からおそい続けている「恐怖」を見詰めていた。伝令は、ぼくの返事を待っていた。だが、ぼくは一瞬、絶句した。出発前、幾度となく、自己の斗いへの意志を確認した筈だったのに、この伝令のことは、ぼくの決意が単に観念的なものであることを、いとも簡単に暴露したのだ。自分自身にやり場のない屈辱を感じながら、やつとの思いで「一寸待っていて下さい。隊の責任者に伝えますから」と言つて伝令から離れた。責任者のKと伝令の間の取次ぎ役を終えた後、斗争本部へ向う間中、ぼくの内部で起つたこの混乱はどうしようもないものとして見詰めている以外になかった。ぼくの佐世保斗争は、自分の内の恐怖を見詰めることから始つた。

八一日―恐怖の質は変つたV

五万人集会は市民グラウンドで開かれた。そこへ参加しよみとした反戦部隊は、会場入口で、共産党系部隊のヘルメットと棍棒で武装したビケで迎えられた。先頭で責任者たちが通せ、通さぬと押問答をやつてゐる。「最前線に敵と対峙した時位、日頃の論争を一時中断して、銃口を敵に向けるのが戦斗の鉄則というものではないか!?」ふとぼくは、前方を見ながら考える。同時に、昨日、駅から斗争本部のある総合会館への道筋の佐世保橋上を青一色で埋め、交通と不法遮断していた機動隊を思い出した。巨大な官僚機構によつて構築された国家権力。その意志のままにメカニクに発動される非人間

的な暴力集団。ぼくたちの入場を拒んで無表情に立ちつくしている白ヘルメットと棍棒で武装した集団を見てみると、機動隊に対して持つた想念とこの集団が見事に重なつていく。この集団にはことや論理は通じつこないとぼくは直感する。実力で排除しろ!!」反戦の隊列は叫びと共に前進した。

集会は、後楽園球場に匹敵するといわれるグラウンドを人々が埋めつくしていた。ぼくは昨日から佐世保橋を埋めつくして占拠している青い集団が、この人波によつて押しつけられ、道の片隅に小さく縮こまつている光景を想像した。「安保斗争の時の御道筋デモが再現されるかも知れない。」それは結局、白日夢にすぎなかつたが、その時、ぼくは、可能性のあるものとして想像していたのだ。

五万人がデモに移つた時、学生の隊列が先頭に出ると同時に駆け足で佐世保橋へ向つて行つた。先陣を切つて行く者達を見送りながらぼくは心からの声を送つた。五万人デモの尖兵が「権力」へ前哨戦をはじめたのだ。真摯に「権力」の磐に突撃を試みる学生部隊。彼等の行動について平時、理論的にどれ程、激しく論争しあつてきたにしろ、今、敵と真向から対決しなければならぬ時だ。ゆつくりとはあるが、確実に前進している我々労働者部隊は、やがて橋に到着する。その時：：ジグザグデモで額に吹き出しはじめた汗の塩つばさを唇に感じながら、ぼくはすこく幸福だつた。「入場時の門でのイザゴザなんかは、結局、昨日までの日常性がちよつと顔を出したにすぎないんだ。」ぼくは、なんとお人好しだつたことか。

この日五万人の大部隊はその姿をついに佐世保橋へは現わさなかつたのだから。佐世保橋へ現れた労働者部隊は、反戦青年委と福岡県評の約七百人の部隊だけだつたのだから。この労働者部隊の行動を朝日ジャーナルは「統制違反」と表現したが、それはむしろ真に権力と対決しようとする時、それを徹底的に追求しようとする者なら理屈抜きに、理解できる戦斗的プロレタリア的モラルを具現したものにすぎなかつたのだ。それにしても、その部隊の人数が五万人中の二割にも満たなかつたとは：：。ぼくは夢を見すぎたか、想像力が旺盛すぎたようだ。橋のたもとでの十数分、催涙ガスに流したくもない涙と鼻汁で顔中をグジャグジャにしながら、学生部隊の繰返す激突を見ながら、ぼくは自分の中にあつた恐怖が変質してしまつたのを感じて、驚いた。昨日「恐怖」という抽象的なことばで形容するしかなかつた。得体の知れない感情はすでになく、そこにあるのは、やがて感じなければならぬかも知れない肉体的苦痛への恐れにすぎなかつた。しかしそれは、もうぼくたちが次に取るべき行動を阻害したり、躊躇させたりする程のものではなかつた。ぼくたちの意志を力で押え込もうとする者への怒りを論理として確認した時、そこに残されているのは、怒りの論理を行動化することだけだ

というところをぼくは実感した。ぼくは仲間と一語に叫んだ。「指揮者、前進しろ!!」「学生を見殺しにする気か!!」

佐世保から帰つてから読みはじめた本の中に発見したいくつかのことばがいまぼくをガツチリととらえている。

「(武装) 大衆斗争の「幹部たち」とは、その斗争を指導する能力があることを戦場で実証する人たちのことだろう。ところが、どれほど多くの政治指導者たちが、真剣に、具体的に、彼等の人民の戦争に関連した軍事諸問題を検討するよりむしろ、世界労働運動のために毎日日常生活を送り、あるいはじぶんたちが生き残ることだけ頭がいっぱいの制限がない「民主的国際組織」のメカニズムの中に吸いこまれる道を選んでいることか」

「前衛なしに革命はありえないこと。この前衛は必ずしもマルクス・レーニン主義党であるとはかぎらないこと。さらに、革命を行なおうと欲する人びとはこれらの党とは別の前衛にみずから組織する権利と義務をもつてゐること。」

斗争の中で連帯

反戦・市民・全学連

西山 英 夫

アメリカ第七艦隊第一機動隊所属原子力航空母艦エンタープライズ号は、佐世保市民の嫌悪にみちた地元をまわりいたたまれなくなつたかのごとく、予定を一日くり上げて、太平洋を一路ベトナム海域に向かつた。その日二十三日夜、我々京都反戦青年委員会六〇〇

人のデモは、四街道、河原町通を通して、ある異様な経験した。それはデモの沿道からくる強烈な叫び声であり、拍手であつた。「ガンバレ」という声であつた。

しかし、反戦青年委員会現地斗争団にとっては、そんなことは全く、何らこと新しいことではなかつた。現地佐世保市民の中から、湧き上がった反戦青年委員会、全学連への声援はそれに数倍するものであつたから。私たちが機動隊の前にすわり込んだとき、佐世保の「おばさん」から催涙液にぬれた着衣の「替え」にと、あるいは高校生からのペンやカステラのさし入れ等々、物質的なそれは「声援」のただの駄じやれや、酔狂ではないことを証明した。

それよりも何よりも方に及ぶ市民が我々の行動を見守つていた、ということをも報告しておかねばなるまい。去年の秋の羽田での学生、青年労働者をして「孤立」した「暴徒」とマスコミがいつたごとく、佐世保市民に再び言うのなら「孤立」とは「暴徒」とは、一体何をいうのだからか。確かに、彼らは「鳥合の衆」であり「やじ馬」であろう。しかし、それ故にこそ、私たちはこの人々こそ、真の平和」とは、又「激励」の意味を知つてゐると思うのだ。

いわゆる「全学連列車」で佐世保入りするとき、沿線の人々は、(その列車は催涙ガスをあびた学生たちのアノラックとキルティンから発する刺激臭を発散しながら、ひた走りに走つたのだが)列車に向い手をふり、又昼休みに作業服を着た若者たちは、大声で「バンバン」と叫んでいたのであつた。これらに加えて、確信して言

えることは、佐世保橋、平瀬橋においても、人々は「警官は立ち去れ」とか「右翼はかえれ」とかいつても、決して「棍棒は捨てろ」とはいわなかつた。むしろ「警備」にあつた警官から報告されてゐるごとく、市民の中から、センガクレンより先に投石があつたのだつた。

日本の縮図ともいえる基地の町佐世保は、今や十年前よりも生活保護世帯は三倍になり、又、軍船が入港しても利益を得るのは、「外人バ」と「タクシー」だけであることによりやく、はつきりした矛盾を感じとりつつあるのだ。

我々、反戦青年委員会京都代表団二十名の斗争は、できる限りのベストを尽した。そして、斗う全学連との連帯した行動であること、常に至上目的とした。そして、その中で逮捕者をも出すという激しい衝突をも三日間を通じてくり返したし、又、すわりこみという無言の抵抗をも追求した。十八日五万人集会後の斗いにおいては全学連を四方包囲した機動隊の一方を、しつようなジグザクデモによりついに突破し、彼らと合流したのであつた。そこに我々は明らかな「連帯」を見たのであつた。それは全くの「連帯」の「萌芽」であつたかもしれないが、学生と労働者佐世保市民との連帯の突破口であつたことは明らかである。以後、けい棒でこぶかれ、乱斗靴でけられたがらも、反戦青年委員会は闘いつづけた。

最後に、この学生との連帯の萌芽は、二十一日なお佐世保にふみとどまり斗う学生と、佐世保市民を激して引き上げざるを得なかつ

た力量不足によつて、より強固なものになる機会を失したことを反省しておかねばならないと思う。

いずれにしても、佐世保市民にみられるごとく、市民、労働者大衆のもつ思想と行動こそは、ナスイングであるかの如く見えようと、時としてはオールであることを見せられた佐世保の四日間であつた。(全国一般)

反對抗議団相互で

同目的なのになぜ反目するのか

南 洋 盛

十八日、眠り眼で平戸から降り立つた。ホームまで機動隊が一杯だ。シユブレヒコールの応酬が聞こえる。愛国党と寄港抗議団の声あのバカヤローと思う。もちろん赤尾敏、ちよつと漫才みたいだ。

すぐ反戦青年委員会に参加して、市民グラウンドの五万人抗議集会へ。ここで思わぬ(私には)事が起つた。正門が閉ざされている私には理解出来なかつた。裏門に向くと、門が半分だけ開いて、中から民青の諸君がにらんでいる。前夜から泊り込んでゐるらしい。反戦青年委員会と三派全学連の諸君を会場に入れぬためらしい。ス

クラムを組んでドアを押し明けた。角材と鉄棒でなくつて来たが、横から押し入つた。

何んで共斗してゐる我々を、会場に入れぬのか。何んでエンブラ寄港の反対者どうしがにらみ合わねばならないのか。民青の諸君は佐世保に来て抗議の相手を間違つてゐるのではないか。イデオロギ一、行動が相反しても、エンブラ寄港の阻止が目的なら共斗してよいではないか。相互の批判は又違つた場でやつたらよいのに。今度の抗議集会はエンブラが、日本に核を持ち込み、日本が核基地化、ベトナム戦争の参戦国家となる危険から抗議集会をしているのに、ここで又正門で三派全学連の諸君に乱暴してゐる民青の諸君に疑問を感じた。

五万人集会は大成功、政府と市長に抗議文を採択、全国実行委員を先頭に反戦青年委員会が続いてデモに移つた。すぐに学生諸君が先頭に走りさつたがここでは一語に行動してはしなかつた。ジグザグデモ、フランスデモをしたが、デモ届けコースの米軍基地へ向つた。基地前の佐世保橋に近づくにつれ、催涙ガスのため、涙がポロポロ出て、顔がひりひりする。今日の学生は武器と言われるような物は全然持たない。機動隊と学生諸君の押し合つてゐる佐世保橋にいつたら、全国実行委員はいない。何んのための先頭に立つての抗議デモだろう。全然たよりのないが、ないなあと思つた。

全学連の諸君がスタラムで機動隊にぶつかつてゐる。官権、実力行使に腹が立つた。

佐世保にはデモを規制する条例は全然ない。デモは届け出れば、そのコースを通ればどんなデモの形を取ろうが許されているのに、機動隊の宣伝班によると、「違法なデモ」「交通麻痺をさせるデモ」と言う。官権自身で橋にバリケードを組んで交通をストップしているくせに。

その間中、涙が、鼻がポロポロ出て来る。市民も報道関係者も、ポロポロ、行過ぎだとの批判がごうごうと市民から起こる。この日の特徴として、三派全学連の諸君だけの実力行使ではなかつた事、全国反戦、現地常駐オルグ団、自治会共闘等、三派の諸君と一緒に実力行使している。何んで我々労働者もこのように共闘出来ないのだろうか。

機動隊は売国奴だと市民がどなつている。倒れた学生を足でふんで、殴る、蹴るの乱暴、動けなくなつてから逮捕して行く。座りこめている学生を、足を持ち上げて、逆にしてから、又、殴る、それも五、六人で、市民も、報道班もかまわず殴る、まるで逆上した狼だ、学生の新聞クラブの記者なんかふくろ殴きだ、佐世保においての機動隊は市民を守るための警官ではない、国家権力をかかえの暴力団だと思つた。

学生を追う機動隊との間に入つた全国反戦はすぐけちらされた。ヘルメットの上から殴ぐられて、あわてて逃げた。前に共産党のデモ隊がいて、その後逃げようと思つたら、すごい形相で立ちふさがり、中に入れてくれない。同じ仲間、抗議団なのに、見学の市民

さえ、かくしてくれるのに。市民の中にも彼らに対する批判が上がつていた。市民の中にも彼らに対する批判が上がつていた。市民も基地に抗議に行けそうにないので、午後四時過ぎ、駅の方に引返した。途中で、共産党に属する現地の人であるう、六五才前後の、おじいさん、おばあさんらのデモ隊に拍手され、涙が出そうに嬉しかつた。これが本当の姿なのだ。

この一日、共闘に対する疑問だらけの一日だつた。絶対に日本がベトナム参戦国家に、核国家にならないように、頑張り通そうと思つた。

私達の職場の中だけは、仲間われのない同じ目的に一致団結して進める組織に行きたいと思う。最後にカンパして下さつた、組合員の皆様には厚くお礼申し上げます。(全電通)

佐世保現地報告

野瀬

一七日正午、我々は佐世保に着いた。戦闘服の機動隊と白い服を着た警察権力のお出むかえ、そこには是非でも権力に従がわせようとして法治国家の仮面をようしやなくかなぐり捨てた支配権力のろこつな姿があつた。

我々が自由に橋を渡る事が出来ず、バスで総合会館に行かねばならないなどは、大阪を発つ時考えもおよばなかつた。夜我々は「全国青年統一行動佐世保大集会」に参加して昼間全学連の諸君が闘つた平瀬橋を通つた。

そこにはこわれた血のついたヘルメットがちらばり、催涙ガスが今だに残つていて眼やのどに異常なしげきをよんだ。デモ隊は佐世保駅で解散であつた。この最後尾についていた学生諸君に十数人の右翼、暴力団が五寸くぎをさしたこん棒を手に手になぐりこんだ。

幾人かの学生が負傷し、宣伝カーから緊急事態が流されると、ただちに我々は行動を開始した。「ジグジグデモで暴力団をげきたいしように」デモ隊を前に彼らは逃げ去つた。だがこの時警官は何をしようか？ 彼等は何もせず、まるでうすら笑いをうかべるかのようか？ 彼等は見ていたのだ。何人もの学生が、ヘルメットさえかぶらぬ学生が暴力団にキズつけられるのを。駅前にいた機動隊は一

体何のために警棒を持っていたのか。思えば学生のヘルメットを「凶器」としてうばつたのは彼等警官ではなかつたか。

一八日、我々は五万人集会の市営グラウンドに入るのをあつた。誰のためにかしらぬがヘルメットをかぶり、角材を持つた民青に阻止された。我々はエンブラ客港阻止のために佐世保に行つたのではなかつたか？ 民青は我々反戦を全学連を阻止するために佐世保に来たのか？ 集会終了後、佐世保橋で全学連の諸君があつた。催涙水の放水と、催涙弾と、警棒の雨の中で闘つた時彼らは何をしていたか？ 彼等は許可されていた佐世保橋へ平瀬橋コースが機動隊によつてふさがれているのを見ると、ただちにコースを変え、全く意味のなかつたデモを続けたのだ。米軍基地内のデモコースを通らねば当日のデモの意味は全くなかつたのに。我々反戦が全学連の諸君と機動隊の間に入り、共に警棒の雨の下になり、血を流した学生が、労働者が、日共のデモ隊の中に逃げ場を求めた時、分裂主義者は入れるなとスクラムを組んで、追い返したのだ。

我々は全学連と共に闘い佐世保橋を突破するため、佐世保橋に向つた。東京、大阪、徳島、佐世保反戦、現地常駐オルグ団等労働者は橋の前で全学連の闘いを見守つた。見守る事しか出来なかつた。一方的に橋を封鎖し、催涙弾をうち、放水する機動隊に彼等はジグザグをくりかえし、幾度目か突破を試みた時、急に機動隊がおそいのかかつた。その時橋の上には我々の後から来た自治会共闘の学生達もいた。我々反戦は機動隊と学生の間でジグザグでわりこもうとし

たが、反戦は丁度機動隊に側面を向けてしまい、暴力団のような奴等の警棒の雨の中に入ってしまった。「逃げる」私はむかむかゆりて逃げた。そしてコースを変えたデモ隊に会った。前記のような彼等のセクト主義をつうれつにみせつけられたのだ。

(全国一般)

前進した闘いの中の団結

大崎弘志

米軍原空母「エンタープライズ」寄港反対勢力に対する佐藤政府の弾圧は、空前の規模でもつて行われた。我々が現地佐世保に向けて出発の日、大阪駅はまさに「戒厳令」がしかけている様な状態であつた。中央コンコースには、一群の機動隊、数十名の私服が動員され我々反戦委と同じく現地向かり学生諸君を監視していた。学生諸君に対しては旗サオまで取り上げると云う暴挙にでた。この様に行方は、大阪だけでなく全国的に行われ、東京に於いては「事前検束」まで行うという高圧的態度である。現地佐世保では八千人(割)服私服警官を動員して米軍基地に通ずる道路は、封鎖され通行する一般市民まで検問すると云う戦時体制そのものであると思われた。この事により我々は、佐藤政府がエンブラ寄港により日本の核基地化、核保有国の仲間入りを、絶体に行おうと云う表われである事が認識させられた。又、エンブラの寄港が、それ自体ベトナム侵

略の動く基地としての役割を果している以上、佐世保、横須賀がベトナム侵略の後方基地として活やくしている事実を認めざるを得ないであろう。我々反戦委がベトナム侵略反対を叫ぶ限り、この様な事実を考え断固エンブラ寄港を許してはならないと抗議行動に参加したのである。結果としてエンブラは、佐世保に寄港したが、全学連(三派系)諸君の直接的、戦力的実力行動及び反戦青年委及びその他の民主団体学生諸君との連帯的行動が、佐世保市民の米軍艦寄港にマヒした攻撃を打ち砕き、自己の問題として考える様になつた事は評価していいだろう。しかし我々は、この一連のエンブラ寄港阻止行動の過程で、きわめて残念な、はずべき事実も報告しなければならぬだろう。十八日現地統一集會会場に於いて日共、民青の諸君が、我々全国反戦青年委員会の入場を実力で妨害した。彼らは手に手に角材を持ちヘルメットをかぶり我々におそいかかつた。我々の内数十名の者は、なぐられた。我々全国反戦は全国実行委の構成メンバーでありそれを表示すべく旗を立てて入場しようとしたのにこれを妨害すると云う事は、平常彼らが云っている統一集會破壊集団排除とは何か、彼ら自身が破壊集団ではないか。しかし彼らはこの事は誤りであると云つた。だが入口で集會参加の団体の団体個人をめぐらめつぽう排除する様に幹部から命令されたのか、そうであれば彼ら(日共・民青)は、もはや民主団体でもなければ、統一集會を行おうとする集団でもない。最初から統一集會などやる気がなかつたと思われてもしかたがないだろう。二一日に至つてはその

妨害行動が、市民の手により粉碎させられた、過去数年間非難しつづけてきた(赤旗等により)『暴徒』、一般市民からの『のけもの』二月二〇迄の当局の回答の見込みが何もないということ。：：：になつたのではなからうか、この佐世保斗争を通じて、権力・ブル新・日共・赤旗が何と非難しようが、市民との連帯の上で戦い続けたいのは、三派系全学連の学生諸君ではなからうか。三派の諸君を暴徒呼ばわりして非難し続けた『日共・民青』が、市民から排除され、暴徒呼ばわりされた『三派』の諸君が市民の手で守られたと云う事は、どういふ事なのか。我々反戦青年委員会が、彼ら『三派』の学生諸君と行動の連帯をもつたと云う事が、どの様な意味をもつか、これから『三派』の諸君と共に戦つて行く事の重要なポイントであろう。(全電通)

エンタープライズを

二度と寄港させるな

多田洋子

昨年末から、全学連の「第三の羽田斗争・エンブラ寄港実力阻止」が新聞・テレビでちまたにあふれ、あたかも暴力団の「公開はたしあい」が予告されるかのような印象をばらまいていた。

その時、病院では、第二新館移転の準備が裏で進められ、毎日の

ように組合のピラが、当局との人員問題の交渉を知らせていた。一二月二〇迄の当局の回答の見込みが何もないということ。：：：の整理がはじまつていた。このまま行けば、五九四名十という要求など全く空念仏になるといふ感じが慢延し、又医者は「ベットばかり増える」という危機感を心のすみに抱いて、市の官僚が悪いとぶつくさ云つている。病院まで営利主義が露骨になり、物価は値上がり患者への医療費負担が増大して、生活は二一六年、いや十年前に比べても、ちつとも楽になつていないのに、政府は「アジアの平和、極東の安全のため、国民は国防意識を持たなければ」と、まるで、アジアの盟主になつたように宣伝している。

佐藤首相の訪ベトナム訪問エンブラ寄港は、一連のつながりがあつた。ヴェトナム戦争へのより積極的露骨な加担を軸にして、「沖縄」が、核武装が、七〇年安保が語られた。今度のエンブラ寄港は、この一連の東南アジアの経済的侵入、帝国主義軍隊の侵略が、アメリカとの強盗同盟を通じて、日本人民の戦争反対の声を押しつぶして遂行されることを、はつきりと示した。

政治的反動化、それはとりもなおさず、戦前の日本帝国主義の朝鮮、満洲をはじめとした他民族抑圧の第一歩ではないのか？ その片棒をかつがせるための労資協調は経済的抑圧でしかないのだ。エンタープライズ寄港は、一昨年来の政府の念願であつた。

マスコミをあやつつて、突出した学生の反戦斗争を「一部の暴力サセホへ取材に行つたある記者はつぶやいた」社会党、共産党が全集團」として徹底的に弾圧し、アメリカとの野合を進めようとした佐藤政府は、羽田の斗いでは、世界の反戦斗争によつて、その意圖を一部挫折し、センガクレンは世界の反戦のアイコトバになつた。今度の佐世保は、センガクレンが一つの象徴となるのではなく、それに続く労働者の部隊が実体を荷わなければならぬ闘いではなかつたらうか？

社会党、共産党は五万人を動員し、サセホをデモ隊でうずめつた。

基地のドックの労働者は修理拒否をしたら？
かつて国鉄労働者が武器輸送を拒否したように……

しかし、センガクレンの闘いを、自己の闘いと結ぶつてようとしたのは、唯一反戦青年委員会と市民だつたのだ。私は見た。ヘルメットで身をかためた労働者が、学生が弾圧されている佐世保橋をう回してデモを続けたことを……予定コースを変更してまでも避けて通つたのを……最も近くにいなながら、同じ場所にながら、最も遠く見物の市民と学生の距離よりも遠くへだてられたのは、警官のシユラルミンの楯だけだつたのだろうか？ マスコミの論調にまどわされ議席数を増やすことにのみ熱心な社共の幹部は、佐世保市民にのりこえられ、マスコミにさえ乗り込められてしまつた。参加した五万人の労働者は、職場に帰つてから、むしろ真実を知つたかも知れない。

あんな暴力に訴えなくても、ほかに方法が……？
そうなんだ、他にもつと方法があるうちに……

私達はまだまだ少数だつた。体ごとぶつけてあの激しい弾圧をしなくてはならぬ。職場へ帰ると会社と、組合の二重の処分にもなりかねないのだ。
あの五万人が、一語に手を組んで闘つたら、エンブラは来なかつたらうか？

たかも知れない。

それでも政府はごり押ししたかも知れない。

でも職場に根を下ろした反戦青年委員会は、全ての労働者の実力を政府に向つてぶつけるだろう。

全ての労働者の実力、それは日々の労働の中にあるのではないだろうか？

一〇・二一ストが毎年ベトナム反戦を呼びかけてはいても、念仏に終つているのが私達のまわりの状況ではないか？

佐世保の市民、大阪の市民は、この一週間の中に、自らのことばで考え出した。私はカンパを呼びかけていて、佐世保で闘つて、ひしひしとそれを感じた。戦争を好む人はいない。核兵器に賛成する人はいない。

けれど、それをどう表わせばよいのだろうか？

私達のまわりには組合や自治会があるではないか？

私のまわりの組織を私は身近にひきよせよう、反戦青年委員会はそれのとりでとなるだろう。

ある市民は云つた「基地のバーや店は、全部店を閉めたら？」
そして「平連は」脱走のすすめ」をした。

かつてロシアで軍艦内部で兵士の反乱がおこつた。エンブラの兵士が、北爆を拒否し、闘いを拒否し、自らの政府への闘いをはじめたら？

私達はどうしたらよいのだろうか？
まず、私達はピラをすつた。署名を集めた。

佐世保へ代表を送つた。
寄港を本場に止めさせる闘いを組むために、労働者も全学連と共に闘うために……

ただ、五万人の労働者は、ニュースと街の群集で、学生の闘いを「見た」にすぎなかつた。

私達はまだまだ少数だつた。体ごとぶつけてあの激しい弾圧をしなくてはならぬ。職場へ帰ると会社と、組合の二重の処分にもなりかねないのだ。
あの五万人が、一語に手を組んで闘つたら、エンブラは来なかつたらうか？

私達はまだまだ少数だつた。体ごとぶつけてあの激しい弾圧をしなくてはならぬ。職場へ帰ると会社と、組合の二重の処分にもなりかねないのだ。

あんな暴力に訴えなくても、ほかに方法が……？
そうなんだ、他にもつと方法があるうちに……

私にとつて、生まれて初めてのアンチウオーの実力行動の第一歩が、エンブラ寄港阻止斗争に始まつた。一・一五以来、デモに明け暮れた何日かを思い返したのは、今日だけではなかつたけれど、私自身の中で何かが激しく燃え、大きな物体が心の中にデンと居座つた感じなのである。

沢山の人から沢山のことを聞かされた。私がずつと顔をそむけて来た新聞の第一面、少くとも昨今は、ペンを握つて読むような状態までがみられるようになった。

何も知らなかつたし、考えたくても、その指針さえわからなかつた私にとつて、友達が、仲間が教えてくれたものは、私の一生を左右するのではないかとさえ思われた。しかし私自身何も知らな過ぎることを、自分が一番よく知つている。私は即座に、判断を求められ、深く考えることもせずに行動したのではなかつたかと深く反省している。けれど現地へは行けなかつたにしろ、私は私なりにやつたことに意義を感じている。

ベトナム侵略戦争の為に、ベトナムへ向つて原空母エンター

エンタープライズ阻止斗争の残したもの

―はじめて斗争に参加して―

富士 さおり

私にとつて、生まれて初めてのアンチウオーの実力行動の第一歩が、エンブラ寄港阻止斗争に始まつた。一・一五以来、デモに明け暮れた何日かを思い返したのは、今日だけではなかつたけれど、私自身の中で何かが激しく燃え、大きな物体が心の中にデンと居座つた感じなのである。

沢山の人から沢山のことを聞かされた。私がずつと顔をそむけて来た新聞の第一面、少くとも昨今は、ペンを握つて読むような状態までがみられるようになった。

何も知らなかつたし、考えたくても、その指針さえわからなかつた私にとつて、友達が、仲間が教えてくれたものは、私の一生を左右するのではないかとさえ思われた。しかし私自身何も知らな過ぎることを、自分が一番よく知つている。私は即座に、判断を求められ、深く考えることもせずに行動したのではなかつたかと深く反省している。けれど現地へは行けなかつたにしろ、私は私なりにやつたことに意義を感じている。

ベトナム侵略戦争の為に、ベトナムへ向つて原空母エンター

ブライズ号の日本寄港を許すことは、日本も米国の侵略戦争へ加担することであり、その裏には、日本人の「核アレルギー」を少しづつ解消してゆくことにより、日本に核基地を設け、東南アジア侵略戦争をし、資本主義経済の発展、そして帝国主義、軍国主義の再現がたくされている。

上に立つ資本家は、確かに軍備の為に金もうけが出来るとはいない。従つて政府の政策に協力するだろう。しかし、その犠牲者は私運市民、国民である。労働者である。本来なら労働者がやるべき実力斗争を、あんなに多くの犠牲を出しながら、学生達が闘つた。日本の方向を決定すべく佐藤政府が、侵略戦争に加担している以上、

私運は、佐藤政府を打倒しなければならぬし、政府の方針を、武力でおしとおすやり方には、徹底的な抗議をする為にも、ヘルメットや角材、石ころは必要だったのであつて、私運が身を護る為に必然的なものであつた。平和解決や、静かな抵抗では、これまでも政府の方針が、唯黙認されてきたに過ぎなかつたではないか。徹底的に抗議し、アンチウオーの為に闘うには、実力行動が必要であり、ヘルメット等は、やむを得なかつたと思う。

今度の佐世保での斗争が、市民を目覚めさせたことは確である。市民の生活を守り、保護するのが当然である。警察の暴力、政府の政策を押し通す為にはどんな手段を用いても、それに抗議する人間を葬らうとする官権の弾圧に、私運は、弾固として抵抗しなければならぬ。

包括された「革新政党」というブルジョワイデオロギーに毒された組織ともイデオロギー的に斗わねばならない。原子空母寄港は、日米の極東戦略体制の改変であると共に、ドルポンド危機の中で、日本独占の独自利害をかけた帝国主義軍隊の育成に核武装の方向である。

政府の宣伝相と化したマスコミ操作にマスコミ暴力がどれほど補給の目的と弁明しても、それにだまされる馬鹿ばかりでない。補給というならば、エンブラの如き何年間も運航出来る空母がホノルルから数日もたたぬうちに補給する必要などなかるう。食いのもの補給ならエンブラ海員五千人近い人間を補養する設備は、空母の中にあるはずだ。私が馬鹿になり下つて補給ということを感じたとする。乗員の補給に必要なのは、人間的欲求からいえば女しかない。政府通りに信じれば、日本の売春婦買いにエンブラ乗務員を寄港させたのだということしかない。

目的は明確だろう。五億ドルのドルの防衛を引きうけた日本政府は、五億ドルで、沖繩を買いうけ、それを利用して徹底的に大衆意識操作を行う。東南アジア侵略のためには帝国主義軍隊に核武装化の軍隊を作り、軍事外交路線を通じた極東の盟主とならんとする日本政府が、自国内で、権力にかみつく学生、反戦青年委を圧殺すること、それが権力側の要求だろう。

現代は、公的に武装された国家権力に警察、自衛隊、裁判所、官僚機構、マスコミのブルジョワ独裁国家である。それに反抗する行

学生、労働者、市民、一体の統一行動によつて私運は、ますます反戦運動を自分達の属する存在の場に於て広めなければならぬし、その為には、世界の歴史的背景、資本主義、共産主義あらゆる点から勉強してゆかなければならぬと思う。

権力の本質を明らかにせよ

— 無給医 —

全学連の行動に対し、公安委員会の中で「最近の学生の動きに注意せよ。中国革命の火付け役は、学生だつた」という話が真剣に語られたという。

第一次羽田斗争は、七〇年安保を象徴する火が切つておとされた。佐藤政府は、むきだしの権力を示し始めた。自主防衛（民族集合体という言葉で又、若者を戦場にかり出すつもりか）、大東亜圏構想をふりかざし、国際的資本の流動の前におろおろしながら、その矛盾のはけ口を権力にふれる学生運に向けようとしている。「資本主義は永遠のもの、もう戦争なんか、おこらないよ。マイホーム：：」などという夢想は、資本の動きの前には、その夢は消えようとしている。

帝国主義と闘うということは、政府権力と闘うのみでなく、その

動が暴力といわれるのなら、その暴力を不断に拡大せねばならない。今のブルジョワの祖先は封建領主に江戸幕府に明治維新という暴力を行使したではないか。くちばてた暴力は、新しい暴力で打ち倒されるがよい。

全学連の行動は、断固支持する。彼等が勇敢であつたということだけでない。日本の国民には勇敢な人間がいくらでもいる。ただ社共が圧殺しているにすぎない。「彼等の気持も分るが、あれでは戦術的に国民に共感を得られぬ」などという。進歩主義者は、お前は何だと問いたい。

国民などと、お化けみたいな象徴的なものを気にするほど自称進歩主義者は、何をしているのだと聞きたい。

現代は、個人がどうなのかということが問いつめられている。階級情勢の異常なテンポのスピードに、適応出来ぬだけではないのか。自称進歩主義者が、ああだ、こうだというのを聞くより、街頭カンパの時に、あるおばさんから「あんたらががんばつてよ。あんたらでしか、日本はようならんわ」という言葉ほど胸がすつとする。「がんばつてな」といいながら五百円ぽんとカンパしてくれた人がよほど人間味である。警官とぶつかつた人間を群集心理などという諸君には、階級的憎しみということを知らぬ人だろう。かの冷

静なドイツ学生は、昨年の学生デモの時は、ピストルで打ち殺されて死んでから、急速に拡大したSDSの最も急進的の学生ですら、「日本のあのような激突な衝突の時でもあれ程統制がとれた斗争は

我々にはとれない」とすらいっている。

世論を気にする前に、世論にふりまわされ、集団的多教安定の中
で人格を喪失した民主主義者には自己の意見を持ってほしい。僕
は、佐世保で斗つた全学連と反戦青年委員会の中に生きた人間をみ
た。僕は、肉体的欠陥が故に、残念ながら闘いには参加出来なかつ
た。だが、僕は、全学連のあの行動を支持する。反体制運動そのも
のを包括した帝国主義に対して闘うのは、革命的暴力しかない。

私達の運動

小林 一夫

私達が現在行っている運動は一般に反戦運動と言われている。そ
して多くの人々はこの運動を戦争に反対するものだと思つている。
しかし我々が行っているのは一連の戦争反対運動だけではないので
ある。というのは我々はただ、戦争がいまだから自分が戦争に行く
のが恐しいから、またいつなとき、ベトナムの火の粉が日本にも
ふりかかってくるか分からないからと言うような、エン戦主義的な
運動ではないと言うことである。

今、私がこの原稿を書いている時、あなたが静かに本を読んでい

る時、また買物をされている時、友達と会つている幸わせをひと
き、ベトナムにおいては、私よりあなたより年のいかない少年でさ
えもが、アメリカ帝国主義の侵略に対し、命を賭けて斗つているの
です。私達はただ毎日を何もやらす何も考えず、平々凡々として暮
らしていても良いのでしょうか。私達と、私と考えを共にする人達
とは一諸にエンタープライズの佐世保寄港に反対して動き、官憲と
よばれる政府の権力と真向からぶつかり、勝利への道を一歩進めま
した。それは佐世保市民の行動を見ても分かつてもらえらと思いま
す。

ではなぜ我々がエンブラの寄港に反対したかと言えば、放射能の
安全性の問題とか、日米安保条約にもとづく、事前協議（日米安保
条約自体も不当であるが）がどうこう言うのではなく、日帝の核武
装への道を切り開き、日帝の侵略帝国主義国としての体制をととの
えようとする、昨秋の佐藤訪ベトナムの一連の動きの重大性と危機
を感じたからであり、なんとしてもそれを阻止しようとしたのであ
る。

ベトナム戦争はよくジョンソンの戦争であると言われている。こ
の意味を朝日ジャーナルはこう表わしている。「ベトナム戦争」そ
れはまさに彼の戦争である。ウィリアム・ランドルフ・ハーストと、
シオドア・ルーズベルトの二人が力を合わせて、スペインとアメリ
カの戦争を作り上げて以来、このような大紛争が意識的に組織され
例はない。三八五人のアメリカ人が命を失つた米西戦争を作るのに

二万の力が必要であつたのに、ジョンソンはたつた一人で、すでに
一五・二六五人（六七・一二月現在）米兵の生命を奪う戦争を作り
上げ、アメリカを今や、史上最大の「悪の商人」に仕立て、六五年
七月一日ジョンソンは大統領の権力について、『大統領の権限は決
議がなくとも明白であり疑問の余地はない。私には三軍総司令官で
もある大統領として、行使しているすべての権限がある』つまり、
軍隊をどこでどのように使おうと、議会の承認は必要でないと述べ
ジョンソンはその長い経験から、選挙の時の支持者にむくいる最善
の方法は軍事支出の分け前にあずからせる事であることを十分に心得
ているため国を動かし、繁栄させ、彼の政治に満足させるための方
策として、最も多くの金が流れる戦争という手段を本能的に選んだ
のである。大統領ジョンソンにとつては、戦争は地位を守るため、
資本家を喜ばすための手段であり、それによつて、自分の安泰をは
かろうと言うのである。戦争によつて、多数の人命が失われ、大多
数の国民が戦争の重荷を負い、貧困と欠乏に苦しんでいても、死の
商人と言われる資本家どもは、もうかりさえすれば自分達の資本に
よつて作られた兵器で誰がどれほど殺されても問題ではないのであ
る。資本家は、兵器の生産によつて利益を得るだけでなく、戦後
インフレーションの過程でストックを利用し、あるいは銀行の信用
を利用して利潤をあげる。要するに、戦争に勝つても負けても彼等
は多くの利潤を手に入れる事が出来るのである。彼等資本家が社会
的、彼治的に有力であればあるほど、戦争の起る危険は大いにあり、

私達労働者は、資本家が利潤を得るための、犠牲にされているので
あり、軍隊や機動隊は戦争によつて資本家がより大きな利潤を得る
ための「番犬」なのである。我々は資本家の「飼い犬」になりたく
ないため抵抗するのである。しかし、我々の抵抗に直接弾圧を加え
る「番犬」の個々人を憎しみの目で見ず、それをあやつる飼い主と
それにあやつられる機動隊の暴力には、恐れず、立ち向かわねばな
らないことを認識し、私達労働者の中で、一部の人間の欲望から、
自分自身の生活及び権利を守つていかねばならない。これが我々の
任務と目的であり、その行動が我々が行なつている運動なのである。
だが、あなたの任務と目的は？

（全電通）

六八年 実力斗争 — 佐世保

津崎 康子

今回の佐世保斗争に参加して、私はそこで行なつた特徴的なこと
— 官憲の横暴、全学連の果敢な行動・民衆の正に慮切り、労働者に
よる現在の反戦運動の限界 — を直接眼にし、体験することができた。
全学連の実に果敢な実力斗争は、私のなかにあつた日和見労働者
は、彼治的に有力であればあるほど、戦争の起る危険は大いにあり、

今回の佐世保斗争に参加して、私はそこで行なつた特徴的なこと
— 官憲の横暴、全学連の果敢な行動・民衆の正に慮切り、労働者に
よる現在の反戦運動の限界 — を直接眼にし、体験することができた。
全学連の実に果敢な実力斗争は、私のなかにあつた日和見労働者
は、彼治的に有力であればあるほど、戦争の起る危険は大いにあり、

つきつけることになった。そしていまや、強力な警察力を背景にし、着々と七〇年安保改訂においてスケジュールをこなしている。政府と鋭く対決することなしに、反戦運動は有り得ないという認識を持つことができた。このことは帰阪後、砂川・羽田斗争に引きつづき今回の佐世保斗争でも斗われた現地実力斗争が一挙に惹き起した流動的な動きからもしることができたことであつた。私にとつて今回の佐世保斗争は、実力斗争といわれるものが、今日、一体どんな必然さと可能性を持つているのか、について考えるキツカケを作つた。わかつたような顔をして（一部？）全学連に賛同しているだけではどうにもならない、そんな低迷した運動の状態が実力斗争を通じてこそ、認識してゆける。そんな確信を私は佐世保で、持つたように思う。

そして実力斗争という、きつとそんなに真新しくはないやり方が、それ程までに突出して現象し、少なくとも佐世保の市民の圧倒的多数をつき動していつた、このことは今日での実力斗争というものの持つている必然さと可能性を、あの佐世保の地で私に感じさせた。現在の日本では、一部学生の暴力（？）こそが朝鮮戦争の折りにも無気味に沈黙していた佐世保の人達に人間的な価値について再び想起させた、この奇妙な現象のその現われを、もつと日本の政治状況全体（保守も革新も含めて）の持つ根本的を問題や体質にかかわらせて認識してゆく必要を私個人としては感じた。ある民青は私にこう云つた。『今回の佐世保市民の変化は、やはり国民的運動の拡がりの故だ。』国民とか大衆とか呼ばれる不特定多数に、べつ

たりと無反省にもたれかかつた。こんなわかつたようなことをおつしやつたが、こつちの従来までの全日本の戦争、被爆体験にもたれかかつた変な革新保守主義を打ち破つて、新しい質の運動をつくつてゆく、そんな可能性を、実力斗争が持つているように思うのだが（全電通）

佐世保からの疑問

独 孤 人

佐世保で起つた、学生と警官隊の衝突、市民意識、右翼などの模様については今まで、新聞、テレビ、ラジオなどで報道されているので述べないことにする。ここで私たちは民主主義について考えなければいけない。民主主義とは何か、学生にどのような行動をとらせる日本の民主主義とは何なのか、デモ、マスコミにおいて政府の統制が行なわれていることは言うまでもないことである。表現の自由と言ふ基本的人権が犯されつつある。いや基本的人権そのものが犯されつつある。社会の秩序、公共の福祉と基本的人権との矛盾を利用して基本的人権を圧迫し権力を増大する、これが政府の政策である。この政策によつて我々と国家との断絶を深めつつある。いくら我々が反対しようが公共の福祉、社会の秩序などという名目によつて押

えられている現状、この現状は権力と基本的人権の反比例の関係によつて生じたものである。故に全学連と機動隊との衝突は表現の自由と社会の秩序との衝突である。そして社会の秩序が勝つたのである。即ち権力が勝つたのである。これはいかに「社会の秩序」という名目が表現の自由を押えているかを物語つている。この衝突は何を意味するのか、この背景には国家との断絶を考えなければいけない。自衛隊が違憲であることが常識になつているのに最高裁は違憲判決を避けている事実、獄中から立候補しても当選する現状、また国民の大部分が戦争反対なのにベトナム戦争に加担する政府、国民の意志とは関係なしに動いている国家、この断絶は民主主義への攻撃の結果であろう。この断絶は民主主義の敵である。この断絶を埋めるには表現の自由しかない。しかしこの基本的人権さえ圧迫されているのである。この形骸化された民主主義国家は我々をどこへ連れていこうとするのか。またこの断絶をなくさないかぎり全学連と機動隊の衝突は避けることが出来ない現象であろう。

佐世保斗争の教訓は何か

村 椿 哲 也

七〇年安保斗争を組織するにあつて、その独自の意義と目的意識を、政壇うんぬんの諸問題の中へ包含せんとする一部の群に、我々は常に警戒しなければならぬ。すでに日常的な労働運動が、ブルジョア法律の枠内で泳がされ資本本の良きパートナーになり下がつた現在の労働組合が、七〇年斗争にそのまま有効的に機能することは想起し難い。佐世保斗争における情況は「市民」を一定の政治的意識に引き出す機能を果たした。しかし一方、労働組合の抗議ストが打たれた情報に遂に得られなかつた。佐世保における全学連の学生が孤立させなかつた一定の評価は我々が、その評価におぼれ問題意識を本末転倒してはならない。労働者でなく、労働組合が立ちあがれなかつた状況を適確に見て取つた支配階級はなお「高姿勢」を維持し得てゐる。

国家権力の「衣の下」のヨロイを人民の前に暴露した三派学生と「労働者」の功績は大きい。圧倒的多数の労働者を屈辱的反デモへと導いた日共は、ますます利己と無策の中へ埋没した。

しかしながら我々は国家権力の狂暴な姿を「新たに感じた」といふことは、佐世保での我々の獲得物と無縁である。想起すれば、も

しゼネストを打てば職場での官憲による強制労働、デモへの発砲などは歴史的な常識である。

では佐世保斗争の真の意義と教訓は何か。それを斗争の能動性に求めたい。佐世保市民及び圧倒的多数の大衆の「知」から「動」へのの変革である。能動的な斗争：知識的な評論家から、社会法則（法律ではない）を現実的状况に結合させ、能動的に変革する土台：これを導いたところに三派学生の真の成果がある。今後の斗争を組織する過程で多くの佐世保斗争の教訓を応用して行きたい。以上、多くの中から一つの成果を書いてみた。

一・二五 神戸斗争

全電通 馬場 正

大共の間を
俺と 仲間達は
声たからかに
インターナショナルを歌い上げ
足を大地に踏みしめ
つき進んだ
狂人的集団は

恐れ おのき 寄り集り
冷たい 血を凍りつかす

見る あの緑の反戦旗を
風をはらみ へんぽんとひるがえり
我々と共に 進む あの旗を
日帝のかいらいよ
けり上げ なぐり倒しても
息を吹きかえす
この力を恐れよ
米帝国主義神戸侵略主張所よ
民族の声を聞け
肌の怒りを感じろ
お前達が地に伏す時は近い

反戦旗は血にまみれ
俺の手に手銃がからむ
だが 心に鎖はつなげぬ
俺の炎は繩を焼き 弾圧の鉄鎖をとかす
仲間意志は独房のコンクリートを打抜いて

俺達をつらぬき通る
俺達は一人じゃない
大共よ 一人が二人に
二人が四人に

ふえる事を忘れたか
七〇時間閉じこめて
一四〇時間走つた事を知れ

仲間よ 友よ 同志よ//
羽田を越え 佐世保を越えるのは俺達だ
今ひとたび目覚めよ
世界は黒い手でおおわれている
黒い手をはねかえすのは君達だ 俺達だ

潮の風いが香る
俺達のデモは力強かつた
官憲の弾圧にも
スクラムはくずれない

三〇〇対一五〇〇 圧倒的な数字だ
デモ対官憲 否狂人的集団だ

国を売り 我々の血を吸いつづけるやから
どうしてそんな奴を俺達が許そう
生血の獄にめらめらと
俺の炎がもえうつることを熱望する
額に汗する人々よ 学ぶ人々よ
次のデモでスクラムをくむのは君達だ
神戸で斗つた仲間よ
又 スクラムを組もうや

君よ
俺達とスクラムをくもう
君と俺とで
力つばい斗おう
佐世保を越え 神戸を越えるために

神戸・大阪 弾圧リポート

教育労働者 じえい けい

〔I〕 神戸・一・一五

「検挙」「写真」「検挙」「写真」・一月一五、神戸領事館前にすわり込みを敢行した反戦青年委員会三〇〇名を以て、官憲は、何の警告をも与えず、数秒の時間の猶予も与えず、デモ隊を襲い、先頭から検挙した。ある者は、頭を刺られ、ある者は、拳銃を向けられ、数分の間に私を含め一〇名の青年労働者がまたく間に逮捕された。私たちは全く予想されなかつた高圧的の官憲、国家権力の暴力組織、機動隊の弾圧に全く抵抗もできず逮捕された。

私が、東京飯田橋において、三派全学連の諸君一三一名が、凶器準備集合罪を適用され、予防検束されたことの意味をさつたのは、神戸水上署に連行されたときであつた。官憲は国家公安委員会の「佐世保派遣を全力をあげて阻止せよ」という指令をうけて、全面的な大量検挙方針で臨んだのだ。兵庫県警もその方針をうけて、大量検挙すべく待ちかまえていたのだ。水上署では、大量検挙者を能率的に取調べるべく大講堂をそのために用意し、係官は、検挙された私たちを今か、今かと待ちかまえていたのだ。すでにこの不当逮捕による青年労働者の大量検挙に対する組織的な総括はなされてい

ると思うが、やはり、私たちの側に情勢に対する分析に甘さがあつたことは素直に認める必要がある。

ここで、若干の中間総括をしておく必要がある。まず、国家権力は(1)全学連を徹底的に孤立させる。(2)反戦青年委員会を壊滅させる(3)そのためには、全学連反戦青年委員会に強力な弾圧を加えて、労働者を洞かつする、という方針で臨んだということである。私はここに国家権力の意図を見る。国家権力は、第一次、第二次羽田斗争を通じて、完全なマスコミをその支配下におさめ「第三の羽田」(いかなる国家権力の弾圧にもひるむことなく、おびたらしい血を流しても日和ることなく闘う方針)をめざす全学連諸君に対しては決して許されない予防検束に踏み切つたのだ。神戸領事館斗争における私たち青年労働者に対する大量検挙もその一環だつたのだ。すでに、ここにおいて警察権力は決して人民を守る部隊ではなく、支配者を守るためのものであることを示しているのである。一七日から二三日に至る現地佐世保においては、このことを如実に示している。

一五日の神戸斗争において、堺反戦六名をはじめとして一〇名のメンバーが検挙されたことによつて、その救援のため、各地区反戦会は、全勢力を傾注することを余儀なくさせた。この全勢力をつぎとんだ救援体制は、検挙され、留置されていた私たちには、非常にありがたかつた。大量検挙ということに逆にある程度孤立感からまぬ

がれていたものの、大半のものは初めての経験であり、消すことのできない不安をどうすることもできなかつた。差入れや弁護士との接見は、力強いはげましと安堵を私たちに与えてくれた。しかし、あえて私は今回の救援体制に問題があつたことを指摘しておきたい。まず第一に今回の大量検挙が全く予想されておらず、そのために各地区より結集した反戦青年委員会のメンバーに対して万一の場合の検挙に対する諸注意が全くなされていなかつたことである。そのため、ほとんどのものは身分証明書や手帳(斗争スケジュール、電話など記入)をもつており、供述も組織防衛という原則が守りきら

れたと言ひ難い。さらに救援体制に全力を注ぐことによつて、次の斗争、一・一八大阪府民集會には、反戦独自の部隊も組みえなかつたことである。(たとえ、佐世保へ大量派遣していたことを考慮しても)原則は、斗争を優先させることだ。この原則を、一・一五神戸領事館斗争の貴重な体験を踏まえてもう一度確認しておく必要があるだろう。

七十二時間の留置後、釈放されたその足で一・一八府民集會に参加した私は、前述の厳しい総括を心のうちにすることによつて、一人の労働者として、肚の底からの反戦力の怒りをこめて、飛躍したことを確認する。

〔II〕 大阪 一・一九

大阪駅前における「エンタープライズ寄港行動」は、最初から、鉄道公安機動隊の實力排除の弾圧をうけた。国家権力は、人民の政

治行動の自由を数多くの弾圧立法によつて締めつけ、制限を加えてきた。大阪駅前広場は人民広場である。いかなる立法、条令によつても広場の集會を制限することは不当だ。国家権力に対して屈出集會をすることは、権力に対する屈服にほかならない。この点において、一・一九無屈抗議行動は、私を含め四人の不当検挙者を出したが、その基点より、反体制行動として成立しており、内部的にもこの評価を意識化していく必要がある。

最後に、個人の不当検挙について若干報告しておきたい。反戦のメンバー五〇名が大阪駅前広場において抗議行動に起つた、抗議アピールを市民にしようとした仲間を不当に検挙した。私たちの抗議を官憲は實力で排除しようとし、激しく抗議する私に対しても全く理由を明らかにせず、公安機動隊は、極めて高圧的に「おまえもか」と憎く憎くしげに洞喝し、検挙しようとしてきた。私は、その際公安機動隊の検挙を振りきつて逃げようとして、一通行人に衝突し、その人が嘸しんとうを起としたため、過失傷害罪に問われるという苦境にただされたのである。しかしながら、かかる事故が発生したことに對する責任は、すべて不当に検挙しようとした鉄道公安機動隊にあるのであつて私には何の責任もない。もちろん、被害者に対しては十分を補償をするつもりだが、この不当な弾圧に對する抗議はさらに一層強力な反戦斗争でもつて権力にぶつかつていくこととて追究してするつもりである。

原空母エンタープライズ寄港

阻止・佐世保現地斗争に参加して

堺反戦青年委員会 城戸 十三吉

私選、青年労働者で組織している、反戦青年委員会は、昨年の羽田斗争に続き、佐世保斗争にも参加した。私の属している堺反戦は一月十五日、神戸のアメリカ領事館への抗議デモにおいて、六人が不当逮捕された。佐世保には当反戦から五人参加する予定であつたがこの為に、三人が行く事に決定、逮捕された人、残留している人の分まで、私選は斗わねばならない。私は若い血を燃え上らせてさつそうと佐世保にのりこんだ。

我々全大阪反戦の一隊は一七日昼佐世保に着いた。降りるや否や報道陣のカメラのフラッシュが光る。一瞬目が引きしまる。駅前集合会でもう一度意志統一する。そして闘争本部へと行く。途中佐世保橋を通る時、機動隊とその嚴重な警備態勢を見て佐世保へ来たなという感じがした。この日、朝、全学連が平瀬橋で機動隊と第一回

目の衝突をし、多数の学生市民、その他の人が負傷したのだ。午後六時、エンタープライズ寄港阻止全国青年統一佐世保集会に参加、松浦公園に、佐世保反戦、長崎反戦、佐世保青婦労、東京大阪反戦、自治労、革マルと約一〇〇〇名が結集した。デモコース

として、佐世保橋で、我々反戦青年委員会と全学連三派の諸君と共に機動隊と斗つたのである。指揮者をつきあげ、私選は口だけでなく実際に全学連と共に斗つたのである。他のデモ隊は、橋の手前を通り、駅前で解散しようだ。四、五万人の人がそのまま佐世保橋に行つていたらば……それを考えると残念で仕方がない。しかし市民の人が間接的ではあるが我々に積極的に協力してくれた。これが二一日からは、直接市民の人が機動隊に抗議するというようになってきたのだ。

エンタープライズが遂にやつてきた。我々は七時半頃平瀬ロータリーで座り込み「エンブラ帰れ」「ゴーパーホーム・ヤンキー」のシュプレヒコールをやり氣勢をあげる。昼からは佐世保市役所の市長前で座り込みを行ない、外人バー街へ抗議に行く。夕方帰途につく。そして最後に私は声を大にして次の事をいいたい。

『学生の突出した斗いに官憲の弾圧は集中的にあびせられ、破防法さえ動員させる事態に、我々労働者として市民は、彼らを孤立させる様なことを絶対にしてはならない。全学連の学生はあくまで、労働者本隊が立ち上ることを確信して、自らを最も困難な前衛に位置づけたのだ。そしてその先陣をかける。反戦青年委員会を中心とする斗いは労働者本隊の爆発の可能性をひきだす任務をおつている。すでに全学連によつて切り開かれた足場を一層強固に支え学生を敵視する日本共産党の党利党略の分裂策動を排撃せねばならない。反戦斗争の立ち遅れを単身挽回して事態に追いついている学生に背中

は、当公園から佐世保橋を経て平瀬ロータリー（ここを通らなければ米兵は基地または町へ出ることができない）平瀬橋を通り駅前で解散するという予定だ。シーパン姿にヘルメットをかぶり最低限度の護身をする。この日のデモは両側に機動隊がつく。いわゆるサンドイツデモで、たいした衝突はなかつた。平瀬橋を通る時、目がすごく痛み、涙がポロポロと出てくる。朝の衝突の激しさを思いかべながら駅前へ。ここで一つの事件が起きた。集会をやつてい

労働者はヘルメットをかぶつた

久保 宏 治

一八日、明日エンブラが佐世保に来るといふ通知が来た日、社共統一五万人大会が行われた。会場である市民球場に入る時、門に民青の学生が角棒のついたプラカードで我々または三派全学連の入場を拒否しようとしていた。しかし嚴重な抗議の結果、民青の学生はデッタイ。大阪、東京反戦は全学連が集会に参加できる様に、その門で待機することになった。そして、無事に全学連を集会に参加させたのである。集会後デモにうつつた。今斗争の最も重要な意義から刀をふるつて切り殺す様な行為を絶対に許してはならない。今こそ全学連をつつんで今後の斗いを我々反戦青年委員会の手で強化し、七〇年安保を粉碎しよう。』

指導部を乗り越えて全学連と連帯した

「ワッショイ」「ワッショイ」「ワッショイ」「ワッショイ」橋に通じる道へはあと少しだ。機動隊が見える。「ワッショイ」「ワッショイ」その道に出ようとなおも押していく。皆必死だ。全国反戦の某が手を広げ「押すな// 押すな//」とわめいている。前に出るのを妨げている。又某が「先がつかまつているからバックして下

さい」といふ。「なにがさがつてくれだ、日和るな。」「我々は斗かう労働者だぞ//」「全学連を見殺しにする気か」「お前も列に入つて斗かえ」。正面に防石ネット、盾をもつた新たな機動隊が出て来る。「車がバックするからさがて、さがつて」と又例の奴。「全学連を見殺しにするな。」「先頭は日和を」「ワッショイ、ワッショイ」必死になつて押す。もう真剣そのものだ。「押すな、押すな」と某。「これ以上のことは責任を持ってな」とヒステリック

クにわめいた。瞬時の沈黙のあと、「何が責任だ。バカヤロー」
「そんな責任はいらん」「押し、押し」ドトウの様に道路上に出
グ。もう指揮者の言葉になんか耳を傾けなさい。直前の機動隊が
身がまえる。「ワッショイ」「ワッショイ」佐世保橋は催涙弾でモ
ウモウとしている。旗、ヘルメット、学生が見える。沢山の市民も
見ている。「先頭日和な」「突こめー」と列内をひきさく様を
皆無中だ。が機動隊の直前でまわる。「ワアー」ジュラルミンの
盾が押し寄せて来る。「ポリ公帰れ」「犬かえれ」暴動とする。「学生
は斗かつてるんだぞ」。「日和な、押し押し」ぐんぐんと回つて又、
機動隊に向う。「先頭、こんどは日和な」「ワッショイ」「ワッシ
ョイ」「腰落せ、落すんだ」。機動隊員の顔がぐうーんと近づくと
先頭がこんどは回り切れなくて、斜めにあたる。「それ押し」「そ
れ押し」「それ押し」前に進まない。「押し」「押し」「ひるむ
を」押し返される。「ワッショイ」「ワッショイ」結局追いかえさ
れる。「スクラム組め、スクラム」「よし!!」乱れた隊列をたて直
してまたぶつかると。「それ」「ワッショイ」「まけるな」ものす
ごい力だ。体が四方から圧迫される。「ヨイショ」「ヨイショ」あ
らん限りの力を出す。押しかけたが今度は押し戻されて、どつと
歩道に沿つて移動する。「それ押し、それ押し」ここぞとばかり力
を入れる。機動隊のカベの竿に我々の突出部ができる。「ワッショ
イ」「ワッショイ」「ガンバレ」機動隊の壁をぬけ出せ。「ワアー」
頭を押しつて前へ出る。と言ひ喚声。機動隊背後にして、目前の佐世保橋―全学連との合流

ろ」押し押し。とうとう橋の中ほどまで進出する。機動隊が目前に
せまる。防石網、ヘルメット、無数のロボットの様な人間集団。反
戦の左側に全学連の部隊がついた。全学連、反戦で橋いつばいだ。
「全学連ガンバレ」の声。公安がマイクで退去する様命令している。
全学連がケチラされたあと機動隊の暴行をフンサイするため、反戦
がねる。ケチラされたら駅に集合ということが確認されて、強固に
スクラムを組む。皆緊張している。全学連がゆつくりと機動隊の壁
に突つこむ。すぐ押しもどされる。反戦が出る。「ワッショイ」
「ワッショイ」「先頭は日和な」機動隊の盾と反戦の先頭が接近す
る。先頭が回つた。機動隊はグイグイ押ししてくる機動隊のタテがデ
モの横に並ぶ。側面に廻られたわけだ。
ぐつと押される。バカッ、バカッと音がする。乱斗服の体がデモの
中に入る。いかん、くづれた。警棒を打ち下す音がする。機動隊は
まだ追いかけてくる。逃げる、無我無中だ。この衝突で、東京反戦
のメンバー一人が、ヘルメットをかぶつていたので、後頭部を割
られ入院を要する程の負傷を負わされた。散々にたつたメンバーが
集まって、また機動隊に突込むべくスクラムを組んだ時、機動隊は
再度の攻撃をしてきた。立ち直り暇もなく、また逃げた。

(堺反戦バンブ「労働者はヘルメットをかぶつた」より抜萃)

機動突破へとシグザグで向う。「全学連と共に闘うぞ」「機動隊の
暴力粉砕」皆、嬉しとしている。催涙ガスで目がいたい。でも前進
するんだ。六〇年の安保では学生が機動隊によりなぐりふせられて
いる目前で共産党のビケによりデモ隊は斗争現場から遠ざけられ、
学生と合流することなく流れ解散させられ、そして昨年の砂川一〇
・八、一一・一二斗争においても機動隊と学生が衝突している現場
を目前にして、労働者のデモ隊は指導部の日和見、あるいはドウカ
ッ、あるいは警備とのボス交等を打ちやぶつて全学連と連帯し、機
動隊と対峙すると誓ったことができなかったのだ。それが今労働者
の一部分―反戦―とはいえ、指導部の日和見、ドウカッを乗り越え
機動隊のカベを突破して全学連と共に斗かおうとしているのだ。橋
のタモトに先頭がつく。防石ネット・ジュラルミン・機動隊・警備
軍、橋をはさんで、反戦のデモ隊、追い散らされた全学連がもどつ
てくる。全学連とともに斗かうぞ」力強くシユブレヒコール。反戦
の横に福岡の隊列がつく。先頭は橋のタモトで停止したままだ。ホ
ウ酸水でひたした綿で目の痛みをおさへ、前へつめる。反戦のあと
に続いてきた総評の宣伝カーの上から「皆さん・カンパローを歌い
ましょう」の声も圧倒的なヤジで消される。「ナンセンス」「歌を
ウタウことが今必要ではない、橋を突破することだ」「そうだ」。
「前へ進め」「市民に機動隊の異力を訴える」等。停止している先
頭を押しつて前へ出る。「全学連と連帯しろ」。「スクラムを固め

真の反戦運動の意義

千葉義広

現在、世界中の多くの地域に、平和楽観ムードが、ただよつてい
る。しかし一方ベトナムに目を向ければ、凶悪なアメリカ帝国とい
う盗賊が、その豊かな資源を略奪せんと大量殺人を行っている。そ
してその大量殺人の大半を、日本の資本家達が協力加担し、すぎあ
らばアメリカに代つて侵略にのりだそうとしている。そのため日本
政府は、我々労働者に対して、国を守るといふ理由で、国防軍事
(戦争)教育をやろうとし、学校においては教科書を改悪したり、
マスコミを総動員して、やつきになつていいる。また経済的にも、軍
事予算をふやすためにあらゆる攻撃を我々労働者にかけてきている。
例えば、諸物価の値上げ、合理化による労働密着の強化。しかし、
我々もバカのようにそれをだまつて見すごしてはいけなない。な
ぜなら政府資本家達の戦争参加を認める事は、我々労働者が真先に
戦争に駆り立てられ、盗賊の手下にされてしまう事ではないだろう
か。それを防ぐには、単に命をお続けられているベトナム戦争を
終結させるだけではなく、その戦争になるべき資本主義体制(ブル
ジョア体制)を打倒しなければならぬ。それでは一体、我々はそ
のためどういつた行動をとればいだろうか。ベトナムに救援物資

を送ればそれでいいのだろうか、それもいいだろう。しかし我々がそんな事だけでもベトナムの人民は決して喜ばないと思う。なぜなら、ベトナムの人民を苦しめている軍需物資が日本で生産され、ベトナム人民を死に至らす飛行機は日本の基地から飛び立っているのだ。それらのものを放つておいて何の役に立とう。我々のやるべき行動は、決して救援で終つてはならない。反戦の運動の波を起し大きくし、日本の中の基地を撤廃し、戦争の加担をしている政府を倒し、戦争の原因になる社会を改革しなければならぬ。反戦運動とは戦争がいやだから今おこつている戦争をやめさせればそれでいいと言ふものでは決してないと思う。真の反戦運動とは戦争の原因になる社会、戦争がおこる社会体制を作り変えるような運動ではないだろうか。今度のエンタープライズ寄港阻止の大きな盛り上がりは七〇年安保斗争を前にして真の反戦運動の存在を示したと思う。

(全電通)

小川 勝

ベトナム戦争について、米帝国主義者の侵略行為を、過去における状況から現在に至る迄のエスカレーションを考えると、私は一分先一時間先の戦火が不安でならない。アメリカのあのむごい侵略行為に対して、我が日本も直接的にも間接的にも深く加担している政策上の問題を大多数の国民が周知している事とおもう。いかなる方向

にせよ大きな目的を完遂する為には、いろいろの過程をふむ事だろう。常軌的に平和を願望する私達にとつて、今日、日本国内の政治情勢はあまりにも激しい矛盾が多すぎるではないか、絶対入港させられないエンタープライズすら入港を認める結果となつてしまつた。今更私が声を大にしてさげんでみても、初まらない事かもしれないが、八年前の安保批准をスタートし今日に至る政治方向は、我々国民感情を無視し過ぎていとおもう。ベトナム戦争におけるアメリカの侵略はなお一層エスカレーションされると共に佐藤内閣の政策も、かくす事の出来ない……というより国民をだます事の出来ないと言つた方が妥当かもしれない程ベトナム戦争加担の色を表面に出して来た。昨年からの反戦斗争は多数有つたが、第一次羽田斗争から焦点を絞つて考えてみよう、第一第二次羽田にうつるに連れて官憲の不当な弾圧は気狂いじみた無茶苦茶な暴力へとエスカレートされつつある傾向とおもわれる。遅い早いの問題では無いかもしれないが、全国民が政治に対し前向きに疑問を持ち、勇気ある自主的な行動を示さなければならぬ切迫つまつた、国際情勢ではなからうか？ 私は今回エンタープライズ寄港阻止斗争に参加をした一人である。現地に到着した時、佐世保の町は何か強い殺気めいたものを感じた。又次々と入つてくる情報私を不安な気持へと追いやつた。同時に私の脳裏には、昭和十六年頃の大日本帝国憲法の一節が思い浮かんでならなかつた。いかなる時代の歴史を省りみても、国家権力支配者階級には合法的にかつ一方的な暴力が許されている。

我々がそのあらゆる形で生じてくる官憲の不当弾圧暴力に打勝つにはいかに対処すべきだろうかと思ふ。それには一人一人の勇気ある行動と強い連帯感を身に付けてこそ可能となるだろう。現地佐世保での斗争体系を反省するならば全体の組織(社・共)を批判する前に私個人を深く考えてみる必要がある。具体的にいうならば、デモ行進時はさておいて、直前にせまつてきたあの不当な官憲の弾圧を受けようとしていた時点における私の心中を云うのである。しかしそういう精神上以外の行動では、リーダーの指揮のもとに行動を持つていた。ただその行動に入る以前には自分を中心とする考えを頭中においていた。もつと素直に記すなれば私は怖ろしかつたという他はない。もし最悪の場合検挙されればと考えていたからです。身分保障問題、戦場内での同僚に対する迷惑等必要以上におもえてならなかつた。しかしある段階では自然とその反省すべきものは消えていた。全学連と共に我々反戦青年委員会も何物にも負けず強い連帯性を持つて頑張つたとおもう。若干の打撲を受けた人もいるだろう。重体の人もいるだろう。「平和」。文字で記せばつたの二字、これからいろいろな斗争があるだろうが、我々が目的とする平和国家に、佐世保での数日間の出来事を、決して無駄にする事なく、目的にたどりつく迄の日々をたゆまない努力、試練、忍耐とを自から持ち、互に頑張りをたすけ合つて、これからの斗争のかたとしたい。又佐世保市民の反響を決して一時だけのものとせぬよう我々一人一人が再確認しようではないか。そして我々の反戦思想を全国

民に周知していただけるよう願望する。私でも出来るのだ！ 権力には屈しないぞ！ 平和国家をえがきつつ。(全電通)

我々の斗争

丸 楠 令 二

嵐の最前線に立ち向つた反戦、野獸的暴力団の機動隊、血みどろになつてゲバルトで斗つた三派、誰にも相手にされずに失恋の連続の民青全学連、佐世保市民に導火線に火をつけたのは誰か。学生が労働者が佐世保に何万、何十万、何百万集ろうと、それだけでは団結も連帯も勝利もない。全ての諸斗争に絶えず戦斗的に斗つてきた三派系全学連、全国反戦に結集している青年によつて一九六八年の開幕を自らの手で打破つたのである。今やアメリカ帝国主義は狂暴なベトナム侵略をつづけている。日本独占資本は、佐藤のベトナム訪問、米国防問をはじめ露骨にベトナム侵略に荷担する政策を押し進めている。

一月十九日佐世保に原空母が寄港した。ベトナム人民虐殺の最大の武器であるエンタープライズが佐世保に寄港するのを、政府は昨年十一月二日に承認したのである。もし日米安保条約がなかつたら、沖繩も砂川も三里塚も日本の中には米軍基地はないはずである。

原空母も佐世保へ入らなかつたのである。だが残念だけど、日米安保条約は昨年国葬で問題になつた吉田茂が首相のときサンフランシスコで日米講和条約とともに結んだもので、この条約を岸首相が一層強化するために日本から改めて申しこんだかたちで結んだのが六〇年安保条約改定なのだ。まつたく岸はバカな事を企らんだ奴だ。六十年六月十九日に我々の手の届かぬところで調印されて八年がたつた。現在、それによつて今日の日本が形成されつつある中でベトナム戦争が生れた。ベトナム侵略で皆殺し(ジェノサイド)を目的としていたアメリカ帝国主義が使用している武器、ミントープライマ(浮ぶ基地、動く基地)を初めとし、ナバーム弾、ボール爆弾などで今も殺し続けている。広島、長崎以上に使い果たし、ドル危機だと言っているアメリカ、それに対し佐藤は十一月十二日訪米してジョンソンと会談したのである。佐藤訪米を前にして、しきりにマスコミを通じ「沖繩返還」の宣伝をした。あたかも会談することによつて沖繩が返還されるかのごとき印象を人民に与えた。その中で日米共同声明は沖繩でなくベトナム侵略支持を合唱し、沖繩をもとの地獄に押しやつたのである。政府は「日米安全保障条約があるかぎり、それはできません」と一点張り。私は羽田をふまえて佐世保にいつた。

だが私にとつて安保放棄はあまりにも遠い道であると思つた。自民党とそれを支持する支配階級にしてみれば、どうしても七〇年安保を守りぬくと考えあふれ、手筋を使い我々にえげつない圧力をか

と血の雨の斗争をやつたのである。流血だ。流血の伴わない革命などあつたためしが無い。それなのに人々は流血を強れている。作年の流血の砂川、流血の羽田、流血の佐世保、暴力によつて血が大量に流れる。だがナバーム弾、ボール爆弾等を送つている資本家は暴力でないのか、ベトナムに送りアメリカ兵に斗わせることはまちがいでないのか。中国革命、ここでも人々は土地を欲した。中国人はイギリス人を放り出した。アルジェリアでも革命が起つた。アルジェリア人は革命家であつた。彼らも土地を要求した。フランスはアルジェリアをフランスに統合したいと提案したのだが、それに対してアルジェリア人は「フランスではない。この土地だ」と言つた。こうして彼らは血みどろの戦斗に従事したのだ。革命は土地に基礎づけられる。土地こそがあらゆる独立の自由と正義と平等の基礎である。キューバ革命、あれこそ本場の革命だ。彼らは体制をくつがえした。革命は妥協を知らず、途上のすべてをくつがえし、破壊する。すばらしい。「流血の中で死んだ権美智子」「山崎博昭」

きみはベトナムの血と同じで、新しい社会に向つている血だ。日本山妙法寺の藤井上人「流さねばならない血は流さねばなりません。失わなければならぬ生命は失わなければなりません」次の流血は沖繩であり七〇年に向けて、徹底的に斗わなければいけません。機動隊のエスカレーションした武装にくつせずつ断固たる青年は血をかくごして斗おうではありませんか。我々は全国民に向けて導火線の火をつける事という大きな仕事を持つてゐる。その時は血なまぐ

けるであろう。私は大声でいいえ我々は選挙に勝つのではない。政府を暴力で倒すのだノゲバルトで、反戦と三派とでは安保条約を破棄できないのは目にみえてゐる。革新政党と言われている共産党諸君、きみらは横目で我々をそうしたら新幹線で通過しますよ。前衛と云つてゐる共産党諸君、貴方は本当に国民の信頼出来る様子を發揮しているのか、社会党諸君、きみらも同じだ。君達は大衆を指導しているのか、大衆を組織しているのか、前衛政党としての役割を果しているのか、そりではないだろう。選挙の時にだけあわてて票をかせぐだけのことしかしやべらず、あつちや、こつちや走つて

いるのではないか、沖繩、七〇年、革命、もう少し日本の将来の事も心配したらどうだろう。無能力の共産党諸君、武装の論理と頭の武装を三派とか反戦に頭を下げて教えてもらえ。我々は革命の歴史的法則や動機、その目的と結果、そして革命のために用いられる方法を学ぶ時がきているのではないか。アメリカ革命、独立はいかにしてもたらされたか。流血によつた。革命は独立の基盤である。土地に根柢をもつこと、そしてそれを達成しうる唯一の方法は流血である。フランス革命、それは何に根柢を置いたか。土地のないものが、地主に反抗したのだ。彼等はどつちやつて土地を手に入れたか。流血だ。革命は妥協知らず。交渉も話し合いもない。ロシア革命、それはどこに基礎を置いたか。やはり土地だ。日本の中にもベトナム侵略に向けての米軍基地が沖繩をはじめ、佐世保、砂川、三里塚等々とあるが、その基地に対して、我々はその基地は我々のものだ

さい日本になるだろう。血の雨で自分の考えを固めよう。民青諸君に一言だけいいたい。私は君らの問題を解きたいと思わない。問題の助けは出きるが、君らに解決してやる事が出来ない。民青を助ける最良の方法は民青しかない。国民は反戦、三派に何を望んでいるかを佐世保で知つた。我々のすばらしい刀強いジグザグデモで市民は自分達が手に入れてしかるべきものは、何であつたのかわり初めていた。我々はその市民に手に入れるべきものを今すぐにも現実化する為に、必要ならあらゆる手段をもつて我々の意志をつらぬく用意も必要とされているのではないか。我々の斗いは根をもちはじめている。我々が新しい運動に入つていくには新しい仲間が必要だ。我々は機動隊の犬にかみつかれば我々はかみつく権利がある。

一・一五に参加して

佐世保をみる

坂本安得

一月七日に続き、一月十五日私達は、米軍原子力航空母艦エンタープライズ号佐世保武港阻止運動の、現地の斗いを、より盛りあげ、より効果的に展開しようと、午後神戸市役所前に結集した。(これらの斗いは、全国各地で行なわれたのである。)みぞれまじりに雪

が横から叩き付ける天候の中で、三時過ぎに佐世保現地派遣の学生約二百余名と合流し、斗いの決意を表明して米領事館へ向けてデモ行進に移った。警備側は三府県より、私服約二百五十名をはじめとする、千名以上の警官を動員して、大衆平和運動の前衛であるところの全学連と、反戦青年委員会の私運に対して、徹底的ないやがらせと弾圧を加えてきたのである。平然としたデモ行進の途中でも学生一名を逮捕し、又領事館前においても、おとなしく坐つて、エントナープライズ寄港反対を叫ぶ反戦青年委員会に対し、ゴボウ抜きならぬ、直接逮捕といつたところの、従来の常識を破つた出方をし、十二名もの私運の仲間をさらつていつた。

これらの官憲の不当なる露骨な弾圧の動きは、その後十六日以降におけるところの、現地佐世保や、東京をはじめとして全国各地での斗争の中であきらかに示されて来た。それは、佐藤自民党政府が民主勢力の成長を恐れ、又、権力の座を失いたくない一心から、民主主義をなくすに於いて、既成事実をつくりあげ、警察国家と軍国主義の再建への道を築きあげようとする意図と、そのあせりを顕著に表現したものと云へよう。(この事は結果的に、自ら墓掘り行為にはかならないと思うのだが：：なぜなら、日本国民の絶対多数は、これを黙つて見捨てておかないから)。

今度の斗い、米軍原子力空母エンタープライズ号の寄港に際して政府は何一つとして国民が充分に納得しうる説明をしなかつた。否しなかつたと言うよりも、説明出来なかつたのだ。国民が充分に理

解出来得る何ものもないから、故に政府は従来の方法と全く違つた姿勢で説得工作をうち出して来た。過去十九回もの原潜寄港の折には、兵士の休養と兵站物資の補給といつたもつともらしい寄港の目的をあげ(今回のエンタープライズ寄港では米軍側これを否定)近海汚染に ついて原子炉の安全性というものに固執した感があつたが、これからの寄港では、国民一人ひとりの精神面に直接手を延ばして来ようとしている。そして「自ら国を守る気概を持つ」と発言し、国防教育の折込計画に至つて居る。

「自ら国を守る気概」とは何か？：：私運の運動、斗争は、「自ら国を守る気概」を持たずして展開できるであろうか。政府の首相の言わんとするところは過去の昭和行政史が物語つていて思われる。このことは日本国民なら、誰しもが気の付くところではないか。しかし、なぜ政府自民党は再び大日本帝国の悪夢の道を歩もうとするのだろうか。

彼等資本家は、資本主義の国々を、自由國諸国と呼んでいる。ここでは彼等は何をしようとする自由であると言ふことらしい。だから彼等は巨大な資本と経済力でもつて、自由に、ほとんどの商行為を合法化してきたし、又、これからも永久に続けて行こうと企んでいる。よつて彼等には、最もよく儲かる商売を選択する自由がある。そして実行している。それは通常の間人がみれば、人殺しの戦争という最大の暴力ではないか。彼等にとつて戦争ではなしに、戦争程にひきあひのある投資の対象があるだろうか。戦争程に儲けのある、う

まみのある商売がほかに見出しようはずがない。それだけに彼等は

「戦争」を望みそれを「正当」な合法的な商行為と考へている。自由は本来、人間としての正当な権利を相互に認識仕合ひ、保障される事が、前提の基にかたられ、且、存在する事が正しいあり方であつて、彼等帝国主義者の行動、すなわち基本的人権さへも認めようとしなかつたところの、あの様な自由行単を私運は、絶対に許してはならない。彼等は巧みな攻撃を続けしかも、口では立派な、きれいな事を言いながら、この二十余年のあいだ、自由を、人権を、憲法を、ほとんど思うがままに踏みつけてきている。そして私運は、今では身動きのとれないわくの中にはじめこまれようとしている。この間多くの労働者民衆の抵抗や斗いは、結果的になされないに等しいままに、圧政を黙認して来たのではないか。過去の多くの先輩達が尊い人命をかけて、自由を人権を、民権を叫び、ときの権力と斗い、勝ちとつてきた種々の権利が今、日本の地上から消滅されようとしているとき、私運は青年として、後輩として、権力と斗い、これを防衛せずして責任がはたされようか。

(全電通)

佐世保斗争を再度、全国へ!

一 尾 実

一七日、我々の斗争は、市民生活の遠慮がちな佐世保市街を駅前から、四ヶ丁商店街へとデモ行進することから始つた。「佐世保市民と共に斗おう!」我々をのぞきみるような通りの商店街の市民に我々はシュプレヒコールを繰り返す。

佐世保橋を埋めこんでいる機動隊の青いヘルメット、乱斗服が何となく、もどかしい我々の心持を襲う。一瞬ひきしまつた心情にエンター阻止の決意が現実の重みをもつて湧いてくる。一五日の飯田橋の予防検束、一六日、博多駅での厳しい弾圧をちらつと思ひ浮べ、斗争意欲をかきたてる。

一七日、午後五時半、「エンタープライズ寄港阻止青年集会」

(佐世保青婦協、地区反戦主催)がもたれた。

||長崎反戦五〇〇、常駐オルグ団五〇〇、関東反戦四〇、全大阪反戦五〇、革マル二五〇、社会学二〇〇、自治会共斗二〇〇が参加した。約一八〇〇の部隊は、決意表明の後、基地周辺||松浦公園||佐世保橋||斗争本部前||平瀬ロータリー、平瀬橋||四ヶ丁商店街||国鉄、佐世保||へのデモ行進に出発した。(地図参照)

斗争本部——平瀬ロータリー間（基地の中心部道路）は乱斗服に身を固め、ジュラルミンの楯をつきだす機動隊が我々を側面から、こぎき、押しもどそうとする。

しかし我々は、この間、終始ジグザグデモを敢行し、その戦斗性を発揮した。大半数の商店がシャッターを下ろし、我々の抗議を窺見するなかを（そしてこの商店街や、市民が徐々に変化し、十八日以降、とくに二一日～二三日は我々反戦と全学連に励しく拍手が送られるようになるのであろうが；）ジグザグとフランスデモで商店街通一杯に広がり、その強い抗議を示しながら国鉄佐世保に到着しようとした。

その時、棍棒をもつた右翼が車で乗りつけ、全学連部隊へ突入してきた。だが、隊列を整え真正面から向う我々に屈し、早々に退散した。

斗争本部へ集結した我々は一七日の斗争を総括し、翌日の斗争の統きも立てて各自宿舍へ引揚げた。

我々は宿舍で、一七日早朝、平瀬橋上の衝突をテレビでみ、権力の残虐さ、そしてこうした機動隊の暴力を楯に、核装備原空母、エンブラ容港を全国民に承認させ、日本の核武装化、ベトナム侵略への一層の加担を狙う、権力への云いがたい憤りを腹の底から燃え上らせ、翌月の斗争決定を更に強めた。

一八日、午前九時、我々は斗争本部へ集結し「全学連部隊を迎えよう」という指令で国鉄佐世保へ向つた。

我々が平瀬橋に到着した時、途中コース変更し、佐世保橋に向つた全学連部隊が攻撃されていることを知り、我々も急拠、コースを変更し佐世保橋へ、外人バー街を抜けて向つていった。

我々が、全国反戦派遣部隊九〇名でもつて外人バー街を北へ、佐世保橋へ向おうとした時、前面道路には機動隊がジュラルミンの楯を道路一杯に立て待機していた。

全国反戦指導部を突き上げ、楯一杯にジグザグデモを展開しながら「何故橋へ行かないのか」と返した。

橋上の全学連部隊を気づかいその後危険の状態に陥ち入つた。我々デモ隊の先頭部が機動隊から離れた時、前後の機動隊は橋へ移動し、全学連部隊を楯の両面から狭撃するというかっこうになつた。

頂度、その時、福岡地評五〇〇部隊が我々の後方に到着し、我々と共に橋へ急いだ。

狭撃している一方の機動隊を退散させ、全学連部隊の横に到着したその時から活気づいたデモ隊と全学連の基地内集会へ向けての突入に、あわてた機動隊は、催涙弾入りの放水を始め、我々の頭上に気狂いじみた催涙弾攻撃を始めた。我々は全学連部隊の突入を横目でみ、我々も……と思いつつ、ただ催涙弾のため涙をボロボロ流して噴まんやるかたない気持、突つ立っているだけだつた。

全学連部隊が、ここ連続した斗争でヒヘイを見ながら、尙、最後の突入を肉弾で試みたが、次第に機動部隊が散りぢりになろうとした時、我々、反戦青委がその中に割つて入つた。全学連をまきこむよ

全学連に対する権力の暴虐さを予想し、それに備えて戦斗力を秘めつつ到着した我々の前に現われたのは予想に反して、堀井総評議長であつた。

我々は出迎え部隊に作られていたのだつた。

「オイッヘルメットをかぶつてこい！！」

「ホンマにやつてみ！」とヤジられながら堀井議長は宣伝カーの上に登つた。

その時、以前から妨害行為を続けていた日本愛国党の赤尾敏が、「バカ バカ バカモン」演説を始め、更にポリウムを上げて軍歌を流しだしたため、我々は赤尾にヤジと抗議を続け、結局、堀井議長のアピールは聞こえずじまいだつた。（そして赤尾はこうした露骨な妨害行為のために市民のひんしゆくをかい、権力の側も彼を逮捕せねばならなかつた。）

我々は、社・共五万人集会の会場である市民グラウンドに向けて戦斗的デモンストレーションを開始した。

我々が東門に到着した時、日共II民青が不法占拠し、参加団体として認められている我々反戦青委の入場を阻止しようとしていた。我々の抗議も受け入れられないため、やむをえず、実力で以つて、民青諸君を排除し、入場した。その後、再三の民青の門前占拠を抗議すると共に、実力で排除し、全学連部隊を入場させた。

二時半、常駐オルグ、反戦、全学連、各労組の順でデモ行進に移つた。

うな形でジグザグ、佐世保橋を南下し始めた時、反戦部隊へ機動隊の棍棒が襲いかかつた。（関東反戦の一名が頭部を縫い、負傷者が数名でている）全大阪反戦の部隊は抵抗に関らず分散させられた。その時、全学連部隊はゲリラ投石を始めた。

佐世保橋上で、衝突を見ていた数千の市民は権力の暴虐さを、そしてその本質をつかみ始め、橋上での「声を抗地」が顕在化しはじめた。そして、他反戦に合流して、佐世保駅までのデモンストレーションで斗つたのだつた。

現地斗争は多くの成果を上げた。

我々は今、この成果を全国へ波及させねばならない。

佐世保で去来したこと

尼崎 山 本

僕は見た—完全な武器が振り降りる姿を。

佐世保で市民たちは見た—斗う姿を。

日本の国民は見た—佐世保の出来事を、過去四年間、ベトナムへの米軍の血に汚れた暴虐が報導されながら終結させることが出来ず、日本政府がそれに加担するのを阻止することも出来る日本の姿をベトナム戦争は既にヒューマニズムの問題では解決出来ないのだ。る日本政府を打倒す以外に道はない。

私たちは佐世保でヘルメットをかぶり角材を手にした。然しそれは私たちがだけでしかなかった。そして、それは必然的に防備だけで終るものであつた。我々はより完全な武器で攻撃をけななくては：：（然し我々は情しきをもてるか？）

私は訴えたい。全ての革新を名乗る人々に、学者と名のつく人に、日本の革命の方向をはつきりと打出しその旗の下に団結することを警官諸君！ その道をあける！ さもないと実力で突破するぞ！

「佐世保市は昔から目ぼしい産業もなく、漁業にたよりながら細々と生きていたのだが、日本海軍の要めとして急激に榮え、日本の敗戦後は米軍の落すドルで又活気をとりもどした」——そんな知識を頭に佐世保へ乗り込んだ日に印象深く映るマリア像——やはり基地だな、の感。

小さいけれども立派な商店街、神戸市からスモッグを取り除き、工場街をとり除いたらキツトこんな街になるのだろう。

一歩うらへ回れば、立派な(?)歓楽街—あぶく銭だけで榮えている街が続く。こんなところを見ているとエンタープライズの寄港があるとはいえ、どうしてこんなところに来たのだろう、という感情がこみあげてくる。

一月十八日—五万人集会、こんな大きな集会に参加したのは何年ぶりのことだろう。

五万人のヘルメットがホテル街から商店街へ、歓楽街から佐世保橋へ。

銀色のタテが太陽を反射させる——ダメだ！ 殴られ——奴等の方が完全だ。武器も防備も——共産主義に対する徹底した教育、監獄

弁護士団より

エンタープライズ雜感

辛島 宏

(1) 今回のエンタープライズの佐世保寄港に際して、あるいはその前後の憲察のデモ警備のありさまを聞き又は読んでいろいろの感じがわいてくる。

(2) 東京飯田橋付近での多数の学生の逮捕は—昔の予防検束や保安拘禁をしのばせる。この逮捕は凶器準備集合罪の嫌疑に基くと聞く。しかしこの罪名が成立するためには二人以上の者が他人を殺傷する目的で集合することが前提となるが本件の場合他人を殺傷する目的があつたといえるかどうか相当疑わしい。更に凶器準備集合罪はもとと暴力団の殴り込みや乱斗を防止するために制定されたものであり、従つて凶器とは銃、ピストル、日本刀、アイクチの類を指すと制限的に解さねばならないところ広くブレード用の角材までも凶器であるとの強引な解釈を前提とする本件の逮捕は相当の無理があるといわざるを得ない。このようなルーズな解釈は憲法上の罪刑法定主義に副わず、市民の自由を不当に制約する結果をまねくだろう。今回の大量逮捕が予防検束や保安拘禁でないとの反証を得られ

たら幸である。

(3) 九州の駅では列車から降りて来た学生一人一人を警察官が数名で強制的に身体の検査と搜索をしたという。これが事実とするなら、九州大学法学部長井上正治教授が指摘したとおりこれは警察による明白な人権侵害である。即ち市民は憲法上、現行犯として逮捕される場合を除き裁判官の発する令状がなければ警察官によつて身体検査や搜索を受けることがない保障されているにもかかわらず令状がなくまた現行犯として逮捕される場合でないのに公然と警察によつて身体検査と搜索が行われ憲法の定める令状主義がふみにじられたのである。

(4) 市民が悪いことをするかも知れないと不必要に危惧して予防検束や保安拘禁を好む政府、法を無視して市民の自由を侵す政府は専制政府といわれることを甘受しなければならぬ。最近の警察の不当な捜査をみるとナチスのファンズム時代を連想せざるを得ない。

(5) 私は現在の社会でデモをする権利がどんなに貴重なものであるかを理解するのは人後に落ちないつもりである。また市民が街頭で政府に抗議しその政策を批判し自己の意思を表現する自由が民主主義の基礎となつていことを疑わない。しかし学生が投石や角材で警察官と再三再四わたりあつたことはいささかついていけない気がする。もとより相手が政府であろうと誰であろうと不正を強制する者に対しては全力を尽して抵抗するのは自由を愛する市民の神聖な権利であり当然の義務である。しかし角材と投石をもつて警察とわ

たりあることが賢くかつ強力な抵抗権の行使であるといえるのかどうか若干の疑問を持つ。あるいは自分が老成して臆病に過ぎるのかも知れない。真面目で自己と政治に責任を持つと欲する市民の多くが現在の政府や政策に危機と不満を感じずるのとは当惑である。しかし危機と不備が高く強い現代こそより賢く、より持続的で、より強力な効果的なデモ行進のあり方を真剣に模索しなければならぬ。学生連（あるいはその一部）が投石や角材で抵抗するのも相当の根拠があるだろう。温和で投石や角材のないデモも多くの、新聞や政府は無視しなかつたろうか。目を耳をおおわなかつたろうか。デモを不当に制約する法律や公安条例がなかつたろうか。政府と警察はデモを不当に弾圧しなかつたろうか。

雑感 若干

一 弁護士

弁護士は事件に中途から参加する。当然の結果として、全貌とらえ得ない。とくに、感性的な経験、印象が不十分である。これこそ事件の行方を決めるものであるべきなのに。この不足を補うため一種の想像力が不可欠であるが、それによつても足りない面が残る。そしてまた、立場が違ふ。すくなくとも、「なか」に入つてい

ない。ここに、弁護士が、その立てる方針が、ズレてくる第一の原因がある。

「ナニオ」審判」によると、ここでは刑事被告人と裁判所の関係について云われているのだが、審判所との間にはなく、弁護士との間にある。弁護士は裁判所と一体をなしている、その一部だ、と見える。日本で慣習となつている「先生」との呼称はこの事実をな程があらわしている。

前科二四犯のおやじと知り合いである。目下、二五犯の手続きが進行中である。二四犯になる手続き中から付き合つていたが、これは京都の裁判所であつたので、御所など散歩しながら話をしたおやじ云われた。「あなたは自由業だと思つているのだから、特権を持つてゐる。裁判所を歩いていて、あなたには職員が挨拶をするが、俺にはしない。あんたらはこの特権で守られてゐる」と。この人は、タクシ労働者だが、抵抗のつもりでやつてゐるので、抵抗の方法を誤まつている、問題は交通行政、体制の変革にあるのだから、そのための結集、組織が必要なので、あなたの抵抗はその逆ではないか、と注文をつけたのに対する回答である。

「紳」文字によると、官吏は長く続けるものではない。外被と中身を自分でも混同してしまふから、ということである。弁護士の場合は、外被と終生分離しないで済むから、同じことはより強く云えるかも知れない。

しかし、幸いなことに、このしがねえ「特権」がわれながら頼りなくなつてしまふときがある。捜査機関との交渉がそうだ。向うのペースで、つまり、拘束を解け、という話にならないかぎり、「先生」で居られる。出せ、ということになると途端に「先生」から一種の無頼漢の立場に転落する。ケチな警官の説教を聞かされるのはまだ我慢ができる。「夜も遅いし、執務時間はおわつてゐるのだが特別の計らいで、今回だけは接見させてやる。次からは考えてくれ」これが彼らの確信である。単なるいやがらせなのではない。こういうのをいちいち反論する気はやがてなくなつてくる。いそがしいときには時間もつたない。黙過することになる。

残念なのは、交渉相手が居ないことだ。「自分は居残りだ。釈放の権限はない。署長以下責任者はみんな帰つてしまつてゐる」。

すかしても、おだても効果はない。いくら仲よくしてみても全く結果はかわらない。彼らのルールでは交渉相手をとつて説得し得心させても、どうしようもないのだ。責任者がいない、そして、しばしば、居ても逃げかかれる。そして、制度のせいにする。権力的組織体のいやらしさをつくづく感じさせられる。検察庁でも余りかわりはない。「上司の決裁を得なければ、自分一存では決められない。上司は外に出ている。「ちゃんとした検事がこれを云う。女の子が「お母ちゃんにしかられるから」と云つて逃げる論法だが、どうしようもない。外から見ると、まさに無責任の体系である。

彼らの論法は帰するところ、「事実が事実だ」である。事実につ

いての論議は彼らのこととするところではない。最大限説得の努力が彼らにこそ要請されるはずなのに。彼らは権力を持つており、当方は持つていないからである。彼らの結論ははじめからきまつてゐる。だから理くつは、三百代言とうつてゐるに違いない。しかし、決定権限を持つていない、ということとは悲しいことだ。組織の外からの説得に耳を籍したりすると内部で制裁を受けるだろう。その間、拘束は続けられる。外では疲労困憊した者による救援、多大の出資が余儀なくされる。

この現状は改革されなければならない。第一に必要なのは、捜査機関の、身体の拘束に関する感覚を変へること、通常人のそれにまで引き戻すこと、そして、身柄の拘束について決定権限ある者がいつでも交渉の相手として連絡できる体制、制度が作られなければならない。

第二に、逮捕に対する不服申立、拘留請求却下にもかかわらず、直ちに拘束を解かない場合に即時の救済方法、黙否権の行使に対して懲罰的に拘束が継続される現状の改善、総じて、捜査段階における当事者主義の確立、これの必要を痛感する。一般予防のために、職権乱用などで告訴・告発するの過渡的手段としてやむを得ないかも知れないが、当座の役には立たない。

第三に、最も重要なのは公安条例の廃止である。向うの土俵の中で争うのではどうしてもハンディを負う。時間がかかる。土俵を変えなければならぬ。向うの武器をなくすこと、公安条例の撤廃、

その前に、それに向けて、事実上無効にして行くこと、個々の事件もその事件の解決だけにとどまらず、同時にこの目的に向けられたものでなければならぬと考える。

最後に、デモについて云えば、その権利の擁護、弾圧に対する批判およびその実践で尽きるわけではない。デモをさらに意義あらしめるための、いわば前方へ向つての工夫が、つまり参加者の実質的な結果をどう強めるか、が権利擁護にも増して必要だと思ふ。

原空母の行動に抗議する

編集局

一月二三日、北朝鮮元山沖で米海軍のスパイ船ブエプロ号が逮捕された。これをきつかけに、対島海峡を中心とする日本海の緊張は一挙に高まつた。

ベトナムに向けて佐世保を出港したばかりのエンタープライズは直ちに元山沖にコースをかえ、北朝鮮への「核」洞喝を行なつた。続いて攻撃空母レインジャー、対潜支援空母ヨークタウン、通信連絡艦アーリントンほか五隻の軍艦が集結した。さらに二五日、ジョンソンは海空軍予備役の召集を命令する一方、沖縄から三六機のジェット機を南朝鮮へ移し、米極東空軍の増強にふみきつた。

米国防長官直属のスパイ船が、簡単に逮捕されたという裏には、米帝国主義の意図的な策略を充分に疑うことができる。この事件によつてジョンソンは国内の反戦運動をおさえ、ハト派を自己の下に結集し予備役召集を可能にし、大規模な極東、東南アジアに対する増派を獲得したからである。我々はこうした米帝の「危険な賭」北朝鮮に対する戦争挑発と、それを口実にしたベトナム侵略のエスカレーションを断じて許すわけにはいかない。そして、エンタープライズによる核攻撃の洞喝に対して嚴重に抗議する。日本政府のあらゆる言い逃れにもかかわらず、佐世保から、元山沖へのエンタープライズ出動こそ、エンタープライズが極東、東南アジアにわたる侵略兵器、核兵器として行動していることを示した。ここに日本帝国主義の海外侵略、核武装への陰謀がありありとあらわれていることを暴露し、弾劾する。

日米共同の極東、東南アジア人民に対する侵略と抑圧の拡大は、何よりもベトナム民族解放戦線の決死の、かつ圧倒的な攻勢によつて現在手痛い反撃を受けている。解放戦線による都市への総攻撃と占拠は、都市の人民の広範な支持を得て行われ、「南ベトナム」カライ軍の投降が続出している。ベトナム人民の英雄的な闘いは、ますます狂暴化する侵略に対しては甘言に乗ることなく、断固として戦いを押し進め、粉砕しつくすことを最良の解答であることを我々に教えてくれているのだ。

沖縄基地へのB五二の集結、横須賀、岩国基地からの飛行機、軍

艦の出動、板付空港からの民間機排除、八王子における野戦病院の建設、羽田空港の米チャーター機の圧倒的増大等々、侵略戦争の暗雲は確実に日本をおおつている。ベトナム人民の闘いに応えて、我々は日本におけるこれらの侵略の策動に対して闘いを抜くであらう。とりわけ、この三月に強行されんとしている三里塚国際空港軍事空

港建設の第一歩、代替地造成、ボーリング調査、用地の測量と買収の攻撃を全力阻止することに向けて闘いを集中するであらう。ベトナム人民の総攻撃を孤立させないことによつて、羽田―佐世保の闘いを越えることによつて、我々は今も東南アジアのどこかに砲口を向けているであらうエンタープライズに対抗をあげることができるとだ。

激動の一週を終つて

― 闘いの総括と展望 ―

清田 祐一郎

この間の劇的な経緯について、こと改まつた描写をする必要はあるまい。その任務を果すべき栄光は羽田斗争以来一貫して唯一つ極めて正当な論陣を張つてきた某週刊誌に与えられるべきであり、かつその任務は十分になせられたからである。この闘いを支配した三つの潮流は、闘いの前に「市民」と呼ばれる未組織の大衆との間に一定の関係を形づくつていた。

第一の潮流は既に久しい以前から「市民」を遅れた政治意識をもつた「遅れた大衆」と規定し、しかも、その政治意識の発展と、それを直接に表現する戦術形態が、現実政治の要請にはるかに遅れていた。あるいは極めて徐々にしか――発展しないとの確信に到達していた。そして、「大衆」に対する固定した確信はいつの頃からか現実の大衆の動きから切り離されて抽象的な物神崇拜にまで高められていた。

第二の潮流――この潮流は大衆の表面的な動きの最も鋭敏なバロメーターである。

独自の組織能力は極めて弱く、様々な矛盾した要素を同時に保持し、大衆の表面的な動向によつてその濃淡を変更する極めて実直な「大衆政党」がこの潮流の特質をなしている。第一の潮流が観念化された大衆に拝跪するのに対し、この潮流は現実の大衆に拝跪する。

一月一七日――佐世保――この街で、永い苦痛の多かつた闘いの一つの帰結が、急速に準備されようとしていた。二度に亘る羽田の衝鋒をもつてもなお噴出することのなかつた、うつ積した大衆の不満は、まさに発火点に達しようとしていた。

第三の潮流――六〇年安保で初めてはつきりした組織的な結合を

とげ、大衆的には「全学連」として知られ、その後の過程で青年労働者の最も意識的な部分——その具体的組織形体としての反戦青年委員会——との結合を深めてきたこの潮流は、大衆の具体的な利益を擁護し、国際的な階級斗争の要請に最も卒直に応えることを通じて、斗いの尖鋭さと孤立がもたらす多大の犠牲に耐えながら、大衆の潜在的な要求と、いいかえれば未来の大衆との結合を意識し、又確信してきた。だが、大衆の潜在的な要求との結合はそれがはつきりと目に見える結合に変わるには極めて長い時間を必要とする。それどころか、常識の四壁の中からのみ発言する大衆によつて、しばしば痛烈な孤立感をすら味わされる。十・八から十一・一二に至る二度の羽田斗争の過程でこの孤立感の極点にまで達していた。常識の四壁の中で起つていた大衆の苦悩と格闘の結着が、これほど早い時期に、しかもこれほど明快な形をとつてつけられようとは、孤立した凄絶な闘いを続けていた人々には、たとえ期待されていたとしても、確信されてはいなかつたであろう。

無定形の市民連は、一たん自己の殻を破るや、急角度にその蓄積した要求を最も有効に表現しうる形式に急速に共感を示し近づいてゆく。このことを理解出来ぬか、あるいは意識的に理解しようとしぬかのみが、「判官びいき」ということで説明してみたり「警官の余りにひどいやり口」を階級斗争の現実の要請と切離して論じようとする。

私には、ここで佐世保のあの巨大な高揚をもたらした原因とその斗いがもつた意義を語りつくすだけの能力も時間的なゆとりもない。以下の各項では、これらの諸点についてごく部分的な総括をしておこう。

(一)

佐世保の巨大な大衆が自らの古い殻を打破つて、極めて初歩的な形ではあれ、自らの政治行動の形態をつかみとりはじめた直接のキッカケは、いうまでもなく、原子力空母「エンタープライズ」号の佐世保寄港であつた。

そして、しばしば語られてきたように、八萬五千トン、搭載機百機後楽園球場の三倍の広さをもつ現代科学の粋を集めたこの怪物に託された日米帝国主義者の期待は、①現に北爆に従事し、ベトナム侵略に重大な役割を果している原空母の寄港によつて、日本政府（それは、国際的には日本人民と一体のものとして表現される）のベトナム侵略への加担を事実上の行為として行うこと。②「核アレルギ」の解消」という言葉で表現されたように、政府の慶重なる言明にも拘らず、核兵器を搭載していることが明らかであり、それ自体としても核兵器としての性質を有することの怪物の寄港を通して、日本の軍事力拡充の象徴的行為である「核武装」への道を切り開くと同時に、日米帝国主義を軸とした太平洋沿岸の反革命同盟への志向を国際的に表明すること。などであつた。

それ故、大衆のそれに対する対応は、何よりも、この二つの点、即

ち、米帝が今日に至るまで続けてきたベトナムを始めとする世界各国における反革命憲兵としての民衆の弾圧、民族主義運動、社会主義軍動への残虐な弾圧を拒絶し、日本政府がそれにかゝる意味でも加担することを拒否し、更に日本政府が、日韓条約以来急速に進め、昨年に至つてより一層強引な形をとりはじめた国内的国際的な政治反動としての性格を拒絶する点に基礎をおいている。だが、先にも述べたように大衆の政治的、経済的な不満は決して常に政治的な行動として、その不満の度合いに応じて表明されるわけではない。ことに我が国が如く政治行動の伝統に乏しい国では、それは大部分の場合にウツ積した不満として大衆の中に沈澱し、ある強力なキッカケを通して一挙に爆発するという性格をもっている。今回の原空母斗争の場合、直接のキッカケを与えたものは学生と、青年労働者が二度の羽田斗争を通じて維持し、佐世保で三度展開した尖鋭な行動とそれに対する官憲の弾圧であつたし、昨年訪ベトナム・訪米よりもはるかに具体性をもつた、具象物としてのエンタープライズ号の寄港であつた。

それ故、佐世保における大衆の高揚と、それに力を得たその後の全国的な高揚は、具体的に行動が佐世保に向けて開始された時期からではなく、その行動の中に流れ込んだ、長い期間に蓄積された諸要素との関連でのみ理解されねばならない。

六〇年代の前半における日本資本主義の飛躍的な高成長と、五八年 E E G 結成を一つの転期とする国際経済の状況によつて、六〇年代

中葉から、設備投資主導型から輸出主導型への転換を余儀なくされた日本資本主義は、ほぼこの二つの期間を通じて、大規模な企業再編と同時に徹底した合理化を遂行してきた。そして、それは、一九五六年以降の合理化の過程で意識的に育てあげてきた会社子飼いの組合活動家の成長(?)によつて組合自体を企業イデオロギーの下で第二労務管理部門として再組織する過程を包含した形で進められてきた。高成長の中における貧困、人間性をますます奪い去る合理化、そして、増大する物質的要求を最低限満たすために要求される長時間を越える残業、そして、この間の物価の急上昇——大衆の不満は政治的な表現をとらぬままに、この数年間驚くべき深さで蓄積されてきた。

それは、企業内という次元では、昨年の三菱三原における組合指導部に対する叛乱に示されたように、最も右傾化と企業の支配が進んでいるといわれる部分においてすら意識の底でもえつつづけていたのである。

I M F J C の結成は、たしかに作業長制度に典型を見る資本の労働者支配と組合の丸ががえの成果であつたとはいへ、労働者がイデオロギー的にも、組織的にも資本に屈服しきつた結果であると判断するには、あまりにも複雑な錯綜した過程を内包しているのである。

昨年の訪ベトナム・訪米において佐藤政府は、東南アジア太平洋諸国への経済的進出をより一層急速におし進めると同時に、それを支える軍事的、政治的背景を米帝との結合、補完関係の下で強力にお

し進めることをはつきりと宣言した。

又、ポンド切下げ——ドル危機、そして日本資本主義の国際収支の危機と景気後退——財政硬直化。そして、組合が戦力をもつて、いる公労協部門への激しい合理化の波及と、それに対する全運動労働の斗いは今後の激しい反合理化斗争の前ぶれであった。

こうした諸要素に対する大衆の不安と不満は更に連鎖して打出された公共料金の大幅引上げ、大衆無視の国家予算、年頃の国防教育に關する文相談話などに触発されつつ、佐世保の斗いと、その後の全国的高揚の中に流れ込んでいくことになった。

(二)

経済的な対外進出は、ほとんど常にそれを支える軍事的、政治的な「力」の背景を要請する。日本帝国主義も又、この間、対外進出を支えるべく軍事力の強化を急いできた。しかしながら、米国の軍事予算が我が国の国家予算の数倍の規模に達しており、しかも、それだけの軍事力をもつてもわずか三千万の国民の独立、社会主義のための革命運動を圧殺することが出来ないという事実。更に中国が巨大な強力な人民軍を保持しているという事実は、少くとも当面、更に、戦前三位一体となつて同じサイクルの下に構成された国家——日本帝国主義が独力で東南アジアへの進出を支える軍事力を保持することが困難であることを物語っている。

こうした状況の下で日本帝国主義の見出しうる唯一の活路は、五八年以来政治の分野にはつきりと表われ始めた後退と、特に後進諸国における革命運動の発展に苦悩し、更にドル危機の追い打ちをかけ、

られて窮地に陥いつている米帝との反革命的な軍事同盟であろう。昨年の訪ベトナム・訪米は七〇年安保改訂に向けて、かかる方向をはつきりと意志統一すべく行われた。

だが、このような方向は、国民の反動的統合を極めて困難なものとする。なぜなら、このような関係の下では、日本のナンヨリズムは、常に米帝の國際的な行動を通して意識されるからである。

この間の日本帝国主義の軍事的・政治的行動が、ほとんど常にベトナムを初めとする諸地域における米帝国主義の軍事的暴虐とのかかわりを通して行われ、大衆に意識されてきたことは、このような事情に起因する。

その意味では、日本帝国主義にとつて必至の課題として浮び上がつてきた。軍事外交問題の解決は、戦前の場合よりははるかに困難になつてきているといえよう。

戦前から温存された企業主義を同じサイクルを画きながらナンヨリズムとして再構成し、国民のイデオロギー上の反動的統合をなすことが極めて困難であることの一因はここにある。

更に、戦前三位一体となつて同じサイクルの下に構成された国家——企業——家族というイデオロギーの基礎構造は、その最底辺において打砕かれていた。

イデオロギー上の統合と暴力装置の発動は歴史上一貫した相關関係をもつてきた。

イデオロギーの機能の弱さは暴力装置の発動をより狂暴なものにする。

る。そして官憲の暴虐に対する大衆の物理的の対抗はこの関係を相乗的に強め合いながら極点に向つてつき進む。

しかも、この間の極めて非人間的な合理化と労働強化は、ことに若年層の間に企業主義を全く受けつけぬ状況をすらかもし出している。表面的には、あるいは指導者の意識構造においては、極めて排外主義的な色彩の強い同盟系のデモ隊が官憲との衝突をひき起し、公明

党が初の大衆行動にふみ切らざるを得なかつた要因の一つはここに求められよう。

(三)

ここに一枚の布告がある。

人民諸君

ルイ・ボナパルトは法の外に置かれる。

戒厳令を廃止する。普通選挙は回復されよう。

共和制万歳 武器を取れ

ヴィクトル・ユゴー

一八五二年十二月三日、ルイ・ボナパルトのクーデターの直後に、バリの一市会議員であつたヴィクトル・ユゴーの手によつてはりめぐらされたピラである。

市民は、いくらかの曲折——市民の蜂起を恐れたボナパルトの軍隊の先制攻撃など——の後、やがて武器を手にし、道路の敷石で

それは一七八九年以来の数々の斗いの中でいく度かはぎとられてもはやつみ重ねるだけでよかつたのだが——バリケードをつくり始める。

「歴史上階級斗争が最も徹底して斗われた国」と誰かが書いたこの国の住民は、一七八九年七月十四日のバスチーユ襲撃以来の幾多の革命戦争の中で、自己の政治的主張を表現する最も有効な戦術をつかみとつていた。

この国民のもつた、すぐれた歴史的伝統はやがてソヴェイト型革命の原型をなす一八七一年のコミュン政府に結実する。

大衆が自己の政治的要求を表明するためにこの戦術は一方では階級斗争のそれぞれの局面に他方では歴史的伝統に規定される。

その意味では、戦術は、単なる戦術ではなく、階級意識のパロメーターとしての意味をもつ。そのような観点から見れば、今回の佐世保斗争が、極めて防衛的な色彩をもつものとはいへ、角材——ヘルメットという戦術形態を二度に亘る羽田斗争における孤立に耐えて、

一般化したことは極めて大きな成果であるといわねばならない。もとより、戦術の発展は誰かの頭の中で、偶然に考えられる性質のものではない。歴史的な制約の中で新しい、より発展した戦術が生み出されるためには、厳しい階級斗争の現実と、広くさい常識との死に物ぐるいの斗争が必要である。

羽田の斗いで全国民に政治斗争の一つの戦術として知られ、佐世保斗争で大衆的に認知されることとなつたこの戦術形態は、先ず、三池の極地的な斗いの中で生み出され、第二次砂川斗争を通じて維持

され、一〇・八羽田斗争において全国的政治斗争の形態となるキツカケをつかんだ。

三池の死活をかけた労働者の斗いの中から生み出され、土地を守ることから出発して、ベトナム反戦に至る意識的な変革をかちとつてきた革命的な農民によつて受け継がれてきたこの戦術が、何故、学生の手によつて一般化されたのか、そして又、何故に佐世保の斗いを通じて全国的に承認されるに至つたのであろうか。

若し「学生は生活の心配がなく、労働者にはそれがある」ということとに理由を求めるとするならば、それは明らかだ。誤りである。

五〇年代の運動の場合には、たしかにそうした論議が通用しうる現実が存在した。

しかし、六〇年以後の弾圧の強化は、デモに出るためには逮捕——起訴の危険をかえりみることは許されない状況が続いた。逮捕——起訴という官憲の弾圧が、被逮捕者の生活をいかに強力に、いかに長期に亘つて破壊するかをここで説明する必要があるまい。

ここに一つの資料がある。

年	逮捕者数
29	0
30	9
31	15
32	9
33	23
34	15
35	30

してきたのである。

もとより、こうして自然発生的に生み出された戦術は、常に常識的な見地——歴史的な限界とのすさまじい格闘を通じて、はじめて維持され、一般化される。十・八から十一・一二、更に佐世保に至る、思想的な斗いは、このような過程であつた。

この過程で階級斗争の歴史の古い制約を代表したのは誰か、歴史の殻を打破る斗いを物質的にも思想的にも準備したのは誰か、についてはここで改めてふれる必要があるまい。

佐世保の斗いに参加し、あるいはこの斗いを受けとめて全国の斗いに参加した人々も又、直接であれ、間接であれ、日常生活を通じてあるいはほとんど慣例となつた経済斗争への介入を通じて、帝国主義ブルジョワジーの手先としての警官の役割を意識していたことは、いまでもなまじ。

とも角斗いは古い歴史の制約の中から発言した下司共の智慧とは全く違つたコースをたどつて、新しい地歩を切り開いた。

だが、この斗いをもたらした広汎な影響と新しい戦術の定着をもつてしても自衛隊の出動をほとんど必然のものとして意識せざるを得ない七〇年への斗いに耐え抜くには、はるかに大きな困難が待ち受けていることを覚悟せねばならない。私たちが、佐世保の斗いを準備している間にも、民間労働運動の中で全国金属と共にわずかに戦斗的な伝統を保持しているといわれた合化労連の組織的崩壊が積水化学の脱退——分裂によつて明らかになるなど、運動主体のおかれ

これは、関西では政治斗争が最も強力に斗われている京都における公安条例に限つての逮捕者数である。公務執行妨害、傷害などの罪名による逮捕者数を加えれば、これをはるかに上まわる数字が出てくるであろう。

これを見れば誰しもが気付くように、戦後最大の政治斗争といわれ、た安保斗争の期間（昭和三四—五年）には逮捕者が0であり、それを境にして急速に逮捕者が増大している。

ではこの間、運動は質的に大きな飛躍をかちとつてきたのであろうか。否、である。

この間の逮捕の理由となつたウスマキデモ・ジグザグデモなどの極めて防衛的な、にも拘らず当時においては私たちがもつた最も進んだ運動形態が安保斗争の期間中に広汎に行われ、のみならず幾度か無届けの集会、デモが行われたことを私は記憶している。それらの斗いに公安条例が適用されず、三六年以後の斗いで多くの犠牲が出ているのは、唯一の事実——官憲の弾圧がこの間飛躍的に強化されていることを物語っている。

もちろん、弾圧は単に法に基づいた逮捕——起訴——処罰という形態のみをとるものではない。というよりむしろ具体的な規制の面での弾圧の方がはるかに強力に展開された。サンドイッチデモ・放水警棒による乱打——大量の機動隊によるこうした弾圧——政治的自由の圧殺こそが、歴史上の大部分の場合にそうであつたように極めて防衛的な意図に基づくヘルメット——角材という運動形態を生みだ

た様相は極めて複雑である。（この積水化学の分裂は、尼崎反戦に二〇名をこえるメンバーを送り込んでいたこともあり、こまかい観点からもう一度総括される必要がある）

(四)

ともあれ、佐世保と全国を結んだ一週間の激斗は数多くの成果を残して終つた。

ここで、この斗いをもたらした成果のいくつかを確認しておこう。一、この斗いの成果は何よりも先ず、原空母の寄港に託した日米帝国主義者の意図を粉碎した点にある。確かに原空母そのものの寄港を阻止することは出来なかつたが、それを通じて成しとげようとした政治的意図は国際的にも、国内的にも打砕かれ、むしろブルジョワジー内部の動揺すら引き起すに至つている。（木村長官発言）そして、このことは七〇年安保に至る日帝のスケジュールを大中に狂わすことになつた。

二、この斗いは、従前の（特に五〇年代にその典型がつくられ、今日に至るまでひきつづいた）スケジュール斗争、動員割当の斗争とは質的に異つた連続斗争として斗われた。確かに我々は同様の斗いを六〇年の六・一五から六・一八に至る斗いで経験している。

しかし、七〇年安保まで、二年間という時間的な距離をおいて、こうしたスケジュール斗争とは質的に異つた斗いが斗われたことの意味は極めて大きい。

又、この斗いは、原潜斗争の場合とは異つて、現地と全国を意識的

に結びつける斗いとして組織された。

その具体的な波動については、別稿を参照して頂きたいが、とも角
全国——現地、現地——全国という斗いの波動がこれまでの現地斗
争で見られた現地に行つたメンバーと残留者の間の、現地住民と全
国の住民の間の意識のズレを完全にカバーし、佐世保斗争の成果を
そのまま全国規模のものに広げ得たことを見逃すわけにはいかない。
ことに我々関西の地区反戦の場合は、佐世保に先立つ先駆的な斗争
を元且から組織し、十五日の神戸領事館斗争を斗いすることによつて、一
五日の斗争における大弾圧と現地への大量派遣によつて著しく組織
力を奪われながらも、佐世保の斗いを直ちに受けて、組織的に成果
を刈り取る活動に入り得たことを付け加えておく必要がある。
三 階級斗争の中で敵の攻撃に対する最も直接的で有効な斗い——
実力斗争がいかなる構造で大衆との結合をとげていくのか、又戦術
と政治意識のかかわりはどのようなものであるのかについては既に
述べた。この斗いを通じて、我々は実力斗争の今日における大衆的
な形態を確立することに成功した。

この実力斗争の大衆化が、我々の予想よりも、はるかに早い時期
に為しとげられたことは、七〇年安保に向けて極めて貴重な成果で
あつたといわねばならない。もとより、この斗争形態は依然として
極めて初歩的なものであり、今後の長い、激しい斗いに勝ち抜くに
は、幾度かの飛躍が要求されよう。

その際、我々は、その飛躍の度ごとに大衆の自然発生的な不満の爆

発と結合しうると期待するわけにはいかない。より高い戦術は、よ

り高いイデオロギー、政策、組織的展望と結合して初めて大衆を獲
得する。今次の斗いは運動の裾野を拡大なものにした。今ほど意識
的な、組織的な活動が準備されねばならない時期はあるまい。
四、今次の斗いに広汎な大衆が登場したことは、様々な波紋を与え
はじめている。

安保斗争以後の政治的停滞と、企業におけるさまざまの攻撃
の中で組合主義の殻の中でジレンマに陥つていた幾多の活動家はこ
の斗いによつて、漠たるものだとはいえ政治斗争の展望を持ち、あ
るいは探し求め始めている。

又、この間の斗いの量的な停滞の中で、戦闘的な斗いを展開し、そ
れ故に孤立し、孤立のもたらす、さけ難い狭隘さにむしばまれ始め
ていた私たちの間にも様々な変化がおこりえよう。

斗いは広大な原野を切り開いた、時を移さず大胆に、卒直に、未組
織の大衆の中に入り、結合を深めねばならない。

七〇年に向けての日本帝国主義の針路は昨年来ほほ確固たるものと
して示され始めた。そして佐世保の斗いはそれに対する大衆の動向
がいかなるものかを如実に示した。

日本のナショナリズムは、今やかつての強靱さを回復することは出来
なくなつてゐる。敵の方針と共に欠陥も又明らかになされた。我々に
はその欠陥につけこまねばならない。組織を打固めねばならない。

広範な大衆の中に組織を根づかせねばならない。そして七〇年に至

る防衛論争に組織的にうちかつたために、武器をみがかねばならない。
敵の重大な欠陥にも拘らず、怠惰は我々を自滅の淵に追い落とすであ
らう。

(五)

こうした様々な成果の大部分は全学連の学生と反戦青年委員会の、
スケジュールの枠を越えた、尖鋭な斗争によつて切り開かれた。

佐世保の斗いは、第三次安保斗争の組織的な配置を見事に画き出し
た。そして、十五日の神戸斗争と十七日の東京の斗い（反戦、学生
各四〇〇名）はこの部隊が、質的にも、量的にもこの長い斗いの
中核を担い得ることを示している。

全国の地区反戦は、大部分の場合六五年に総評、社会党の指導下に
つくられた全国及び各府県の反戦青年委員会を一つのキッカケとし
つつ相対的にはそれと別個に、各地区の意識的な活動家集団を母胎
として生れてきた。それは、従前の政治斗争が持つた二つの特質
即ち、スケジュールと動員、組合別の運動に対して、構成員の意識
性に支えられて「スケジュールと動員」を越えた斗いを可能にし、
又本来領域を基準とする政治に対して地域的に対応することを通じ
て、組合のもつ「狭さ」を克服することを可能にした。

そして又、これらの特質を生かしつつ、地域的な狭さを克服するた
めに地区反戦相互の協力関係を強めてきた。関西地区反戦連絡会議
の結成は、こうした過程の必然の産物であつたといえよう。

今回の原空母斗争において、こうした組織的な特質が旧来の政治斗

争の型を一変するほどの威力を發揮した。
しかし、私たちは、こうした地区反戦のもつ特質（地域的なヘゲモ
ニー）を維持しつつ、より広大な労働者階級との結合をはかるた
めに、彼らの生活の場である企業の中に入れつつ行かねばならぬ
に、地点に立たされている。

関西の地区反戦の経過は概ね次の二つに大別される。

① 地域的な意識的な活動家の結集体として出発し、その構成員であ
る活動家の企業内における独自活動によつて職場との結合と職場の
反戦組織の結成が問題になつてゐるグループ ② 公務員、教組、自
治労などの青年部を一つの母体として出発し、強力な組織力に支え
られながら地域的な結合をはかるうとしてゐるグループ

前者の場合には地域的なヘゲモニーを維持しつつ職場との関係を強
化することが、後者の場合には、組織力を維持しつつ、地域的なヘ
ゲモニーを確立することによつて、組合のもつ狭さを脱皮し、更に
他企業労働者への運動の拡大をはかることが、急務であると思われ
る。そして佐世保の斗いはそのための条件を十分に切開いた。

府県反戦も又、こうした地区反戦の活動を包括することによつて、
あらゆる意味で自らを強化することが出来よう。

最後に、今回の斗いに、広範な組織が参加したことは今後の統一戦
線の新しい展望を呈示している。そしてこの斗いの広さは統一戦線
の量的な広がりを、羽田から佐世保に至る実力斗争の展開はその要
素を暗示している。

関西地区反戦連絡会議規約

- (名称)
この会の名称を関西地区反戦連絡会議とする。
 - (結成の目的)
激化する米帝国主義のヴェトナムをはじめとする侵略行動と日本政府の侵略加担、侵略につながる一切の政策に抗し、労働者の反戦斗争を促進するため、関西規模での各地区反戦青年委員会の経験交流と情報交換、行動調整を行う。
 - (組織機構)
 - 議長1名をおく。
議長は当連絡会議を代表する。
 - 事務局長1名をおき、その下に事務局員若干名おく。
 - 各地区反戦代表1名よりなる運営委員会を設置し、当連絡会議の運営にあたる。
運営委員会は議長、事務局長を選出、解任する。
 - (運営委員会)
運営委員会は唯一の決議機関である。
ただし、各地区反戦は運営委員会の決定に関し、広範な留保権を有する
 - (財政)
事務その他の必要経費については各地区反戦が原則として均等分担する資金と寄附金によつてまかなう。
 - 通信事務その他の関西地区反戦連絡会議の活動維持に必要な経常費については定期納入する。
 - 斗争費、救援対策費等の経常費以外の費用については、必要に応じてそのつど分担する。
 - 会計報告は必要な都度行う。
- 附 則
- ただし、既存の革新諸政党、各府県反戦との友好関係を促進するよう努力する。
 - 規約改正その他の必要事項が発生した場合は運営委員会で検討する。

関西地区反戦連絡会議救援対策報告

(1) 一・一五斗争を軸に展開された関西の反戦青年委員会の斗いに加えられた権力の弾圧はその露骨さにおいて東京、福岡で全学連に加えられたのと同質のものであつた。そして関西に地区反戦を中心とする反戦青年委が組織的斗争を開始して一年有余、反戦青年委の労働者部隊に加えられた最初の弾圧でもあつた。我々は予期以上の激しい弾圧に、多少戸惑いつつもこれに対応し、救対体制を作り上げること成功した。一五斗争の準備過程に関西地区反戦連絡会議を

ある。日常的な情宣活動、組織拡大が必要である。その中で救対費も恒常的に蓄積されることが望ましい。
なお、一五斗争の教訓にもとづき、「逮捕された時の諸注員」を近日中に文書にして発行したいと考えている。
一五斗争以後の救対活動については関東地区反戦連絡会議ニュースより以下要約する。

結成していたことは救対活動をきわめて容易にした。組織はいかなくその強みを發揮した。数万円を要した救対費用は全て地区反戦連絡会議加入の各地区反戦の組織的街頭カンパを中心に統一的に集約された。これなくしては救対活動は財政的に破綻していただろう。六七年の斗いを通じて蓄積された各地区反戦の力量は、このような弾圧に耐えうる力を有していることをこの間の救対活動は示している。今後の斗いに予想される弾圧に一層の救対体制の充実が必要である。そして救対活動の充実には斗いの強化による各地区反戦の組織的力量的増大によつて保障される。エンタープライズ斗争一週のうちに加えられた弾圧は我々をきたえ、各地区反戦の力量を倍加した。それはひとえに、各地区反戦の勢力的なエンタープライズ阻止の情

(2) 弾圧と救対活動日誌
一・一五 神戸領事館包囲デモ
労働者十名、学生二名検挙さる
関西地区反戦清田事務局長を中心にただちに救対設置、弁護士依頼、差入れ体制に取組む。
岡田、野沢、辛島、松本弁護士に依頼
一・一八 全員釈放かちとる
一・一九 大阪駅内集会で四名、鉄道公安に検挙さる。国鉄労組の支援をえて即日釈放かちとる。この時、機動的に追われ一市民と衝突、軽傷で入院、警察側は傷害事件に持込もうとしたが救対活動の結果これを阻止

宣活動、不当弾圧に対する暴露活動に多数の人々が結集したからで

(3) 岡田氏(全通堺支部、堺反戦前事務局長)は従来全通堺

- 一・二三 大阪駅頭デモで清田事務局長事後逮捕、救対活動
- 一・二六 清田事務局長釈放かちとる
- 二・七 清田事務局長、坂井氏(高槻反戦)神戸斗争で起訴さる。

岡田氏(堺反戦)救援について

組の既得権である無料通信で反戦ニュースを発足したという理由で一月末、停戦三ヶ月、罰金五千円という不当極る弾圧を受けた。これは全通大阪地本の強力な支部である全通堺支部に対し当局は昨年再二第二組合結成を計つたが失敗した。報復処置と反戦に対する弾圧として青年部の中心活動家岡田氏を狙うちしたものである。現に同じことを大規模に行つた第二組合には当局は処分を保留しているのである。我々は弾固としてこのような階級的攻撃に反撃すると共に計十万円近く差止められる岡田氏に対する救援カンパを行うことが必要である。既に堺反戦は岡田に五千円をカンパし、停戦期間三ヶ月の間反戦青年委各メンバー一人百円の義務カンパを総会で決定した。

全大阪反戦総会においても岡田氏支援が決定されている。各地区反戦の抗議斗争と救援活動を要請する。

関西地区反戦連絡会議救対部

編集後記

△佐世保の斗いから一ヶ月、あの高揚のもたらした、全国的な政治上、思想上の波紋を、私たちは、私たちなりの立場から全力をあげて組織してきた。この間各地区反戦では報告集会、記録映画会をやり、かなりの成果を収めてきている。

△この二十四日には東大阪、西淀川、天王寺で地区反戦が結成され城北で準備会が発足する。斗いは急テンポで進んでいる。この報告集が、七〇年安保の輝かしい斗いの里程碑となると共に、前進する組織活動の武器として広く使われることは私たちの共同の希いである。

△素人仕事で印刷、製本をしたため、粗雑な面もありますが、御了承下さる。

○原空母斗争報告集

「労働者はヘルメットをかぶつた」

○発行所

関西地区反戦連絡会議

尼崎市上ノ島北ヶ市三五〇

清田氣付

TEL 四二九一四四七六

○発行日

一九六八年二月二十二日

○発行責任者

清田祐一郎

○定価

百二十円

